

『楚辞』の蘭

夏井高人

1 『楚辞』について

1. 1 『楚辞』の成立

1. 1. 1 『楚辞』の典拠

『楚辞』は、古代中国の楚にあった古詩を収集した詩集だ。中国の戦国時代の楚の屈原（前343年～前278年）がつくった詩（賦）を集めたものだとされている。しかし、屈原自身が作成したことが確実な書物としての『楚辞』は、まだ発見されていない。

『楚辞』の最初の版とされる書物は、漢代（前漢）の学者・劉向（前77年～前6年）が編纂した『楚辞』だとされている。劉向は、『新序¹』、『説苑²』、『列女伝³』等の書籍の著者として知られている⁴。しかし、劉向が編纂したという『楚辞』は、古い時代に既に散逸してしまい、現存していない。

現在、『楚辞』という名で読まれている書物は、後漢の王逸（158年頃没）が屈原の詩（賦）と他の詩人の作品を合わせて編纂した『楚辞章句』⁵に基づくものとされている⁶。王逸の『楚辞章句』巻一「離騷」の序には、屈原が『楚辞』をつくった経緯について、次のようにある⁷。

屈原與楚王同姓 仕於懷王為三閭大夫 三閭之職 掌王族三姓 曰昭屈原景 屈原序其譜屬 率其賢良 以厲國士 入則與王圖議政事 決定嫌疑 出則監察群下 應對諸侯 謀行職修 王甚珍之 同列大夫上官靳尚妒害其能 共譖毀之 王乃疏屈原 屈原執履忠貞 而被讒表 憂心煩亂 不知所□ 乃作離騷經

これを意識すると、次のとおりとなる。

屈原と楚の王⁸は同姓であり、懷王⁹に三閭大夫として仕えた。三閭大夫の職は三姓の王族すなわち昭氏・屈氏・景氏を所掌した¹⁰。屈原はその家臣を監督し、その官僚を統率し、それによって国務を尽くした。宮殿の内にあつては、政事について王と議し、争訟について判断を下し、宮殿の外にあつては、人々を監督し、諸侯に應對した。その献策は実施され、任務を果たし、王はこれを尊重した。屈原と同列にある上官大夫の靳尚は屈原の才能に嫉妬し、屈原を謗った。王は屈原を退けるようになった。屈原は忠誠を尽くして執務していたが、讒言されて思い悩み、反論・抗弁しようにもその途が閉ざされてしまった。そこで、離騷をつくった。

1. 1. 2 成立年代と作者

現存している『楚辞』に含まれている詩（賦）の中には純粋に屈原作と言えるかどうか疑わしいものが含まれていることは古くから指摘されてきた¹¹。

「離騷」、「九歌」及び「九章」の3つの詩（賦）は屈原の作だとされてきた¹²。これに対し、「天問」、「卜居」、「漁父」、「大招」、「惜誓」、「招隠士」、「七諫」及び「哀時命」は中国戦国時代の楚の詩人（景差、賈誼?）の作とする説¹³、「九歎」は劉向の作で「九思」は王逸の作とする説、「九懷」及び「遠遊」は漢代の偽作とする説¹⁴、「九辯」及び「招魂」は宋宝（前290年～前222年）の作とする説¹⁵等々の見解があつて帰一しておらず、研究者によってその論拠もかなり異なる。強いて言えば、「離騷」については屈原の真作だと考える研究者が多いと言える程度ではないかと思う¹⁶。

『楚辞』を構成する個々の詩（賦）の成立年代とその作者については、今後の木簡・竹簡資料等の分析・検討の蓄積に基づく考察を含め、更に研究が深められなければならないだろう¹⁷。しかしながら、従来からなされてきたような古典資料の記載内容に基づいて存在と作者を推定する手法は全く無意味ではないと思う¹⁸。

古代の史料を見てみると、『漢書』の「藝文志」には「屈原賦二十五篇」とあるから、『漢書』が編纂された当時、それだけの数の詩が屈原の作として読まれていたと考えられる¹⁹。また、『史記』の「屈原賈生列傳」には、次のようにある²⁰。

屈原至於江濱 被髮行吟澤畔 顏色憔悴 形容枯槁
漁父見而問之曰 子非三閭大夫歟 何故而至此
屈原曰 舉世混濁而我獨清 眾人皆醉而我獨醒 是以見放
漁父曰 夫聖人者 不凝滯於物而能與世推移 舉世混濁 何不隨其流而
揚其波 眾人皆醉 何不鋪其糟而啜其醪 何故懷瑾握瑾而自令見放為²¹
屈原曰 吾聞之 新沐者必彈冠 新浴者必振衣 人又誰能以身之察察
受物之汶汶者乎 寧赴常流²²而葬乎江魚腹中耳 又安能以皓皓之白而蒙
世俗之溫蠖乎²³
乃作懷沙之賦 其辭曰 陶陶孟夏兮 草木莽莽 傷懷永哀兮 汨徂南土
眇兮窈窕 孔靜幽墨 冤結²⁴紆軫兮 離愍之長鞠 撫情效志兮 俛詘以
自抑

これを意識すると、次のとおりとなる。

屈原は、長江の河畔まで来た。髪をふり乱して歩き、湿地の傍らで吟じ、顔色は憔悴し、やつれた容姿となっていた。漁夫がそれを見かけて「あなたは三閭大夫様ではありませんか。なぜこのような辺鄙なところにおられるのですか」と声をかけた。

屈原は、「世の中は全て濁り切っていて、私だけが清浄だ。世間の人々は皆酔いしれているが、私だけが覚醒している。だから放逐されてしまったのだよ」と言った。

漁夫は、「聖人は、些事にこだわらないで世の移り変わりと一緒に変化するものです。世間が全て濁りきってしまっているというのなら、どうしてその流れに従わずに波風を立てるのでしょうか。世間の人々が皆酔っているというのなら、どうしてそのおこぼれをもらい、酒の残りをすすらないのでしょうか。どうして、心に宝を抱き、手に玉を握りしめ、自ら追放されるようなことをなさるのか」と言った。

屈原は、「私は、『髪を洗ったばかりの者は必ず冠を弾いて塵を払い、湯浴みをしたばかりの者は必ず衣服を振って塵を落とすものだ』と聞いている。潔白の身の者がどうして穢れた物を受け取ることができようか。そんなことになるくらいならば、河の流れに身を投じ、魚に飲まれてそ

の腹の中に入り、自らを葬ってしまったほうがまだましだ。純粹無垢な白色の上に世間の汚れを塗ってしまうことなどできるわけがない」と言った。

それから『懷沙』の詩(賦)をつくった。その詞に曰く、『夏のはじめ、草木が莽莽としている。心に痛手を負い悲しみは深い。水の流れにまかせて南に行く。見れば草木が深々と繁り、寂しく静まり返っている。憂鬱な気持ちに心がもつれ、災難に遭っていつまでも身を屈している。長く続く苦痛の感情を抑え、志を考え、身を屈して自分を抑制しているのだ・・・』²⁵

『史記』の「屈原賈生列傳」には、更に、太史公²⁶曰くとして、次のように述べている。

余讀離騷 天問 招魂 哀郢 悲其志 適長沙 觀屈原所自沈淵 未嘗
不垂涕 想見其為人

これを意識すると、次のとおりとなる。

私は、離騷、天問、招魂、哀郢を読んだ。その志は悲しい。長沙に赴き、屈原が身を投じたという淵を観た。思わず涙が流れ、その人についてあれこれ思い描いたものだった。

これら『史記』の「屈原賈生列傳」にある記述を前提とする限り、司馬遷が『史記』を編纂した時代には、少なくとも「漁夫」、「懷沙²⁷」、「離騷」、「天問²⁸」、「招魂²⁹」、「哀郢³⁰」が存在しており、屈原作の詩(賦)として読まれていたと推定することができる³¹。

1. 1. 3 芸術的価値

以上のような学術上の問題はある。しかし、そのことによって『楚辞』の芸術的価値が左右されるということはないと思う。『史記』の「屈原賈生列傳」は、次のように述べている。

屈原既死之後 楚有宋玉 唐勒 景差之徒者 皆好辭而以賦見稱 然皆祖屈原之從容辭令 終莫敢直諫 其後楚日以削數十年 竟為秦所滅

これを意識すると、次のとおりとなる。

屈原の死後、宋玉、唐勒、景差などの者があって、いずれの者も詩作を好み、賦の作者として知られていた。しかし、屈原のゆったりとした美しい辞を手本として詩作しつつも、あえて諫言する者はついに出ることがなかった。その後、楚は数十年間にわたり領土を削り取られ続け、そして、ついに秦によって滅ぼされることとなった。

楚の時代の詩（賦）に関しては、司馬遷の評は間違っていないのではないかと思う。屈原の高名とその詩（賦）は現在に至るまで残り、他の楚の詩人の名は忘れられてしまった。あるいは、司馬遷が『史記』の「屈原賈生列傳」にこのような記述をしたため、以後、屈原以外の詩人の作品が顧みられなくなってしまったのかもしれない³²。

1. 1. 4 日本の古典文学との関係

日本の菅原道真の「東風吹かば にほひおこせよ 梅の花 主なしとて 春を忘るな」³³は、まだ中央政界復帰の微かな期待を読み取れる点で「離騷」の絶望感とは若干異なるが、基本的には屈原の「離騷」的な心情を示すものとして解釈することができるように思う³⁴。

『楚辞』の詩を読むと、それがはるか遠い古代の中国でつくられた詩であるにもかかわらず、素朴に、「古代の日本と何らかの関連を有するかもしれない

い」ということを直観することができる。

『楚辞』の素養（知識・教養）のある漢人（華人）が朝廷の官僚として各種行政文書の作成だけではなく『古事記』や『日本書紀』等の史書の編纂に深く関与し、あるいは、『万葉集（萬葉集）』（以下『万葉集』と表記する。）や『懷風藻』に収録された歌や詞の幾つかを詠んだのだらうと推測される³⁵。古代に漢人（華人）が多数渡来し、倭人に漢字や漢文の手ほどきをしたと推定することは、ごく自然な発想だと考える³⁶。

『楚辞』に含まれている詩（賦）の中の幾つかは昭明太子『文選』³⁷の中に収録されている。この『文選』は、遅くとも推古天皇の時代（中国では隋の時代）には日本（倭國）に渡来しており、少なくとも日本の貴族階級の中では読まれていたものと考えられている³⁸。

古代中国の魏晋南北朝ないし五胡十六国³⁹の時代の文化は、日本国における精神文化の発展上で非常に大きな影響を与えていることは疑いがない⁴⁰。日本人の中で『楚辞』が好まれるような精神的素地もまた、そのような歴史を経て形成され醸成されたものではなかろうか⁴¹。

1. 2 『楚辞』における「蘭」

『楚辞』の中には「蘭」という語または「蘭」に類似する語が頻繁に出てくる。この「蘭」が何を指すのかについて、現在の日本国における中国文学上または本草学上での通説は、芳香のある植物であり、キク科フジバカマ属（*Eupatorium*）のフジバカマ（藤袴・蘭草）がこれに該当するとの説ではないかと思う⁴²。

しかし、『楚辞』に頻出する「蘭」なるものがフジバカマの類を指すのか、それとも、何らかのラン科植物（*Orchidaceae*）⁴³を指すのか、あるいは、ラン科植物でもキク科植物でもない別科の植物⁴⁴を指すのか、はたまた、植物ではない全く別の物体や現象⁴⁵を指すのかについては、「蘭」という文字それ自体からは必ずしも明確ではない。そもそも、「蘭」という表現が単なる修辞修飾的な表現（文飾）に過ぎないということも十分にあり得る。

日本における「蘭」の認識が正しいものなのかどうかを先に確定しておかないと、『楚辞』にある「蘭」の検討にも混乱が生ずる危険性がある。そこで、

「藤袴」とされる植物について簡単に検討してみることにする。

1. 2. 1 藤袴

日本では、『万葉集⁴⁶』の時代から「藤袴（ふじばかま）」を愛好しており、かつ、それが「蘭（蘭草）」に該当するとの理解が一般的ではないかと思う⁴⁷。しかし、このような理解は、実は根拠薄弱なものかもしれない。

日本の『万葉集』の中から「藤袴」を探してみると、巻第八に山上憶良⁴⁸が詠んだとされる「秋野花二首⁴⁹」がある。この二首の歌の「その二」は「芽之花⁵⁰ 乎花⁵¹ 葛花⁵² 瞿麦之花⁵³ 姫部志⁵⁴ 又藤袴 朝兒之花⁵⁵」というもので、この中に「藤袴」との語がみえる⁵⁶。この歌は、いわゆる万葉仮名で書かれており、そのままでは現代の日本人にとって理解し難い部分がある⁵⁷。現在、一般的に承認されている解釈では、この歌は、「萩の花、尾花、葛花、撫子の花、女郎花また藤袴、朝貌の花」といったような意味を持つものだと認識されている⁵⁸。

ところが、「藤袴」との語があるのはこの歌くらいのもので、これ以外の歌の中には「藤袴」の語が見当たらない⁵⁹。

この「藤袴」を「ふじばかま」と読むべきものかどうか⁶⁰、あるいは、仮に「ふじばかま」と読むとしても、それがどのような植物に該当するのか⁶¹、これらの点については実はよくわからない。当時、既に本草学が日本国に本格的に導入されており、それゆえに薬狩り⁶²が行われていたと考えられるので、『万葉集』にある草の名を訪ねるときには、そのことも考えに入れなければならない⁶³。

私見としては、「秋野花」の歌は、「茅（芽）⁶⁴、芒（乎）⁶⁵、葛（葛）⁶⁶、瞿麦（瞿麦）⁶⁷、敗醬（姫部志）⁶⁸、當歸（藤袴）⁶⁹、麻子（朝兒）⁷⁰」だと考える。つまり、この歌は、「蘭（蘭草・蘭花）」を全く含んでいない。

他方、『懷風藻』⁷¹にも「金蘭」や「蘭」との語が頻出する。これらを全て「藤袴」だと解する見解があるようだ⁷²。しかし、根拠があるとは考えられない。『懷風藻』にある「金蘭」⁷³は単なる比喩に過ぎず、また、「蘭」⁷⁴はその多くについて「藤袴」では説明できない要素を含んでいる。

以上のように考えるのだが、「藤袴」が「蘭（蘭草）」にあたりと解すると

すれば、それがどのような植物に該当するののかについても一応考えておかなければならない。

1. 2. 2 佩蘭と白頭婆

通説的な見解は、『楚辞』にある「蘭」とは「蘭草」であり、それは、佩蘭 (*Eupatorium fortunei* Turczaninow)⁷⁵のことを指すとしている⁷⁶。例えば、澁澤尚氏は、長沙馬王漢墓出土の植物標本を調査した結果、佩蘭 (*Eupatorium fortunei*) が該当すると鑑定されたとの事実を根拠にして、『楚辞』に現れる「蘭」とは、フジバカマ属植物 (*Eupatorium*) を意味するとしている⁷⁷。仮にそうだとすると、『万葉集』の「藤袴」もまた「蘭草」すなわち佩蘭 (*Eupatorium fortunei*) と解すべきか否かについては、検討すべき余地がある。

中国で佩蘭 (*Eupatorium fortunei*) と呼ばれている植物は、日本の植物分類学上ではフジバカマ (*Eupatorium japonicum* Thunberg) として分類されている植物と同一種だと推定される。この植物は、葉が三小葉状に細裂するという外部形質上の特徴を有する。

ここで、日本ではフジバカマ (*Eupatorium japonicum*) の特徴だとされている外部形質をもつ植物が中国では佩蘭 (*Eupatorium fortunei*) として認識されているということには留意すべきだと考える。日本と中国とでは学名が異なる。中国において「*Eupatorium japonicum*」との学名を有する植物について、Flora of China⁷⁸は「白頭婆」との名を与えている⁷⁹。

白頭婆 (*Eupatorium japonicum*)⁸⁰は、葉が小葉に細裂しない外部形質上の特徴をもつ植物を指す。日本に自生している植物の中で中国の白頭婆 (*Eupatorium japonicum*) に最も近い植物は、ヒヨドリバナ (*Eupatorium makinoi* T.Kawahara et Yahara) だと考えられる。ヒヨドリバナは、葉が三小葉状に分かれない⁸¹。

「白頭婆」の日本語風の音読み「はくとうば」は、「ひよどりばな」という音と類似しているように思う。「ヒヨドリバナ」との命名の由来については、「ひよ鳥の啼く時節に咲くことからこの和名がある」⁸²と解する見解が一般的だ。しかし、本当は「白頭婆」の字から読み得る類似の音だったものが長い年月の間に変化してしまい、本来の意味が全く不明となってしまったため

に、類似の音を類推的にあてて「鵝花（鵝華）」⁸³とすることとしたものかもしれない。他方で、「白頭婆」を日本語の音読みと訓読み混在のような感じで読んでみると、「はっずば」または「はじば（はずば）」と読めないことはなく、この読みは、「ふじばかま」の「ふじば」という読みと類似している。『本草和名』では「蘭」の倭名について「布知波加万」との音だけが記載されており、この「布知波」だけを切り離すと「白頭婆」と酷似している⁸⁴。要するに、「ふじばかま」との音は「白頭婆」の日本語読み（倭訓）から変化して形成された音かもしれないとの仮説が成立し得る⁸⁵。

1. 2. 3 蘭花の可能性

そこで、現在一般に承認されている植物分類学上及び植物生理学上の知見と矛盾することなく「蘭」を同定し、説明することが可能かという観点から、『楚辞』にある「蘭」との語句を仔細に検討してみると、その中には、明らかにキク科フジバカマ属の植物 (*Eupatorium*) ではないものを「蘭」と記しているものがあることを理解することができる。

一般に、「蘭」と呼ばれている植物の中に多種多様なものが含まれていることは、中国の本草学者によっても認識されてきた。例えば、宋代の寇宗奭『本草衍義』は、「蘭草」について、次のように言っている。

諸家之説異同 是曾未的識 故無定論 葉不香 惟花香 今江陵 鼎澧州山谷之間頗有 山外平田即無 多生陰地 生於幽谷 益可驗矣 葉如麥門冬而闊且韌 長及一 二尺 四時常青 花黃 中間葉上有細紫點 有春芳者 為春蘭 色深 秋芳者為秋蘭 色淡 秋蘭稍難得 二蘭移植小檻中 置座上 花開時滿室盡香 與他花香又別 唐白樂天有種蘭不種艾之詩 正為此蘭矣

これを意識すると、次のとおりとなる。

諸家の言うところはばらばらで、見解の一致をみない。ゆえに定説はない。葉は香らず、花のみが香る。今日、江陵（現在の湖北省周辺）、鼎

州（現在の湖南省常德市周辺）、澧州（現在の湖南省澧県周辺）の山谷には非常に多い。山ではない平野にはない。多くは日蔭の場所に生え、幽谷に生え、奥深いところほど見つけることができる。葉は麥門冬⁸⁶のように艶やかで強靱、長さは1尺～2尺ほど、四季を通じて緑色をしており、花は黄色で、真ん中の花弁には紫の点がある。春に花が香るものは春蘭である。花の色は濃い。秋に花が香るものは秋蘭である。色は淡い。秋蘭は、入手がやや難しい。この2種の蘭を石台に移植し、室内に置いて育ててみたところ、開花時には室内が香りで充満したが、その香りは異なっていた。唐の白楽天に艾ではない蘭の詩がある。

ラン科植物とりわけ東洋蘭⁸⁷を実際に栽培した経験を有する者であれば、この『本草衍義』の記述の正確性・客観性に驚嘆することだろう⁸⁸。

さて、『本草衍義』に引用されている白居易の詩とは、「問友」⁸⁹のことを指す。その詞は次のとおりとなっている。

種蘭不種艾 蘭生艾亦生
根荻相交長 莖葉相附榮
香莖與臭葉 日夜俱長大
鋤艾恐傷蘭 溉蘭恐滋艾
蘭亦未能溉 艾亦未能除
沉吟意不決 問君合何如

これを意識すると、次のとおりとなる。なお、この「問友」という詩にいう「艾」とは、特定の種類に属する植物を指すのではなく、総称として「雑草」という程度の意味しかないのではないかと思う⁹⁰。

蘭を植えているが艾は植えていない。蘭が生えると艾が生える。根と地下茎が互いにかみ合って伸びる。茎と葉が重なりながら繁る。茎が香り、葉が匂う。日夜成長し続ける。除草の時には蘭を傷つけないかと恐れる。施肥をすると艾を肥やすことになるのではないかと心配する。

蘭を養いながら同時に艾を除去することができない。

どうしたらよいのかわからない。どうすべきなのか、君に尋ねたい。

この詩を素直に読む限り、この詩にいう「蘭」がラン科植物 (*Orchidaceae*) に該当すると断定することができるだけの決定的な言辞・文言を含んでいるようには読めない。

しかしながら、北宗の蘇東坡（蘇軾）の「題楊次公春蘭」（『蘇軾詩集』卷三十二）⁹¹には、次のようにある。

春蘭如美人 不採羞自獻
時聞風露香 蓬艾深不見
丹青⁹²寫真色⁹³ 欲補離騷傳
對之如靈均⁹⁴ 冠佩不敢燕

これを意識すると、次のようになる。

春蘭は麗人のようなもので、装わず、見せびらかすことを恥じる。
時季になると風がその香りに気づかせるが、草深いと姿が見えない。
屈原の才知は正真正銘のものなので、離騷の傳に倣おうと思う。
屈原のようにしてこれと向きあい、佩を冠とし、あえて宴をしない⁹⁵。

この「題楊次公春蘭」を合わせて考えてみると、結果として、白居易の「問友」にある「蘭」はラン科植物 (*Orchidaceae*) だと考えることができる。そして、その候補としてはシュンラン (*Cymbidium goeringii* (H. G. Reichenbach) H. G. Reichenbach) ⁹⁶または墨蘭すなわち報歳蘭 (*Cymbidium sinense* (Jackson ex Andrews) Willdenow) ⁹⁷が該当すると解するのが妥当だと思う⁹⁸。

この2種の蘭花の中では、前述の『本草衍義』の「蘭草」には「有春芳者為春蘭 色深」とあるので、この記述と現在の分布を重視すれば⁹⁹、墨蘭すなわち報歳蘭が該当する可能性が高いと考えるのが妥当だと思われる。中国では、古来、春節（中国旧暦の正月・グレゴリオ暦では、毎年1月末～2月初旬）に新年を迎えるための飾りとして報歳蘭を用いてきた。それゆえ、「報歳」

との名があると解されている（別の解釈もある¹⁰⁰）。

漢の武帝以前の時代においては、当時の暦の10月ないし12月頃を正月としていた時期があるので、そのことに十分に留意しなければならない¹⁰¹。とはいえ、グレゴリオ暦で10月から翌年2月頃までの時期（冬～春）には、キク科フジバカマ属植物の地上部は全て枯れてしまっており、その姿を見ることができない。強いて言えば、環境条件や気象条件等により、翌年に展開する新芽が前年に少しだけ姿を現し、そのような状態のままで越冬することはあり得る。しかし、この時期にその草丈が伸びて開花することは絶対にあり得ない。一般に、キク科フジバカマ属植物は、いずれも大きく成長して栄養を蓄積しないと花を咲かせることがないというだけではなく、短日植物（短日花）という植物生理学的な特性を有するものなので、日照時間が少しずつ短くなる秋にならなければ開花ホルモンが放出されない。つまり、冬至を過ぎて日照時間が次第に増えてゆく時期に開花することは決してあり得ない。しかも、キク科フジバカマ属植物の花が芳香を放つことはない¹⁰²。

1. 2. 4 その他の植物の可能性

『本草綱目』では、「蘭」の解釈について様々な混乱・混同が存在するという事実を踏まえ、キク科フジバカマ属植物 (*Eupatorium*) 及びこれに類するものを「蘭草」と呼び¹⁰³、それ以外の植物を「蘭花」と呼ぶこととして、区別して扱う考え方を提示している¹⁰⁴。以後、「蘭」がキク科植物を指す場合には「蘭草」との名を用い、ラン科植物を指す場合には「蘭花」との名を用いるのが通例となっている¹⁰⁵。

しかし、「蘭」と名のつく植物の全てが「蘭草」または「蘭花」のどちらかに該当するというわけではない。そのいずれにも該当しない植物がある。

特に古代の中国において「芝蘭」または「蘭芷（蘭菝）」と呼ばれていた植物を「蘭」に含めて考える場合、これらの植物は、セリ科やシソ科等の植物に該当する可能性が高く、相当広い範囲の植物を「蘭」として扱わなければならないことになる¹⁰⁶。

1. 2. 5 本稿の目的

ここまで述べてきたように、中国においては、古来、「蘭」がキク科植物 (*Asteraceae*) を指すこともあればラン科植物 (*Orchidaceae*) を指すこともあったと考えられる。また、他の科の植物を指す可能性もある。

以上のような問題点のあることを踏まえ、更に多角的に検討してみた。

その結果、『楚辞』にある「蘭」を一律に特定の種に属する植物を指すものとするのは誤りで、それぞれの詩ごとに逐一丹念な検討を重ね、その詩にある「蘭」を個別に同定することを要するに至った¹⁰⁷。

本稿では、『楚辞』の「九歌」に特に着目し、「九歌」に含まれている詩の中で「蘭」を含むものを適宜選択し、その「蘭」なるものがどのような植物を意味しているのかについて検討してみようと思う¹⁰⁸。

2 『楚辞』の「九歌」について

2. 1 語としての「九歌」の意義

語としての「九歌」の古い使用例は、『春秋左傳』にある。

『春秋左傳』の「文公七年」には、「夏書曰 戒之用休 董之用威 勸之以九歌 勿使壞 九功之德 皆可歌也 謂之九歌 六府三事 謂之九功 水火 金 木 土 穀 謂之六府 正德 利用 厚生 謂之三事 義而行之 謂之德禮 無禮不樂 所由叛也 若吾子之德 莫可歌也 其誰來之 盍使睦者歌吾子乎 宣子說之」とある。

また、『晏子春秋』¹⁰⁹の「外篇・景公謂梁丘據與己和晏子諫」には「故詩曰 亦有和羹 既戒且平 奏醜無言 時靡有爭¹¹⁰」、「先王之濟五味 和五聲也 以平其心 成其政也 聲亦如味 一氣 二體 三類 四物 五聲 六律 七音 八風 九歌 以相成也 清濁 大小 短長 疾徐 哀樂 剛柔 遲速 高下 出入 周流 以相濟也」、「君子聽之 以平其心 心平德和」とある。

この『晏子春秋』にある「九歌」について、杜預は、「九功德 皆可歌也 六府三事 謂之九功 (九功の徳のことで、全て謡うことができる。九功とは六府三事のことをいう)」と注釈している¹¹¹。「六府三事 (九功)」の内容は、『春

秋左傳』の「文公七年」にあるのと同じで、「水 火 金 木 土 穀」の六府と「正徳 利用 厚生」の三事を指す¹¹²。

他方、『楚辞』の「離騷」第九段には「啟九辯與九歌兮 夏康娛以自縱 不顧難以圖後兮 五子用失乎家巷（夏王啓は九辯と九歌を愉しみ、その子孫は好き放題に楽しんだ。難局に対応することがなく国の将来を考えることもなかったので、5人の子らはその家を失うこととなった）」との一節がある。

ここでいう「九歌」は、『楚辞』の「九歌」のことではなく、『春秋左傳』等の中に示されている伝説の「九歌」のことを指す¹¹³。『楚辞』の「離騷」第十五段には、「奏九歌而舞韶兮 聊假日以愉樂（九歌を演奏して韶を舞い、しばらく時間を潰してこれを楽しむ）」とある¹¹⁴。屈原にとって「九歌」との語は、複雑な心境を示す表現の場合があり得ることを理解することができる。

2. 2 『楚辞』の中における「九歌」の位置づけ

『楚辞』の「九歌」の由来について、『楚辞章句』卷二の序には、次のようにある¹¹⁵。

九歌者 屈原之所作也 昔楚國南郢之邑 沅湘之間 其俗信鬼而好祠祀 其詞必作歌樂舞鼓 以樂諸神 屈原放逐 竄伏其域懷憂苦毒愁思沸鬱 出見俗人祭祀之禮歌舞之樂其詞鄙陋 困為作九歌之曲

これを意識すると、次のようになる。

九歌は屈原がつくったものである。かつて、楚國の首都南郢の里や沅水から湘水のあたりでは、人々が鬼神を信じてその祭祀を行っていた。祭祀で行われる祝詞は常に歌と音楽と舞踏と太鼓を伴うもので、これにより諸神を楽しませた¹¹⁶。屈原は、追放されてそのあたりに隠れ棲んだが、憂いを抱いて苦しみ、思い悩み続けた¹¹⁷。屈原は、外に出て里人の祭祀の禮を目にし、歌や舞の音楽やその詞を耳にして、これを粗野なものだと感じた。そこで、九歌の曲をつくった。

この『楚辞章句』第二の序にある記述が正しいとすれば、屈原が放浪していた当時、楚の村々には古い楽曲の旋律だけではなく歌詞も存在しており¹¹⁸、それが「九歌」の基礎となっていると推定することも可能だろう¹¹⁹。

『楚辞』全体の中における「九歌」の位置づけについても諸説あり、一定していない。しかし、『楚辞章句』では、巻一に「離騷」を収録して序を付し、これに続く巻二には「九歌」を収録して序を付しているので、『楚辞章句』を編纂した王逸の考え方を理解することはできる。

2. 3 「九歌」の構成

屈原の作とされる「九歌」は、合計9個の詩で構成されているような名前になっている¹²⁰。しかし、実際には、「東皇太一」、「雲中君」、「湘君」、「湘夫人」、「大司命」、「少司命」、「東君」、「河伯」、「山鬼」、「國殤」及び「禮魂」という合計11個の詩で構成されている。

このように標題と実際の個数との間に不一致があることについては諸説あるが、(真の作者は誰なのかという問題を含め) 推測の域を出ていないように思われる¹²¹。本稿ではこの点に深入りしないことにする。

3 『楚辞』の「九歌」にある「蘭」の検討

『楚辞』の「九歌」に含まれている詩の中で、「禮魂」、「東皇太一」、「雲中君」、「湘君」、「湘夫人」及び「少司命」の中には「蘭」という語が出現する。そこで、これらの詩にある「蘭」とそれに関連する他の植物等について解釈・検討を試みる¹²²。必要に応じてこれらの詩以外の詩にも触れる¹²³。

3. 1 禮魂

「九歌」の九番目の詩として収録されている「禮魂」には、「春蘭」との語句がある。

成禮兮會鼓 傳芭兮代舞 姱女倡兮容與

春蘭兮秋菊 長無絶兮終古

これを意識すると、次のとおりとなる。

拝礼し、鼓¹²⁴を打つ。順に芭を手渡し、代わる代わる舞う。巫女¹²⁵は歌い、その姿よし。

春蘭と秋菊。長く絶えることなく、いつまでも続く¹²⁶。

【魂】

この「禮魂」にある「魂」とは、特定の個人（故人）の御霊に対する慰霊という趣旨ではなく、祖先に対する崇敬の念を示すものとして毎年繰り返される宮廷祭祀を意味しているのではないかと思われる。その祭祀の様式は、『禮記¹²⁷』等に記されている夏や周の時代の祭礼様式と似ている部分が多くあるように思う¹²⁸。

【芭】

「芭」は、「艸」と「巴」を組み合わせた漢字なので、古代の楚国の西方（現在の四川省重慶市付近）にあった巴¹²⁹の国の草といったような意味をもつものではないかと思う¹³⁰。

「巴」を名にもつ薬草としては「芭茅」がある。「芭茅」は、イネ科ススキ属のススキ (*Miscanthus sinensis*) と非常に良く似た植物で、生薬「芭茅」の基原である五節芒 (*Miscanthus floridulus* (Labillardière) Warburg ex K. Schumann & Lauterbach) を指す。現在でも生薬原料として重慶市周辺で栽培・生産されているらしい。もしかすると、秋には巫が芭茅を手にして踊りながら祭祀を挙行了したものかもしれない¹³¹。

【春蘭と秋菊】

この詩に出てくる「春蘭」と「秋菊」だが、単に情趣という趣旨¹³²で季節の名が記されているのではなく、農耕の始まる前の収穫を祈願する時期の祭礼と農耕が終わり収穫に感謝する祭礼という季節的かつ決定的な制約のある祭祀暦と関連付けられたものだと理解するのが妥当ではないかと思う¹³³。

一般に、農耕民族では耕作のために天文の知識を要する¹³⁴。そして、現在考えられているよりもはるかに精密な天文学上の知見に基づき、正確な暦がつくられ運用されていた¹³⁵。

そのような理解を前提にすると、この詩において「春蘭兮秋菊 長無絶兮終古」と表現されている「春」とは、苗の作付けが始まる前のまだ寒い時期のことを指し、「秋」とは、作物の収穫を終えた後のかなり寒くなっている時期のことを指すのではないかと推定することができる¹³⁶。

【秋菊】

『禮記』の「月令」には季春の月（3月）のことが記され、「是月也 天子乃薦鞠衣于先帝 命舟牧覆舟 五覆五反 乃告舟備具於天子焉 天子始乘舟 薦鮪于寢廟 乃為麥祈實（この月には、天子は、鞠衣を上帝に供え¹³⁷、舟牧に命じて舟を裏返させ、（舟牧は舟を）5回裏返し5回戻してその舟の状態を天子に報告する。天子は、その年初めて舟に乗り、鮪を祖廟に献じて穀類の豊作を祈願する）」とある。この「鞠衣」の意義について、『釋名』の「釋衣服」には「鞠衣 黄如菊花色也（鞠衣とは、菊の花の色のような黄色（の衣）のことである）」とある¹³⁸。

『漢書』の「揚雄傳上」には、「精瓊靡與秋菊兮（精巧につくられた瓊（赤色の玉）の贅と秋菊）」とある¹³⁹。また、『呂氏春秋』の「季秋紀・九月紀」に「菊有黄華（菊があり黄色の花を咲かせる）」とある。そして、『淮南子』の「時則訓」¹⁴⁰にも「菊有黄華（菊があり黄色の花を咲かせる）」とある。

以上から、古代の中国においては、「菊」は、秋に黄色の花を咲かせる植物として認識されていたと考えることができる¹⁴¹。

屈原の時代の中国（楚）において「菊」がどのような植物を指したのかについては、よくわからない。この点については丁寧に検討する必要がある、現代における通念や常識のようなもののみに従って考えることは危険なことだと考える。

そこで、現在の植生と古代の植生とは異なっている可能性が大きいことを考慮にいれつつ、現在の湖南省に自生または栽培されている植物を調べてみると¹⁴²、主に黄色または白色の花を咲かせる野生種のキク科キク属の植物としては、野菊（*Chrysanthemum indicum* L.）¹⁴³と甘菊（*Chrysanthemum*

lavandulifolium (Fischer ex Trautvetter) Makino)¹⁴⁴があり、栽培品としては、菊花 (*Chrysanthemum ×morifolium*) と春菊 (*Chrysanthemum coronarium* L.) がある。

菊花 (*Chrysanthemum ×morifolium*) は、屈原の時代から 1000 年ほど隔てた唐代以降に作出された一群の園芸品種の総称として扱うべきなので、自然交雑もあるかもしれないが、本稿での検討では除外して良いと考える。春菊 (*Chrysanthemum coronarium* L.) は、秋咲きではなく、野菜としての栽培品なので除外する¹⁴⁵。

次に、湖南省に自生する植物の中から主として紫色または白色の花を咲かせるキク科シオン属の植物を調べてみると¹⁴⁶、三基脉紫菀 (*Aster trinervius* Roxburgh ex D. Don)、湖南紫菀 (*Aster hunanensis* Handel-Mazzetti)、白舌紫菀 (*Aster baccharoides* (Benth) Steetz)、莽山紫菀 (*Aster mangshanensis* Y. Ling)、琴葉紫菀 (*Aster panduratus* Nees ex Walpers)、短舌紫菀 (*Aster sampsonii* (Hance) Hemsley)、岳麓紫菀 (*Aster sinianus* Handel-Mazzetti) 及びこれらの植物の亜種・変種がある¹⁴⁷。

更に、湖南省に自生する植物の中でキク科の別の属の植物の中から綺麗な黄色の花を咲かせる植物種を探してみると¹⁴⁸、キク科キオン属の千里光 (*Senecio scandens* Buchanan-Hamilton ex D. Don)、湖南千里光 (*Senecio actinotus* Handel-Mazzetti)、西南千里光 (*Senecio pseudomairei* H. Léveillé)、林蔭千里光 (*Senecio nemorensis* L.)、閩粵千里光 (*Senecio stauntonii* Candolle) がある¹⁴⁹。

また、キク科ツワブキ属の大呉風草 (*Farfugium japonicum* (L.) Kitamura)¹⁵⁰ がある。大呉風草 (大呉風草) は、日本では「ツワブキ」との名で知られる植物で¹⁵¹、湖南省内に広く自生している。

そこで、古い本草書を調べてみると、『神農本草經』には、「菊華」の説明として、「味苦平 主治風頭 頭眩腫痛 目欲脫 淚出 皮膚死饑 惡風濕痺 久服利血氣 輕身耐老延年 一名節華 生川澤」とあり、水辺に生える植物とされているが、花の色の記載はない。『神農本草經』にある「生川澤」との記載と矛盾しない植物を検討してみると、候補としては、キク科キオン属のサワオグルマ (*Senecio pierotii* Miquel) やキク科ツワブキ属のツワブキ (*Farfugium japonicum*) のような植物を考えることができる。

『呉晉本草』には、「菊華」の説明として、『初學記』を引用し「一名白華

一名女華 一名女室」とある。「白華」とある以上は白花品だったと解するしかなく、キク科シオン属 (*Aster*) の植物と推定するのが妥当だろう。

これらを踏まえて考えてみると、屈原の時代を含む中国の古代において「菊華」として表現された植物が、実はツブキやサワオグルマまたはそれらの種の近縁種だった可能性を否定することはできない。また、黄色にこだわらなければ、キク科シオン属の植物も該当し得る。

そして、唐代以降については、黄色の花を咲かせる野菊 (*Chrysanthemum indicum*) 及び各種園芸品種である菊花 (*Chrysanthemum × morifolium*) が「菊華」に該当するものと推定するのが妥当だろう。とりわけ、朱熹などの『楚辞』の校訂者らは唐代以降の貴族階級に属する人々なので、その脳裡にあったのは貴族の庭園に植栽された豪華な園芸品である菊花 (*Chrysanthemum × morifolium*) だったかもしれない¹⁵²。

【春蘭】

「春蘭」については、現在の季節でいうと正月から春分前後の季節に花を咲かせる「蘭」だと解釈する以外にはないと考えられる。前述のとおり、そのような「蘭」は、無論、キク科のフジバカマ属植物の類ではあり得ない。また、わざわざ「秋菊」と対比させて「春蘭」と記しているので、キク科植物とは異なる生態と開花時期をもつタイプの植物を指すと推定するのが合理的だと思う。

『説文解字』には「蘭」の字義として「香艸也」とある¹⁵³。現代社会においても、ハーブティ等に用いる香りの良い葉は、植物としての種別とは全く無関係に、とにかく「香りの良い葉」一般を指すものとして「ハーブ」という名が用いられる例がある。このような意味で「蘭」が用いられている場合には、単なる修辞の一種に過ぎない。

以上を踏まえ、『説文解字』で示されるような芳香を放つ植物（香草）で、かつ、春と関係する植物をラン科植物の中から探してみると、候補となる植物としては、春蘭 (*Cymbidium goeringii*)¹⁵⁴、報歳蘭 (*Cymbidium sinense*)¹⁵⁵、蕙蘭 (*Cymbidium faberi* Rolfe)¹⁵⁶、虎頭蘭 (*Cymbidium hookerianum* H. G. Reichenbach)¹⁵⁷、硬葉蘭 (*Cymbidium mannii* H. G. Reichenbach)¹⁵⁸といった植物を想定するのが妥当なのではないかと考える。

そして、現在の湖南省内に自生するラン科シュンラン属植物を調べてみると¹⁵⁹、上記の春蘭、墨蘭（報歳蘭）、蕙蘭のほか、建蘭（*Cymbidium ensifolium* (L.) Swartz）、寒蘭（*Cymbidium kanran*）、多花蘭（*Cymbidium floribundum* Lindley）、兔耳蘭（*Cymbidium lancifolium* Hooker）がある¹⁶⁰。

これらの中で湖南省内において早春～春に花を咲かせ芳香を漂わせる「春蘭」としては、春蘭（*Cymbidium goeringii*）と墨蘭（*Cymbidium sinense*）が該当すると考えるのが妥当だと考える。これに対し、ラン科以外の植物としては、春の早い時期に香りの良い花を咲かせている植物を探し出すことは困難だと思われる¹⁶¹。

【長無絶兮終古】

「禮魂」末尾の「長無絶兮終古」の解釈は難しい。仮に「春蘭」と「秋菊」が「長無絶兮終古」であることにかけて、祭礼・祭祀も不滅であるという趣旨なのだとすれば、「春蘭」と「秋菊」は夏にも冬にも枯れない常緑性の植物だということになる。

そのような常緑性の植物に該当するものを検討してみると、「禮魂」にある「春蘭」としてはシュンラン（*Cymbidium goeringii*）のようなラン科シュンラン属の植物と解し、また、「秋菊」はツワブキ（*Farfugium japonicum*）と解するのが最も妥当ということになりそう¹⁶²。

他方、「長無絶兮終古」の意義について、『春秋』の時代の「禮」を永遠に讃えるという趣旨だと考えることも可能だろう。また、「禮魂」は、『禮記』にある「九歌」の中のどれかを原典に最も近い形で残している詩（歌）だとの仮説をたてることも可能かもしれない。そして、「禮魂」から感じ取ることのできるような精神文化は、日本にも伝わり伝承されてきた可能性がある。例えば、雅楽だけではなく、能（申樂）のような文化・芸能の中に形を変えて今日まで伝わっているのかもしれない¹⁶³。

3. 2 東皇太一

『楚辞』の「九歌」の最初の詩として収録されている「東皇太一」には、「蕙餼」を蒸す際に用いるものとして「蘭」との記述がある。

吉日兮辰良 穆將愉兮上皇
撫長劍兮玉珥 璆鏘鳴兮琳琅
瑤席兮玉璵 蓋將把兮瓊芳
蕙餼蒸兮蘭藉 奠桂酒兮椒漿
揚枹兮拊鼓 疏緩節兮安歌 陳竽瑟兮浩倡
靈偃蹇兮姣服 芳菲菲兮滿堂
五音紛兮繁會 君欣欣兮樂康

これを意識すると、次のとおりとなる。

吉日にて時もよし¹⁶⁴。つつしんで上皇を祀ろう。
長劍の玉珥¹⁶⁵を撫でると¹⁶⁶、璆鏘と鳴り、琳琅と鳴る¹⁶⁷。
瑤の蓆を敷いて玉を置き¹⁶⁸、つまみを摘んで蓋（ふた）を開け、瓊芳を捧げる¹⁶⁹。
蕙餼¹⁷⁰を蒸すには蘭を敷き、美酒と山椒の香りをつけた醬¹⁷¹を注ぐ¹⁷²。
枹を掲げて太鼓¹⁷³を打ち、節ゆるやかにし、安らかに歌を謡い、竽や瑟を奏で、唱和する。
美しく着飾った巫が舞い踊り、芳香¹⁷⁴が堂いっぱい満たされる。
五音交えて合奏すれば、君はとても喜び、楽しみ、安んずる。

【東】

「東皇太一」の意義・解釈については、諸説ある。

「東」の意義について、『説文解字』には「杲明也 从日在木上」、「東動也从木 官溥説从日在木中」及び「杳冥也 从日在木下」とあるのみだが、清代に編纂された『説文解字注』には、「動也 見漢律曆志 従木」、「官溥説 従日在木中」、「木 樽木也」、「日在木中日東 在木上日杲 在木下日杳」とある。「樽木」とは「扶桑」を意味する¹⁷⁵。

『説文解字』及び『説文解字注』に示されているような「東」の理解が正しいかどうかは別として、ごく最近まで、このような考え方が中華思想の中核として機能し続けていたという事実は否定できない。天文学・地理学的に見ても、(地球の自転という物理現象の結果として) 太陽(日)が昇るのは常

に東方からだ。それゆえ、方角としての「東」と太陽とが密接に関連するものだと観念は、相当古い時代からあったと推定できる¹⁷⁶。

一般的には、「東皇」で熟語とし、天帝または天子（帝）のことを意味すると解されている¹⁷⁷。

【太一】

「太一」は「太乙」とも書かれ、一般に、太陽を意味する¹⁷⁸。日本の神道では天照大神を示すものとされている¹⁷⁹。

「太一」を含む古代文献としては、郭店楚墓竹簡に含まれる『太一生水』が特に有名だ。この『太一生水』という竹簡には、万物創生のプロセスに関して、太一から始まり、天地、神明、陰陽、四時と進むということが示されている¹⁸⁰。

また、長沙子彈庫戦國楚墓出土帛書（楚帛書）に含まれている『黄帝四経』の「経法・名理」には「道者 神明之原也」、「神明者 處於度之内而見於度之外者也」、「處於度之内者 不言而信 見於度之外者 言而不可易也」、「處於度之内者 靜而不可移也 見於度之外者 動而不可化也」、「靜而不移 動而不化 故曰神」、「神明者 見知之稽也」とある¹⁸¹。

また、『長沙子彈庫楚帛書（楚帛書）』に含まれている『甲篇』には、古代の大龍（天帝）である「伏羲」の出自について、「出自□[華][胥] 居於[雷] □[夏] [厥佃][漁漁] □□□[如] 夢夢墨墨 [盲]章弼弼 □每水□ 風雨是[闕] 乃[娶]子之子 曰女皇 是生子四□ 是襄天踐（天地） 是[格] 參[化]」等々とある。つまり、混沌から始まり、神明（女皇¹⁸²）と進むことが示され、これに続く文では、更に、陰陽、四時へと進むことが記されている。要するに、「太一」とするか「混沌¹⁸³」とするかの相違はあるが、基本的な骨格は同じと考えることができる。

「東皇太一」が興味深いのは、楚の国にあって、「混沌」ではなく「太一」としていることにある。中国大陸の南北で文化圏が分かれると単純に考えるだけでは済まずことのできない重要な研究課題が伏在しているように思う。

ちなみに、古い本草（薬草）の中には「太一」をその名にもつものがある。「太一余糧」という。「太一余糧」は、「代赭石（代赭）」の別名で、「須丸」とも呼ばれている。

『本草綱目』は、「代赭石」について、『外丹本草』を引用して、「代赭 陽石也 與太一余糧並生山峽中 研之作朱色可點書 又可罨金益色赤 張華以赤土拭寶劍 倍益精明 即此也」として「太一余糧」に触れている。また、『本草綱目』は、『名醫別錄』を引用して、「代赭生齊國山谷 赤紅青色如雞冠」としている。『神農本草經』には、「代赭」について、「味苦寒 主治鬼注 賊風 蠱毒 殺精物惡鬼 腹中毒邪氣 女子赤沃漏下 一名須丸 生山谷」とある。

現在、「代赭石」の中で赤色の「代赭」として扱われているものは酸化鉄 (Fe_2O_3) を含む鉱石の一種で、これを粉砕して生成した粉末は「ベンガラ」との名で知られる赤色塗料の原料となる¹⁸⁴。「太一」の概念との関連で、その色が赤であることには注目すべきことだろうと思う。

「太一余糧」の和名は「伊波都保与利也宇 (イハツボヨリヤウ)」とされている¹⁸⁵。「伊波都保与利也宇 (イハツボヨリヤウ)」の「与利也宇 (ヨリヤウ)」が「余糧」だとすれば、「伊波都保 (イハツボ)」は「太一」になるはずだ。しかし、「太一」は、和音でも漢音でも「イハツボ」とはならない。

そこで考えると、「イハツボ」は、溶けた鉱石を流し込む岩石製の鑄型すなわち「岩壺 (石壺)」を指し、そこに流れ込む溶けた鉱石の太陽の如き様子を「太一」として観念したもの、あるいは、「鑪 (たたら)」の中で溶解している鉱石を指すものだったかもしれない¹⁸⁶。

あるいは、古くは銅鏡を「太一」として観念したものだとも考えられる。このように解する場合、「余糧」は、本来は、金属器製造の際にできる残滓としての酸化鉄や銅器製造の際の硫化物残滓を指し、この残滓を次の精錬の際に新たな鉄鉱石と一緒に混ぜて原料鉱石の量を増加させることによって、あたかも「太一」の精力が復活したかのようにみえることから、いつの時代のころからか、その残滓の粉末を薬用その他の用途に用いるようになったのかもしれないと考えられる¹⁸⁷。要するに、「太一」の信仰は、金属器を用いる民族と関係があると言い得る¹⁸⁸。

古代の日本国 (倭國) において、青銅器や鉄器の鑄造を得意とした氏族が存在したことは疑う余地がない¹⁸⁹。しかし、その氏族が具体的にどの氏族だったのかについては、諸説あり帰一していない¹⁹⁰。

【瑤】

「瑤」は、透明な水晶のような玉石と理解することができる¹⁹¹。「瑤席」は、瑤で飾りをつけた織物（敷物）のようなもの、または、宝石のように美しい刺繍をした織物（敷物）を意味すると考えられる。そのような敷物の上に玉を置いて配置する儀礼があったのかもしれない。

あるいは、祖神または天子を示す磐座のようなものがあり、それに従うようにして諸侯を示す小さな石が配置してあって、それを拝礼したものかもしれない。侗族（貴州省）の祭礼の中には、日本の神社等の祭礼と酷似したものが多数あり、磐座と類似する自然岩、石積み、祠等を祀っている様子を知ることができる¹⁹²。侗族（貴州省）の服飾・文化には、日本人の伝統的な服飾・文化と類似する部分がかかなり多くある。また、侗族（貴州省）の中には、太陽を信仰する部族、月を信仰する部族、土地を信仰対象とする部族、雷、虹、雨等の自然現象を神として信仰する部族、火や水を信仰する部族、牛、羊、蛇等の動物や風水樹と呼ばれる古樹を信仰する部族がある¹⁹³。日本の古代における信仰形態と類似する部分がある¹⁹⁴。

【瑱】

「瑱」の意義について、『説文解字』は「按、天子以玉、諸侯以石、字亦作瑱（按ずるに、天子を玉とし、諸侯を石とする。字は、また瑱につくる）」としている。すなわち、天子（帝）だけが保有することのできる尊く赤色の宝玉を意味すると考えられる¹⁹⁵。「東皇太一」では、文脈から考えて、香を入れる香壺が瑱でつくられた宝物であることを示しているのかもしれない。

【蘭】

「東皇太一」では、「蕙餠」という蒸し料理を調理する際に用いるものとして「蘭」なるものがあることが示されている。

中国では、肉と米を一緒に蒸したものを肉粽（にくそう）と呼んでいる。粽を巻く葉は、日本では笹を用いるのが一般的だが、中国南部～東南アジアでは常緑広葉樹の大きな葉を用いて比較的大きな粽をつくることもある。

葉で巻いた食物を焼いた石などで蒸し焼きにして食べるやり方は、太平洋の諸島やニューギニア等でも広く一般的にみられるもので、古代の中国南部

～東南アジア～太平洋諸国あたりの地域においてはかなり普遍的な食文化の一種だったのではないかと想像される。日本各地に伝承されている神事の中にも類似の例を見ることができる¹⁹⁶。

しかし、一般に、粽（ちまき）を含め、蒸し料理（石蒸し料理¹⁹⁷）を巻く葉あるいは皿の代わりに用いる葉として考えた場合、ラン科植物の葉は、その組織構造上、全く適していない。それゆえ、『楚辞』の「東皇太一」にある「蘭」はラン科植物のことを指すものではない。同様に、蒸し料理のような調理方法に用いる場合、キク科フジバカマ属植物の葉も全く適していない。その葉を実際に試してみると、小さすぎ、かつ、脆すぎて全く役に立たない。したがって、「東皇太一」にある「蘭」は、ラン科植物を指すものではなく、キク科フジバカマ属植物の類を指すものでもないと考えるのが妥当だ。

「蘭」が具体的にどのような植物を指すものだったのかは不明だが、少なくとも、蒸し料理に用いることができるような丈夫な葉をもち、何らかの意味で芳香があると認めることができるような植物だったと推定することまでが推論の限界だと思われる¹⁹⁸。

結局、ここに「蘭」とあるのは、修辭的に「よき葉」くらいの意味しかないのではないかと考えられる¹⁹⁹。

3. 3 雲中君

『楚辞』の「九歌」の二番目の詩として収録されている「雲中君」には、「蘭湯」との記述がある。

浴蘭湯兮沐芳 華採衣兮若英
靈連蜷兮既留 爛昭昭兮未央
蹇將憺兮壽宮 與日月兮齊光
龍駕兮帝服 聊翱遊兮周章
靈皇皇兮既降 焱遠舉兮雲中
覽冀州兮有餘 橫四海兮焉窮
思夫君兮太息 極勞心兮憊憊

これを意識すると、次のとおりとなる。

蘭湯を浴び、芳香²⁰⁰に浴する。花柄の衣²⁰¹は咲く花²⁰²のようだ²⁰³。
霊がゆらゆらと降臨して留まり、煌々と照らして尽きることがない。
壽宮（祭殿）は何とも安らぎに満ち、日や月と同じように光を放つ。
龍車に乗り、天帝の服をまとい、しばし巡遊し周遊する。
煌々として降臨した霊は、にわかには遠く雲の中に舞い上がる²⁰⁴。
冀州²⁰⁵をご覧になった余力で四海の果てまで行く。
夫君を思慕し、ため息をつく。心労極まり、胸がうずく²⁰⁶。

【蘭】

「蘭湯」の「蘭」について、フジバカマの類を入浴剤として用いる事例は存在しないし、フジバカマの類はそのような入浴剤としての用途には全く向いていない²⁰⁷。なお、後代には入浴用ではなく飲料としての「蘭湯」または「蘭膏」なるものがあったようだ²⁰⁸。しかし、その原材料としては、キク科植物でもでもない別の植物を用いた可能性がある。

他方、セリ科シシウド属のヨロイグサ (*Angelica dahurica* (Fischer ex Hoffmann) Bentham & J. D. Hooker ex Franchet & Savatier) について検討してみると、これを洗髪用を使用するような例はない。古代において洗髪に用いたのは、主に米のとぎ汁や糠を湯に溶かしたものだだったと推定される。このようなことから、「沐芳」を「芷の湯で髪を洗う」という意味だと解する通説の見解は誤りだと考える²⁰⁹。

「雲中君」には単に「沐芳」とあるのみなので、何らかの芳香のある煙を浴びる行為を指すと解するのが正しい。現在の日本でも、例えば、大きな仏教寺院の本堂の前で香の煙を浴びて身体を清めてから寺院を礼拝することが普通に行われているし²¹⁰、道教でも類似の習慣がある²¹¹。古代において、その芳香のある煙の中に大麻草 (*Cannabis sativa* L.) の煙が含まれ得るという可能性を否定することはできない²¹²。

以上で述べたところとは別に、入浴剤として用いる良い香りを持つ植物としては、ショウブ科 (*Acoraceae*) のショウブ (*Acorus calamus* L.)²¹³ またはセキショウ (*Acorus gramineus* Solander ex Aiton) を考えるのが妥当ではないか

と思う。

中国では、5月5日を「浴蘭節」と呼び、香草を入れた湯で入浴する習慣がある。このような習慣は、『楚辞』の「雲中君」にある「浴蘭湯兮沐芳」にちなむものだとされている。南北朝時代の宗懐が編纂した『荆楚歳時記』には「五月五日四民並蹋百艸又有鬪百艸之戲採艾以爲人懸門戸上以禳毒氣」とあり、5月5日には艾という草を踏み、また、これを門の上に掲げて毒気を避けるようにする習慣があったことが知られる。この習慣は、日本国内で現在でも行われている「茅の輪くぐり」の起源だとされている。そのような習慣の由来について、『荆楚歳時記』には「按宗則字文度常以五月五日鷄未鳴時採艾見似人處攬而取之用灸有」、「是日競渡採雜藥」、「按五月五日競渡俗爲屈原投汨羅日傷其死故並命舟楫以拯之（中略）越地傳曰起越王勾踐不可詳矣是日競採雜藥夏小正此月蓄藥以蠲除毒氣」とあるので、『楚辞』の作者とされる屈原にちなむものと考えられていたということになる²¹⁴。唐代に編纂された『藝文類聚』の「歳時中・五月五日」には「楚辞曰 浴蘭湯兮沐芳華」とあるので、中国には古くから『楚辞』にちなんで香草を入れた湯で入浴する習慣が存在したようだ。

他方で、唐代の韓鄂が編纂した『歳華紀麗』巻二の「浴蘭之月」には「大戴禮云午日以蘭湯沐浴」とある²¹⁵。この記述は、『大戴禮記』の「夏小正・五月」にある「蓄蘭 為沐浴也」に基づくものなので、沐浴のために「蘭」を採取し蓄積する習慣が遅くとも漢代には存在したことがわかる。

この「蓄蘭」の「蘭」がどのような植物なのかについては不明だが、ラン科植物ではなく、五月艾 (*Artemisia indica*)、ショウブ (*Acorus calamus*) またはセキショウ (*Acorus gramineus*) と解するのが妥当ではなかろうか。

なお、『藝文類聚』等にある五月艾を用いた祭礼は、唐代に始まったものではなく、非常に古い楚の民俗・習俗が唐代貴族の『楚辞』に関する教養と結合されて形成されたものだと考えるのが妥当ではないかと思う²¹⁶。

3. 4 湘君

『楚辞』の「九歌」の三番目の詩として収録されている「湘君」には、「蘭旌」と「蘭柂」との語句がある²¹⁷。

君不行兮夷猶 蹇誰留兮中洲
美要眇兮宜修 沛吾乘兮桂舟
令沅湘兮無波 使江水兮安流
望夫君兮未來 吹參差兮誰思
駕飛龍兮北徵 遭吾道兮洞庭
薜荔柏兮蕙綢 蓀橈兮蘭旌
望涇陽兮極浦 橫大江兮揚靈
揚靈兮未極 女嬋媛兮為余太息
橫流涕兮潺湲 隱思君兮擘側
桂櫂兮蘭枻 斲冰兮積雪
採薜荔兮水中 搴芙蓉兮木末
心不同兮媒勞 恩不甚兮輕絕
石瀨兮淺淺 飛龍兮翩翩
交不忠兮怨長 期不信兮告余以不閒
鼉騶驚兮江皋 夕弭節兮北渚
鳥次兮屋上 水周兮堂下
捐余玦兮江中 遺余佩兮醴浦
採芳洲兮杜若 將以遺兮下女
皆不可兮再得 聊逍遙兮容與

これを意識すると、次のとおりとなる。

君²¹⁸はまだ行かずにいる。ああ誰が中洲に留まっているのか。
美しく雅やかな衣装を身につけ、私はゆったりと桂舟²¹⁹に乗る。
沅江と湘水²²⁰に波が立たぬよう、揚子江が安らかに流れるよう²²¹。
夫君を待っても来ない。簫²²²を吹きながら誰のことを思うのか²²³。
飛龍に乗って北に行き²²⁴、また向きを変えて洞庭湖へと向かう。
薜荔の柏と蕙の綢。蓀の橈と蘭の旌²²⁵。
遠く涇陽の水際を望み、大河に横たわって靈をあげる²²⁶。
まだ靈をあげおわっていないのに、女が大きく溜息をついた²²⁷。
涙がはらはらと流れ、君を隠れ思慕して、胸は切ない。

桂の櫂と蘭の柁²²⁸。氷を割り、雪をかきわける。
薜荔を水の中から採り、芙蓉を木の梢から採ると同じように、
二人の心が合わなければ媒酌の労も空しく、恩情が十分でなければ容易
に縁が切れる。
石の多い瀬はさらさらと鳴り、飛龍²²⁹がはためく。
交わりに忠義がないことを深く怨む。約束の日を守らずに時間がないと
言い訳をする²³⁰。
朝から岸に沿って周遊し、夜になったので北の渚に舟を泊める。
鳥が舟の屋根に宿を求め²³¹、水は屋形の下を廻っている。
私²³²は玦²³³を川の中に投げ、佩²³⁴を醴浦²³⁵に落とした。
芳しい中洲²³⁶の杜若²³⁷を採り、これを下女²³⁸に贈ろうと思う²³⁹。
時間は再び²⁴⁰得られるものではないので、しばし逍遙してくつろぐ²⁴¹。

【柏】

この詩に出ている「薜荔の柏」、「蕙の綱」、「蓀の撓」、「蘭の旌」、「蘭の柁」
が何を指すのかについては、ひどく難解だと言うしかない。

「薜荔の柏」の「柏」は、簾（すだれ）の古名とされている²⁴²。「薜荔」は、
一般には、クワ科イチジク属の常緑つる性木本オオイタビ (*Ficus pumila* L.)
を指すと解されている。しかし、オオイタビの繊維によって簾を編むことが
できるかどうかについては不明²⁴³。湿地の植物だとすれば、イグサ科イグサ
属の多年草であるイグサ (*Juncus effusus* L.) が該当すると思われる。けれど
も、この「湘君」の後の句において「薜荔」は山で採取するものだというこ
とを前提にする句があるから、山地や里で採取する草本の中から該当するも
のを探してみると、イネ科ススキ属の多年草であるススキ (*Miscanthus sinensis*)
が該当するとも考えられる。

また、オオイタビ (*Ficus pumila* L.) と同じクワ科植物の中から探してみると、
クワ科コウゾ属の落葉低木ヒメコウゾ (*Broussonetia papyrifera* (L.)
L'Héritier ex Ventenat)²⁴⁴とクワ科コウゾ属の落葉高木カジノキ (*Broussonetia
kazinoki* Siebold)²⁴⁵からは良質の繊維を得ることができるから、これかもしれ
ない。いずれにしても、特定できない。

「蕙の綱」の「綱」は帷帳（とばり）の古名とされている²⁴⁶。「蕙」は「芳

香のある」と解するのが普通だが、「よき」くらいの意味ではなかろうか。修辞の一種で、特定の植物種を指すものではないと解する。

通説によれば、「蓀の橈」の「橈」は船を操作するための道具の一種・楫（かじ）を指し、「蓀」は「香草」とされているけれども²⁴⁷、草本である限り、香草では強度が全く不足しているので、楫をつくることはできない。「橈」が楫だとすれば、かなり硬い木本（樹木）または竹の類でなければならない。

【蘭】

通説によれば、「蘭の旌」の「旌」は旗（はた）を意味すると解した上で、「蘭」を「藤袴（ふじばかま）」と解している²⁴⁸。

しかし、キク科植物であるフジバカマの類は、繊維が短くて脆いので、決して旗とすることができない。

そこで考えてみると、「蘭の図案をあしらった旗」というような意味で解釈することは成立可能だと思われる²⁴⁹。ただ、その場合でも「蘭」がどのような花を指したのかを確定することはできない。なお、図案化可能かとう観点でキク科のフジバカマ属植物を考えると、その花は小さく素朴で、美しい花というわけではないので、候補としては除外すべきだろう。

【木蓮】

「蘭の柹」の「蘭」について、通説は、「木蓮」を指すと解している²⁵⁰。ここで「木蓮」とは、モクレン科 (*Magnoliaceae*) のモクレン (*Magnolia liliiflora* Desrousseaux)、ハクモクレン (*Magnolia denudata* Desrousseaux) またはその近縁種を指すと解するのが一般的な見解だ。しかし、モクレン (*Magnolia liliiflora*) の中国名は「辛夷」であり、そして、「辛夷」はコブシ (*Magnolia kobus* A.P. de Candolle) ではない²⁵¹。本来の「木蓮」は、モクレン科 (*Magnoliaceae*) のオガタマノキ (*Michelia compressa* (Maximowicz) Sargent) などの非常に大きくなる樹木を指すと解すべきではないかと思われる²⁵²。

モクレン (*Magnolia liliiflora*) は、春に赤紫色の美しく大きな花を咲かせるので、中国では古くから栽培されてきた。ただし、現在栽培されている「木蓮」なる樹木の大半は交配品種で、原種・野生種ではない。しかも、これまでモクレン (*Magnolia liliiflora*) とされていた植物の分類に関しては大規模な

分類変更が進行中なので、現時点（2015年現在）で正確な学名を記載することが難しくなっている²⁵³。

そのような面倒な問題があるということを一応措き、従来の植物分類においてモクレンとされてきた植物について検討してみると、モクレンは、幹や枝がまっすぐに伸びずに屈曲し、その材質はホオノキ（*Magnolia obovata* Thunberg）に似て比較的柔らかいので、舟の棹（楫）に用いるためには明らかに不適だと考えられる。つまり、この詩でいう「蘭」は、木蓮ではない。そして、草本であるキク科のフジバカマ属植物及び草本であるラン科植物に該当しないことは言うまでもない。

ここにある「蘭」は修辞の一種に過ぎず、特定の植物種を指すものではないと考えられる。強いて言えば、ボタン科の牡丹（*Paeonia suffruticosa* Andrews）の花のような美しい花柄の模様の彫刻のある棹を指したのではないだろうか。

ちなみに、『肥前國風土記』²⁵⁴には、大家郷の郷南に洞窟があり、そこには「鐘乳及木蘭」があったとある。この「木蘭」がどのような植物を指すのかについては慎重な検討を要する。しかし、仮にこれがモクレン科（*Magnoliaceae*）の植物だったとすれば、景行天皇の時代には既に中国からモクレンやその近縁種が渡来し、植栽されて自生していたということになる。

【樂】

中国の苗族等の少数民族は、リード楽器である笙やパンパイプの一種である簫によって奏でられる音楽による舞踏か歌謡が多数存在している。この笙や簫は、男性によっても女性によっても吹奏される²⁵⁵。日本の宮中に伝わる雅楽のルーツの一つはこのようなものだったのだろうと推定される。

『尚書』の「虞書・益稷」には「簫韶 九成 鳳皇來儀（簫で韶樂を9回奏すると、鳳凰が飛来した。）」とあり、『論語』の「述而」には「孔子在齊國聽韶樂（孔子が齊國に滞在していたとき韶樂を聴いた）」とある。

更に、『禮記』の「樂記」には、魏の文侯の子夏への「吾端冕而聽古樂則唯恐臥 聽鄭衛之音則不知倦 敢問 古樂之如彼何也 新樂之如此何也（自分は礼儀を整えて古い音楽を聴くと、居眠りをしてしまうことを恐れるだけだ。しかし、鄭や衛の音楽を聴くと飽きることがない。そこで問いたい。古い音楽がどうしてそのようなもので、新しい音楽がそのようなものなのか）」との

質問に対する子夏の返答として、「今夫古樂進旅退旅和正以廣 弦匏笙簧會守拊鼓 始奏以文 復亂以武 治亂以相 訊疾以雅 君子於是語 於是道古修身及家 平均天下 此古樂之發也（古い音楽では進むにも退くにも規則正しく表現します。弦匏琴を奏でるにも笙の笛を奏するにも太鼓を打つ音に合わせます。演奏は文徳の楽器で始め、演奏の乱れを正すには武の楽器を用い、相の楽器で乱れを修正し、演奏を速めようとするときは雅の楽器を用います。君子たる者は、このことについて語り、古のことを謂い、身を修めて一族に及ぼし、天下を正しく統治します。以上が古い音楽の効用です）」とある²⁵⁶。

これらの記載からすると、春秋戦国時代の楚の国でも同様に、簫や笙などの各種楽器を用いた音楽演奏が盛んになされていたものと推定される²⁵⁷。

ところで、2003年に中国西安市近郊で発掘された北周～隋唐時代の墳墓遺跡である北周史君墓²⁵⁸からは、「尉各伽（Wirkak）」²⁵⁹という男性とその妻「康氏」²⁶⁰を合葬した地下墓がほぼ完全なかたちで発掘された。ソグド語と漢文で書かれた墓誌によれば、尉各伽（Wirkak）は、史國²⁶¹の出身で、没年は「大周大象元年五月七日²⁶²」、官職は涼州（甘肅省）の「薩保府判事曹主」、「涼州薩保²⁶³」となっている。涼州薩保は知事のような職種を示し、涼州²⁶⁴における軍事以外の権力の頂点にあつたのではないかと思われる²⁶⁵。

尉各伽（Wirkak）の墓所²⁶⁶に用いられた石材（家形の大型石棺）を飾る彫刻は、邪鬼を踏みつける金剛力士²⁶⁷、神仙や鬼神、メソポタミア風の人頭有翼神、山羊頭のバフォメット（Baphomet）などを示すような彫像のほか、様々な楽器を演奏する楽人や飛天が多数描かれている²⁶⁸。そこに示されている楽器は、ギリシア風の筒を横に多数並べたパンパイプ（排簫）、メソポタミア風のハープ（縦箏篋）²⁶⁹、ペルシア風のリュート（琵琶）、南米のインディオが用いるような縦笛（笙?）、日本の篠笛のような横笛、日本の鼓（つづみ）に似た形をした小型の太鼓（手で打つタイプのもとはバチで打つタイプのもの）が描かれている²⁷⁰。他にも非常に興味深い遺物が多数発掘された²⁷¹。

ところが、『禮記』の時代に主流だったような青銅製の楽器や玉製の楽器は全く含まれていない。日本の正倉院御物として残されている数々の楽器との対応関係を考えると極めて興味深い²⁷²。

ところで、当時のキシユ（史國）周辺には9つの有力なオアシス国家が存在し、「昭武九姓」と呼ばれていた²⁷³。この9つの国家は、康國、安國、曹國、

石國、米國、何國、火尋國、戊地國そして史國から成っている。石國は、「者舌」、「柘支」、「赭時」とも呼ばれ、現在のウズベキスタンの首都タシュケント（Toshkent）に位置していた²⁷⁴。これらの国々を構成する人々の大半はソグド人だったと推定されている²⁷⁵。

いずれにしても、古代中国の五胡十六国～南北朝時代における中国の人種的・文化的な実質がはるか西方のインド・アリア文化圏に属するものを含むものだったということを示す貴重な文物だと言える²⁷⁶。そして、五胡十六国の時代には中国の本草や医方の実質の内容が根本的なところで大きく変貌してしまっただけでなく、可能性があるとされる²⁷⁷。

このことを『楚辞』の解釈・理解においてどの程度まで考慮に入れるべきかについては、今後の研究課題とせざるを得ない。

3. 5 湘夫人

『楚辞』の「九歌」の四番目の詩として収録されている「湘夫人」には、「菝」、「蘭」、「石蘭」との語句がある²⁷⁸。

帝子降兮北渚 目眇眇兮愁予
嫋嫋兮秋風 洞庭波兮木葉下
白蘋兮騁望 與佳期兮夕張
鳥萃兮蘋中 罾何為兮木上。
沅有菝兮醴有蘭 思公子兮未敢言
荒忽兮遠望 觀流水兮潺湲
麋何食兮庭中 蛟何為兮水裔
朝馳余馬兮江皋 夕濟兮西澨
聞佳人兮召予 將騰駕兮偕逝
築室兮水中 葺之兮荷蓋
蓀壁兮紫壇 播芳椒兮成堂
桂棟兮蘭橈 辛夷楣兮葯房
罔薜荔兮為帷 擗蕙櫨兮既張
白玉兮為鎮 疏石蘭兮為芳

芷葦兮荷屋 繚之兮杜衡
合百草兮實庭 建芳馨兮廡門
九嶷續兮並迎 靈之來兮如雲
捐余袂兮江中 遺余襟兮醴浦
搴汀洲兮杜若 將呂遺兮遠者
時不可兮驟得 聊逍遙兮容與

これを意識すると、次のようになる²⁷⁹。

帝堯の子²⁸⁰は北の渚²⁸¹で没した。
その目がくりくりとして可愛らしかったことが我が心を憂えさせる。
秋風がびゅうびゅうと音をたて、洞庭湖が波立ち、木の葉が散る。
白蘋を踏んで場所を見定め²⁸²、佳人²⁸³のために帷帳を設ける。
鳥は蘋に集まるというのに、どうして四つ出網²⁸⁴を木の上に張るのか。
沅水²⁸⁵には菰²⁸⁶があり醴水²⁸⁷には蘭があった。公子²⁸⁸のことを思い出すけれども、敢えて口に出すことはしない。
心空しく遠くを眺めてみても、水が清くさらさらと流れているだけだ²⁸⁹。
麋²⁹⁰はどうして庭に入って草を食むのか、蛟はどうして岸辺の浅瀬で遊ぶのか²⁹¹。
朝には馬車を江畔まで走らせ、夕方には西の岸部に渡る²⁹²。
佳人が私を召すと聞き、自分も一緒に行くことにしよう。
水中²⁹³に小屋を築き、蓮の葉²⁹⁴で葺いて蓋とする。
蓀²⁹⁵の壁²⁹⁶と紫²⁹⁷の壇、香りの良い山椒を播いて広間を造り²⁹⁸、
桂²⁹⁹の棟と蘭の椽³⁰⁰、辛夷の楣³⁰¹と葍の房とする。
薜荔³⁰²を編んで帷とし、蕙を裂き連ねて帳とする³⁰³。
白玉を押石とし³⁰⁴、石蘭³⁰⁵を敷き詰めて芳とする。
芷³⁰⁶で屋根を葺き、それを杜衡で縫い付ける³⁰⁷。
百草を合わせて庭を満たし、芳しい花で門を飾る³⁰⁸。
九嶷山³⁰⁹の神々は並んで迎え、霊が来る様子は雲の如し³¹⁰。
私³¹¹の袖³¹²を河の中に投げ、私の肌着³¹³を醴浦に落とした³¹⁴。
汀洲の杜若³¹⁵を採り、遠く旅たつ者に贈ろう³¹⁶。

時間はそうそう得られるものではないので、しばし逍遙してくつろぐ³¹⁷。

【蘋】

通説は、「蘋」をデンジソウ (*Marsilea quadrifolia* L.) としている。主として『本草綱目』の「草之八・蘋」に「四葉合成 中折十字 夏秋開小白花 故稱白蘋」とあり、また、『本草綱目』が『左傳』を引用して「蘋蘩藇藻之菜 可荐於鬼神 可羞於王公 則有賓之之義 故字從賓 其草四葉相合 中折十字 故俗呼為四葉菜 田字草 破銅錢 皆象形也」とあるのに依拠している。

しかし、デンジソウ (田字草) はシダ植物で、顕花植物ではないので、いかなる花も咲かせることがない。この点で、『本草綱目』に「夏秋開小白花」とあり、『爾雅翼』に「五月有華白色」とあることと完全に矛盾する。加えて、洞庭湖のある湖南省内にデンジソウの分布はない。したがって、「蘋」をデンジソウだと解することは、明瞭な誤謬だといえる³¹⁸。

断定はできないが、白い花を咲かせるという点を重視すると、オモダカ (*Sagittaria trifolia* L.) またはバイカモ (*Ranunculus japonicus* Thunberg) の類かもしれない³¹⁹。

もっとも、単なる修辭の一種に過ぎない可能性は残る³²⁰。

【蛟】

「蛟」は、日本では「みづち」と読み、竜や大蛇の一種として扱われることもあるし、妖怪の一種として扱われることもある。中国語の読みでは「蛟」を「みづち」またはこれに類する読みとするものはない。

南方熊楠『十二支考』には「わが邦でも水辺に住んで人に怖れらるる諸蛇を水の主というほどの意でミヅチと呼んだらしくそれに蛟網虬等の漢字を充てたはこれらも支那の水怪の号故だ。現今ミズシ (加能)、メドチ (南部)、ミンツチ (蝦夷) などと呼ぶは河童なれど、最上川と佐渡の水蛇能く人を殺すといえは『善庵隨筆』、支那の蛟同様水の主たる蛇が人に化けて兇行するものをもとミヅチと呼びしが、後世その変形たる河童が専らミヅシの名を擅にし、御本体の池の主淵の主で通れどミヅチの称を失うたらしい」とある³²¹。

『本草綱目』の「鱗之一」は、「蛟」について、裴淵『廣州記』を引用して「蛟長丈餘 似蛇而四足 頸 頸有白嬰 胸前赭飛 得鱉可免 王子年」と

している。ヨウスコウワニ (*Alligator sinensis* Fauvel) のことではないかと考えられる。

なお、日本国では、蛇は神の化身等として崇められることが多い³²²。中国でも蛇を吉兆として考える例がある。例えば、応劭『風俗通義』には「世間多有蛇作怪者」として吉兆の事例が示されている³²³。

【蘭】

「沅有菑兮醴有蘭」の「蘭」の意義については、キク科フジバカマ属の植物と解してもさしたる矛盾は生じないように考えられる。

しかし、「湘夫人」全体を見渡してみると、そこに登場する植物は基本的に水辺の植物ばかりだということに気づくことができる³²⁴。

ここにある「蘭」の候補として白頭婆 (*Eupatorium japonicum*) を考えてみた場合、白頭婆は湿地などの水気の多い陽地に生育する植物なので、一応該当性があると言えるようにも考えられるのだが、水草とは言い難い。

そこで、『本草綱目』の「草之八・水草類」の中から該当しそうな植物を探してみると、「白菖」も該当し得るということに気づくことができる。『本草綱目』には『名醫別録』³²⁵を引用して「白菖 十月採」とあるので、仮に「菑」を春の水草、「蘭」を秋の水草という具合に対比させても矛盾が生じない。この「白菖」とは、ショウブ科のセキショウ (*Acorus gramineus*) を意味すると解するのが一般的だ。なお、Flora of China³²⁶では、セキショウの現行中国名を「白菖」ではなく「金錢蒲」としている。セキショウは、古来、薬草として珍重されてきた植物で、香草の一種として認識することが可能なので、「蘭」の範疇に入り得る。他にシソ科のハッカ (*Mentha*) の類も考えられる。

他方、「湘夫人」に「桂棟兮蘭橈 辛夷楣兮葯房」とある部分は、木材を示す植物名を用いているように読める。「木蓮」と「辛夷」との関係については既に述べたとおりなのだが、仮に木本である植物を指すとすれば、モクレン科の何らかの植物ということになるだろう。鎮魂のための樹木という点に着目すれば、オガタマノキ (*Michelia compressa*) が該当すると解するのが妥当かもしれない。しかし、「橈」を「蘭」で飾るという趣旨だとすれば、草本であるラン科植物 (*Orchidaceae*) が該当する可能性は否定されない。これに対し、キク科フジバカマ属植物 (*Eupatorium*) の該当性はないだろうと考えられ

る。そのような植物を用いて屋根の縁や垂木周辺を飾る民俗・風習・祭祀等は存在しないものと考えられる³²⁷。

以上からすると、「湘夫人」にある「蘭」の候補として、キク科フジバカマ属植物の該当性を完全に否定することはできないが、他の植物の可能性も否定できない以上、キク科フジバカマ属植物だと判断するに足りる決定的な根拠はないという結論になる³²⁸。

【蕙】

「蕙」について、『後漢書』の「班彪列傳上」には「後宮則有掖庭椒房 后妃之室 合歡增成 安處常寧 苒若椒風 披香發越 蘭林蕙草 鴛鸞飛翔之列（後宮には掖庭宮と椒房殿があり、皇后の部屋とした。合歡殿、増成殿、安處殿、常寧殿 苒若殿、椒風殿 披香殿、發越殿、蘭林殿、蕙草殿があった）」とあり、「苒若³²⁹」や「蕙草」が後宮に附属する建物の名に付するにふさわしい高級な香草だった可能性を示している。

また、『史記』の「司馬相如列傳」には「其東則有蕙圃 衡蘭 芷若射干 穹窮昌蒲 江離麋蕪 諸蔗獐且（その東側に蕙圃³³⁰があり、蘭、芷、杜若、射干³³¹、穹窮（川芎）、昌蒲、江離、麋蕪、諸蔗、獐且があった³³²）」云々とある。この部分は、「司馬相如列傳」の中で、司馬相如作の「天子游獵の賦」を司馬遷が引用している部分で、しかも、内容的には、かつて楚の王が狩猟をした「蕙圃」という場所のことを指している³³³。また、『楚辞』の「離騷」に「余既滋蘭之九畹兮 又樹蕙之百畝 畦留夷與揭車兮 雜杜衡與芳芷（私は、既に蘭を九畹植えて育て、また、蕙を百畝植えた。畔には留夷と掲車があり、杜衡と芳芷がそれに混じっている）」とある。いずれも香草と考えられ³³⁴、「蘭」と「蕙」が当時既に園芸植物として栽培されていたことを示すものと考えられる³³⁵。つまり、「司馬相如列傳」にある「蕙圃」は、屈原の「離騷」に出てくる「蕙圃」の姿をより具体的に示していることになる³³⁶。加えて、『抱朴子』の「内篇・辨問」には「人鼻無不樂香 故流黃鬱金 芝蘭蘇合 玄膽素膠 江離揭車 春蕙秋蘭 價同瓊瑤（人の鼻で香りを楽しまないものはない。それゆえ、鬱金香³³⁷、芝蘭³³⁸、蘇合³³⁹、玄膽、素膠、江離³⁴⁰、掲車、春の蕙、秋の蘭³⁴¹は、宝石（瓊瑤）と同じくらい高価になる）」とある³⁴²。

これら『後漢書』「班彪列傳上」、『史記』「司馬相如列傳」、『抱朴子』「内篇・

辨問」に出ている記載から推定すると、「蕙」は、後宮³⁴³などの庭園を彩り芳香で満たすために用いられた非常に高価な植物、その敬称、あるいは、それらの総称的な形容表現（修辞）だと考えることができる。いずれにしても奢侈の一種と言える。

これらの「蕙」は、ラン科シュンラン属 (*Cymbidium*) の植物を指すものだろうと考えられるけれども、更に綿密な検討を要する。『本草綱目』は、「薰草（蕙草）」に関連して、「詩書家多用蕙 而竟不知是何草 尚其名而迷其實（詩人や書家は『蕙』を多用するが、それがどのような草を意味するのかわからない。そのことが、その名が本当は何を指すのかを一層わからなくしてしまっている）」とも述べている。中国の古代において既にこのような状態になっていたということには注目すべきだと思う。

それはさておき、『本草綱目』は、「古者燒香草以降神 故曰薰 曰蕙 薰者熏也 蕙者和也（古くは香草を焼いて神を降臨させた。故に薰といい、蕙ともいう。薰は煙でいぶすことで、蕙はやわらぐことを示す）」とし、また、『漢書』を引用して「薰以香自燒 是矣 或云 古人祓除 以此草熏之 故謂之薰 亦通（薰は香を以て自ら焼く」と言うのはこのことである。また、「古人の祓除は、この草を用いていぶすことによるので、これを薰という」と言われているのも同じことである）」としている³⁴⁴。更に、『名醫別錄』を引用して、「薰草 一名蕙草 生下濕地 三月採陰乾 脫節者良 又曰 蕙實生魯山平澤」としている。煙でいぶす祭祀が実際にはどのようなものだったのかについては想像の域を出ないが、例えば、密教の護摩（護摩焚き）のような祭祀だったのではないかと思われる³⁴⁵。

この『本草綱目』にいう「薰草」とは、メボウキすなわちバジリコ (*Ocimum basilicum* L.) またはカミメボウキ (*Ocimum tenuiflorum* L.) を指すと解するのが通説だと思われる³⁴⁶。しかし、このような見解は、かなり疑問だと言わざるを得ない。漢代以前の中国において、これらの植物が栽培され現実に使用されていたことを示す客観的な資料は存在しない³⁴⁷。

『本草綱目』にいう「薰草」について、古代の中国に存在したと推定される植物の中から考えてみると、燃やして煙を出し、それによって神霊を降臨させる祭祀等に用いる草とされているので、大麻草 (*Cannabis*) を指すものと推定すべきだと思う。『山海經』の「西山經」には「又西三百里 曰中皇

之山 其上多黄金 其下多蕙 棠（また西に三百里行くと、中皇之山というところがあり、その上のほうには黄金が多く、その下のほうには蕙と棠が多い。）とあるので、「蕙」は、山の上のほうではなく山の下（裾）に生える植物ということになりそうだ。『本草綱目』の「薰草」を大麻草と解した場合、『山海經』にある「蕙」の記載とは矛盾しない。

この点に関する私見としては、中国古代における「香草」なるものについて、現代社会における適法なアロマ製品、芳香剤、食用香料等のようなものだけに限定し、過度に美化して考えることは危険なことだと考える。中国に限らず、古代の呪術においては、現代社会では麻薬その他の危険物として違法とされているものを用いる例がいくらかでもある³⁴⁸。「薰草（蕙草）」に大麻草が該当するという可能性を留保することとしたい。

【杜衡・杜若】

「杜衡」は「土細辛」とも呼ばれ、古くから生薬（中薬）として用いられてきた。一般的には、中国に広く分布する杜衡 (*Asarum forbesii* Maximowicz) がそれに該当すると考えられている。日本にあるカンアオイ属植物の中では、ツルシダアオイ（蔓羊歯葵）との別名をもつソノオサイシン (*Asarum fauriei* Franchet var. *stoloniferum* (F. Maekawa) T. Sugawara) が杜衡 (*Asarum forbesii*) に最も近いように思われる³⁴⁹。しかし、一般的には、カンアオイ (*Asarum nipponicum* F. Maekawa) やフタバアオイ (*Asarum caulescens* Maximowicz) などを「杜衡」として扱う例が多い。ただし、現在の日本国の領土内にあるカンアオイ（細辛）の多くは、江戸時代に清から輸入され、交配された園芸品種の子孫である可能性が高い³⁵⁰。

他方で、『本草綱目』は、「杜衡」について、『爾雅』を引用しつつ、「杜又名土鹵 然杜若亦名杜衡 或疑是杜若 而郭璞注云 似葵 當是杜衡也」としている。また、『神農本草經』には「杜若 味辛微温 主治胸脅下逆氣 温中 風入腦戶 頭腫痛 多涕淚出 久服益精 明目 輕身 一名杜衡 生川澤」とある。

このように、古くから「杜衡」が「杜若」の別名だったことから、ツユクサ科のヤブミョウガ (*Pollia japonica* Thunberg) をもって「杜衡」とする見解もある。『楚辞』の「湘夫人」にある「杜衡」がそのいずれを指すのかについ

ては判然としない。寺島良安『和漢三才図会』には、ヤブミョウガを意味する「杜若」の別名として、「杜衡」と「楚衡」を掲げている。これは、『本草綱目』及び『證類本草』が「杜若」に関していずれも『廣雅』を引用して「所謂楚衡者也」としていることに依拠するものだろうと考えられる。これらのことから、「楚衡」との名は古くからあったと推定することが可能で、この名前が「楚の杜衡」を意味することを重視すれば、「湘夫人」にある「杜衡」をヤブミョウガだと解するのが妥当かもしれない。

そこで、両者の植物の生体的特徴を比較してみると、カンアオイの類の茎は長くなるものもあるけれども強靱ではなく屋根材を縛るためには不適であるのに対し、ヤブミョウガであれば使い方次第でどうにか可能ではないかと考えられる。そのことから推定すると、ヤブミョウガとする見解のほうがやや合理的だと言うことはできそうだ。

加えて、修辞の問題としても、前記のとおり『神農本草經』に「生川澤（川や沢に生える）」とあるので、そのようなイメージを前提とする限りにおいては、「杜衡」すなわち「杜若」は、「湘夫人」の基本モチーフに適合しているといえることができる³⁵¹。

【白玉・麻】

「白玉」については、「東皇太一」にある「瑤席兮玉瑱」の「瑤」の解釈と同じ問題がある。

『楚辞』の「九歌」の「大司命」にある「折疏麻兮瑤華」の「瑤華」を「白玉のような花」を意味するものと解した上で³⁵²、「東皇太一」にある「瑤」及び「湘夫人」にある「白玉」と「大司命」の「瑤」とが同一のものを指すという前提で、もしそれが鉱物を指すとすれば透明な水晶のような玉石を意味すると解することができる。これに対し、「白玉」を植物だと理解するとすれば、麻すなわち大麻草（*Cannabis sativa* L.）の白い雌花³⁵³が該当する可能性がある。この点に関して更に検討してみると、『楚辞』では、「七諫」の「謬諫」に「菑落雜於麤蒸兮 機蓬矢以射革」とあり、「哀時命」に「菑落雜於麤蒸兮 機蓬矢以射革」とあるのだが、この「麤」は「麻」と同じで、「麤蒸」は麻殻（アサガラ）を指すと解されている³⁵⁴。

『楚辞』の「謬諫」と「哀時命」の上記箇所を比較してみると、「菑落」と

「菑籥」とが異なっているだけで、それ以外の部分は同一なので、「籥」は「籥」の誤写ではないかと考える。そして、「菑籥雜於麤蒸兮 機蓬矢以射革」は「竹の矢に混じってアサガラ（麻の茎蘗）があり、蓬の矢を放って革の鎧を射る」といった意味で、成句のようなものだろうと思う。その言わんとする趣旨は、「麻の蘗の矢では役に立たない、蓬の矢で革の鎧を貫くことはできない」ということに違いない³⁵⁵。『禮記』の「射義」には「故男子生 桑弧蓬矢六 以射天地四方 天地四方者 男子之所有事也」とある。これは、男子が生まれたときに丈夫に育つよう祈願する儀礼を示しており、実戦に用いる竹の矢とは異なり、蓬の矢では実戦には全く役立たないものだということを前提としている³⁵⁶。

楚の国における政争に破れて楚の宮廷から下野した屈原が、政争に勝ち、楚の宮廷で栄華を謳歌している政敵達に対して「無能な者達に一体何ができるのか、楚の王が採るべき対秦政策は遊びではない、石と玉の両者が存在しているのであれば石を採るのではなく玉を選ぶべきだ」と罵るような心情を示すものだろうと考えられる。

ちなみに、「大司命」にある「疏麻」は「ソーマ」と読み得る。「ソーマ (soma)」とは、ヒンズー教では霊酒またはその原料となる植物を意味し、あるいは、月神のことを指すので、古代インドの言葉がそのまま「疏麻」となった可能性がある。ゾロアスター教のハオマ (haoma) もヒンズー教のソーマと同じ霊酒を指すものと理解されている。ソーマの原料となる植物については『アーユルヴェーダ』に書かれている³⁵⁷。これによると、24種類の植物があり、いずれも蔓植物で、15枚の葉をもち、満月の夜に最大の15枚になった後、次第に葉が落ちて最後は蔓だけになるもので、現在のパキスタンやアフガニスタンなどの地域の特別の場所に生育するのだという³⁵⁸。

この24種類のソーマ植物の正体については、古くから研究がなされ探索が重ねられてきた。現在ある見解中では、マオウ科 (*Ephedraceae*) の麻黄の類 (*Ephedra*) やガガイモ科 (*Asclepiadaceae*) の肉珊瑚 (*Sarcostemma acidum* (Roxburgh) Voigt) とする見解が有力と考えられるが、はっきりしない。

いずれにしても、大麻草 (*Cannabis sativa*) は、蔓植物ではないので、ソーマ植物に該当することはなさそうだ³⁵⁹。

【紫】

「紫」について、動物の紫貝だとする見解が多い³⁶⁰。しかし、貝類とする見解には賛成できない³⁶¹。「湘夫人」に現れる動植物の大半が現在の湖南省・洞庭湖周辺に存在する生きた動植物なので、そのことを重視しなければならない。このような観点からすると、海生貝類である「紫貝」は「紫」の候補から除外すべきだろう³⁶²。

そこで、「紫」について、そこで、植物の中に候補を探してみると、本草としては木本の「紫壇」または「紫壇香」³⁶³がある。これは、マメ科 (*Fabaceae*) のツルサイカチ属 (*Dalbergia*) に属するジャワ、インドシナ半島、インド等の熱帯雨林に産する非常に硬い材質をもつ香木の一種を指し、これを楽器や高級家具の用材として用いるほか生薬（中薬）としても用いる。しかし、「紫壇」または「紫壇香」は、屈原の時代には中国内で用いられていなかったと推定され、草本ではなく、洞庭湖周辺に存在していたとは考えられない樹木なので、除外しなければならない³⁶⁴。『楚辭』の詳細な注釈書である『楚辭集註』を著した朱熹（1130年～1200年）は、南宋の貴人であり、高価な紫貝や紫壇を実際に使うことが可能だったと推定されるが、楚の懐王に仕えた屈原がこれらを用いることができたか否かという点については疑問だ³⁶⁵。

そこで、「紫」と名のある植物（香草）を本草書の中に求めると、紫草があり、『本草綱目』には「紫草」の説明として、『名醫別録』を引用して、「紫草生揚山山谷及楚地 三月採根 陰乾」とある。ここでは、まさに「楚地」の草とされている。『本草綱目』には、更に、「種紫草 三月逐壟下子 九月子熟時刈草 春社前後採根陰乾 其根頭有白毛如茸 未花時採 則根色鮮明 花過時採 則根色黯惡 採時 以石壓扁 曝乾 收時 忌人溺及驢馬糞並煙氣 皆令草黃色」とある。このことから、「紫草」は春に開花する植物であると同時に、「種紫草」として秋に収穫される植物だと理解することができる。更に、『本草綱目』は、『名醫別録』を引用して、「紫草」の別名に「紫丹」があると述べている。この「紫丹」は、「紫壇」と同じと考えることができる。

「紫草」は、一般に、ムラサキ科 (*Boraginaceae*) のムラサキ (*Lithospermum erythrorhizon* Siebold & Zuccarini) だとされている。ムラサキの現在の中国名は「紫草」だ³⁶⁶。『齊民要術』³⁶⁷は、『廣志』を引用して、「隴西紫草紫之上者（隴西の紫草は、紫色が最も良いものである）」としている³⁶⁸。「隴西」は、

現在の中国甘肅省にあたる³⁶⁹。ただし、歴史上「紫草」として扱われてきた植物の中には多種多様なものが含まれていた可能性があることには留意しなければならない³⁷⁰。

3. 6 少司命

『楚辞』の「九歌」の六番目の詩として収録されている「少司命」には、「秋蘭」との語句がある。

「司命」は星座の一種だと解するのが一般的で³⁷¹、「大司命」と「少司命」という星座がある³⁷²。これに対応して、『楚辞』の五番目の詩は「大司命」となっており、六番目の「少司命」と対になっている³⁷³。

秋蘭兮麋蕪 羅生兮堂下
綠葉兮素華³⁷⁴ 芳菲菲兮襲予
夫人自有兮美子 蓀何以兮愁苦
秋蘭兮青青 綠葉兮紫莖
滿堂兮美人 忽獨與余兮目成
入不言兮出不辭 乘回風兮載雲旗
悲莫悲兮生別離 樂莫樂兮新相知
荷衣兮蕙帶 儵而來兮忽而逝
夕宿兮帝郊 君誰須兮雲之際
與女遊兮九河 衝風至兮水揚波
與女沐兮咸池 晞女髮兮陽之阿
望美人兮未來 臨風愜兮浩歌
孔蓋兮翠旂 登九天兮撫彗星
竦長劍兮擁幼艾 蓀獨宜兮為民正

これを意識すると、次のようになる。

秋蘭と麋蕪³⁷⁵が堂の軒下に列なって³⁷⁶生えている。
綠葉と素心の花、芳香（の誘惑）が私を襲う³⁷⁷。

そもそも人には生まれ持った美德というものがあるというのに、あなたは何故にそれまで思い悩むのか³⁷⁸。

秋蘭は青青と生え、(麝蕪は) 緑の葉と紫の茎³⁷⁹。

堂いっぱい的美女の中でただ一人と私の目が合った³⁸⁰。

無言で堂に入り、何も述べずに堂を去る。吹く風に乗り、雲の旗をはためかせる。³⁸¹

悲しみの中では生き別れよりも悲しいことはなく、歓びの中では新たに知り合う歓び以上のものはない。

荷³⁸²の衣を着け、蕙の帯で結び、やにわに現れ、忽然として去る³⁸³。

夕暮れに楚の城外で宿をとり、あなたは雲の際で誰を待っているのか。

あなたと天河で遊べば、風がおきて河面に小波がたつのだろうに。

あなたと咸池で水浴すれば、その髪を陽光で乾かすのだろうに。

(しかし、) 佳人を待っても来ることはない。(私は) 風に向かって大声で唱歌するだけだ³⁸⁴。

孔雀の羽の屋根と翡翠³⁸⁵の旗(をつけた馬車で) 九天に駆け上り、彗星をこの手に掴みたい³⁸⁶。

太刀を手に握って弱き民を守る、そのような者のみが、民にとってあるべき統治をすることができるのだ。

【麝蕪】

『康熙字典』は、「九歌」の「秋蘭兮麝蕪」について、「麝蕪 芎藭名(麝蕪は、芎藭の別名である)」としている。他方、『香藥抄裏書』³⁸⁷には「漢書曰 江離香草 麝蕪 蘄々芷也 以蛇床而香 諸甘柘也 搏且蕤荷也 搏音匹沃反(『漢書』は、「江離は香草、麝蕪は蘄々芷のことで、蛇床に似て香りがある。諸は甘柘のことだ。搏且は蕤荷のことだ。「搏」の音は「匹沃」の反切となる)」とある。

そこで調べてみると、『史記三家註』卷一百一十七の「司馬相如列傳第五十七」には、次のようにある。

駟案漢書音義曰 江離 香草 麝蕪 蘄芷也 似蛇床而香 諸蕪 甘柘也 搏且 蕤荷也

案 今芎藭苗曰江離 綠葉白華 又不同
孟康雲 麋蕪 蘄芷也 似蛇床而香
樊光曰 藁本一名麋蕪 根名蘄芷
又藥對以為麋蕪一名江離 芎藭苗也 則芎藭 藁本 江離 麋蕪 並相
似非是一物也
諸柘 張揖雲 諸柘 甘柘也
搏且 上音並ト反 下音子余反 漢書作 巴且
文穎雲 巴蕉也
郭璞雲 搏且 藁荷屬 未知孰是也

これを意識すると、次のようになる。

裴駟『漢書音義』は、「江離は香草、麋蕪は蘄芷のことで、蛇床に似て香りがある。諸蔗は甘柘のことで、搏且は藁荷のことである」と言っている。検討すると、現在では芎藭の苗を江離といい、緑葉を白華といい、同じではない。樊光は、「藁本の別名が麋蕪で、その根の名を蘄芷という」と述べている。また、『藥對』は、麋蕪を江離の別名とし、芎藭の苗のことだとしている。つまり、芎藭、藁本、江離、麋蕪は、別のものとして並べられているが、これらは全部同じものだ³⁸⁸。諸柘について、張揖雲は「諸柘は甘柘のことだ」と述べている。搏且は、上音が「並ト」の反切で、下音が「子余」の反切となっている。『漢書』には「巴且」と書いてある。文穎は「巴蕉のことだ」と言っている。郭璞は、搏且について、藁荷の類なのだがよくわからないと述べている。

『香藥抄裏書』の「漢書曰」云々と続く記載は、『史記三家註』にある「駟案漢書音義曰」³⁸⁹云々との記載を誤写または短縮して採録したものではないかと思う。

このように混乱している部分もあるが、「麋蕪」の意義については、「芎藭」と同じ植物(特にその苗となる根の部分)のことを指し、別名として、「江離」や「蘄芷」とも呼ばれ、「蛇床」という植物と似ているものだと理解すれば足りると思う。

「芎藭」は、「せんきゅう」と読み、日本では、セリ科 (*Apiaceae*) の川芎 (*Cnidium officinale* Makino) がこれに該当すると説明されることが多い。しかし、「*Cnidium officinale* Makino」は、「*Ligusticum ibukiense* Y.Yabe」の異名 (Synonym) とされるが、「*Ligusticum ibukiense* Y.Yabe」はセリモドキ (*Dystaenia ibukiensis* (Y.Yabe) Kitagawa) の異名 (Synonym) で、しかも、セリモドキは日本固有種とされているので、中国の「芎藭」であるはずがない。また、川芎 (*Ligusticum wallichii* Franchet) とする見解もあるが、「*Ligusticum wallichii*」³⁹⁰ は、日本には自生せず、ヒマラヤ～中国・雲南原産の条紋藁本 (*Ligusticum striatum* A.P. de Candolle) の異名 (Synonym) となっている。

第十六改正日本薬局方 (JP16) は、「センキュウ」について「川芎 本品はセンキュウ *Cnidium officinale* Makino (*Umbelliferae*) の根茎を、通例、湯通ししたものである」と定義している。しかし、上述のとおり、「*Cnidium officinale* Makino」は、セリモドキ (*Dystaenia ibukiensis*) の異名 (Synonym) であり、しかも、「*Umbelliferae*」はセリ科 (*Apiaceae*) の植物を示す科名としては現在使用されていないので、この第十六改正日本薬局方 (JP16) にある「センキュウ」の定義は、法的にも自然科学的にも無効だと考える³⁹¹。

更に、川芎 (*Cnidium officinale* Makino) の属名となっている「*Cnidium*」はハマゼリ属植物を示す属名なのだが、これは、中国では、蛇床 (*Cnidium monnieri* (L.) Cusson)³⁹²を代表的な植物とする「蛇床属」の植物のことを指す。ところが、『漢書音義』は、「麤蕪」について、「似蛇床而香 (蛇床に似ていて芳香がある)」としている。逆から言えば、「麤蕪」は「蛇床」とは似て非なる植物だと解すべきことになる。しかも、ハマゼリ属植物の多くは、湿った場所に生えることが多く、春に花が咲き、秋には葉が枯れ、栽培品についてはその根を収穫して株分けしてしまうので、軒下に「秋蘭」と並んで生えるということがあり得ない。したがって、ハマゼリ属植物は、『楚辞』の「少司命」にある「麤蕪」ではあり得ない。

結論として、「麤蕪」とは、セリ科マルバトウキ属に属し中国に自生する条紋藁本 (*Ligusticum striatum* (Syn. *Ligusticum wallichii*)) や藁本 (*Ligusticum sinense* Oliver) 等の植物すなわち広義における「藁本」³⁹³を指すと解するのが妥当だと考える。

Flora of China³⁹⁴によれば、条紋藁本 (*Ligusticum striatum*) は、グレゴリオ

暦で7月～9月に花を咲かせ果実をつけるので、旧暦の秋に開花する植物の中に含めて考えることができる。また、Flora of China³⁹⁵によれば、藁本 (*Ligusticum sinense*) は、グレゴリオ暦で7月～8月に開花するので、旧暦の夏～秋に開花する植物ということになる。

これは、前述の『史記三家註』に樊光曰くとしてある「藁本一名麩蕪 根名蘄芷 (藁本の別名を麩蕪という。その根の名は蘄芷という。)」との記載とも一致する。根を採取し、香辛料「芷 (菫)」として用いたのだろう。このように解する場合、「芷 (菫)」は、ヨロイグサ (*Angelica dahurica*)³⁹⁶のようなセリ科ヨロイグサ属植物 (*Angelica*) ではないという結論ともなり得る³⁹⁷。

【秋蘭】

「秋蘭」という文字だけではいかようにも解釈し得ると思われる。ところが、「少司命」の次の行には「緑葉兮素華 (緑葉と素心の花)」とあって、植物としての特徴 (形質) を端的に示していると思われる。

「素心」とは、緑 (または緑と白) だけで構成され、紅色や褐色などの濁りが一点もない清浄な秀花のことを指す。『楚辞』においては、「屈原に二心なく真の愛国者である」ということを示すのに、まさに最適の花だと言える。

そして、東洋ランの愛好家であれば、疑う余地なく、寒蘭、建蘭または蕙蘭の素心花品以外にはあり得ないと確信することができることだろう。多言を要しない。

この「少司命」にある「秋蘭」「秋蘭」をキク科のフジバカマすなわち佩蘭 (*Eupatorium fortunei*) と解する通説は正しくないと考えられる。この「秋蘭」は、藤袴でも白頭婆でもない。

なお、ラン科植物 (*Orchidaceae*) としての寒蘭、建蘭及び蕙蘭がどのようなものなのかについてまとめてみると、概ね次のようになる。

寒蘭 (*Cymbidium kanran*) は、中国ではグレゴリオ暦で8月～10月に花を咲かせる。葉が美しく、これを愛でる愛好家が非常に多い。古来、その美しい葉を貴ぶものともされてきた。寒蘭の素心花品は、かつては非常に高価で貴族のための植物だとされていた。ただし、寒蘭の中には花が芳香を放つタイプのもので無香のタイプのものがある。花には様々

な色と柄のものがあるけれども、稀に白花や素心のものが出る。想像だが、葉がとても美しく、かつ、花が素心のものは、最も高貴な花とされていたのではないかと考えられる。

建蘭 (*Cymbidium ensifolium*) は、中国ではグレゴリオ暦で6月～10月に花を咲かせる。野生種の葉や花は寒蘭には劣るが、ときとして秀逸な個体が出現することがある、その中で「素心蘭」と呼ばれるものの花の色は淡黄緑色で唇弁は白い。園芸上、このようなものを「白花」と呼んでおり、更に産地名を付して「白雲素心」や「観音素心」等の名で流通することがしばしばある³⁹⁸。これらは、個体変異のレベルにあるものが圧倒的に多く、変種でも亜種でもないのだが、美しさのバラエティが著しく富んでいるため、古くから別種として分類されることがあり、植物分類学上では混乱の原因の1つとなってきた。

蕙蘭 (*Cymbidium faberi*) は、中国ではグレゴリオ暦で7月～9月に花を咲かせる。『秘伝花鏡』³⁹⁹巻五には「蕙蘭」の記述があり、「葉同歐蘭稍長而勁 八九花 其形似歐蘭而瘦即香味不及（葉は歐蘭⁴⁰⁰と同じだが、やや長くて強い。八ないし九個の花をつける。花の形は歐蘭と似ているが小型で香りも及ばない）」とある。花茎は1本なのだが、複数の花をつけることがあることから、「一茎九花」との名でも呼ばれる。蕙蘭または一茎九花の品種はかなり多数ある。

古い文献資料を探してみると⁴⁰¹、趙時庚『金漳蘭譜』⁴⁰²には、白花を咲かせる蘭の品種として、「濟老」、「李通判」、「惠知容」、「鄭少舉」、「黃八兄」、「周染」、「觀堂主」、「名第」及び「青蒲」の名がある。

これら『金漳蘭譜』に名前のある品種が寒蘭、建蘭及び蕙蘭の中のどれに属する品種なのかを確実に確定することはできない。しかし、『金漳蘭譜』では、「弱脚」という品種について、「只是獨頭蘭 色綠 花大如鷹爪 一乾一花 高二三寸 葉瘦 長二三尺 入臘方花 薰馥可愛而有餘」と述べていることから推測すると、『金漳蘭譜』に掲げてある全ての品種がラン科シュンラン属植物の範疇に含まれるものと判断しても差支えないと考える。

『金漳蘭譜』にある蘭の白花品種の中で「観堂主」の説明には「花白 有七萼 如聚如簇 葉不甚高 可供婦人曉妝」とある。「観堂主」との名は、詞の内容から推測して、『楚辞』の「少司命」にある「満堂兮美人 忽獨與余兮目成」を意識して付された名前かもしれない。

また、「玉魷蘭」との名をもつ素心の秀麗花を咲かせる蘭がある。『金漳蘭譜』には八重咲白花品として「魚魷蘭」が掲げられており、同一品種とみなされることもあるが、現在流通している「玉魷」は八重咲品種ではないので異なる品種だと考えるべきだろう。「魚魷蘭」には12枚の萼片があり、それらが透き通っていて魚⁴⁰³のように見えることからその名があるのだという⁴⁰⁴。

4 まとめ

以上で検討してきたとおり、『楚辞』の「九歌」にある「蘭」について、キク科フジバカマ属 (*Eupatorium*) の植物すなわち「藤袴」が確実に該当すると認めることのできるものはない。

従来通説は、一般に、訓詁学的なものを含め、先人の注釈等を手掛かりとして解釈を積み重ねてきた結果によるもので、その努力には深く敬意を表すべきだと考える。しかし、自然科学上の知見によって支持されることのない見解や自然科学上の知見と矛盾する見解は排除されなければならない。そうしなければ、『楚辞』に収録されている個々の詩の個々の句や語の理解を誤らせる可能性があるというだけでなく、『楚辞』全体の理解の仕方に対しても、大きな害を及ぼすことになるだろう。

一般に、往古の注釈書には、それが編纂された時代の思想や感性が反映されており、それ自体として非常に大きな文化的価値をもつ。先人が『楚辞』の「蘭」をもって「蘭草」すなわち「藤袴」だと考え、そのように感じたことそれ自体は、それとしてそのようなものだったと認めることができる。

しかし、古典の注釈書は、植物学のための専門的な研究論文ではない。

かくして、過去の注釈者の権威のみに頼ることなく、常に自分の目で観察し、自分の鼻で香りを嗅ぎ、自分の指で葉や茎を撫で、自分の口で味を噛みしめ、そして、自分の頭脳で考え判断することが求められる。

中国の歴史は非常に長い。その長い歴史の中で、民族の変動もあった。戦

国時代や五胡十六国の時代には、そのことが特に著しかったと考えられる。唐時代以降においては、世界中の多種多様な民族が来訪し、文化の混淆・合成・熟成がなされたことは間違いない。更に、金や元の時代には、北方からモンゴル系の人々が南下して中国全体を支配しており、また、清の時代には満州族がとてつ長い年月にわたり中国全体を支配していた。これは歴史的な事実だ。それゆれ、それぞれの文化的背景を基礎として成立している学術も時代によってその実質的内容を異にするはずで、本草学もまたその例外ではあり得ない。

このことは、日本国でも同じだ。『本草和名』が書かれた時代と『大和本草』が書かれた時代そして『本草綱目啓蒙』が書かれた時期との間には隔絶があり、貝原益軒が主に活動の場としていた筑紫に自生していた植物と小野蘭山が主に活動の場としていた京都周辺に自生していた植物とは当然異なるものだ。しかも、戦国時代～江戸時代には多種多様な動植物が明や清から新たに導入され植栽された⁴⁰⁵。

時代により、また、地域によって「蘭」という語が指し示す実質的な内容が異なってしまうことは、むしろ、当然のことだと言えるだろう。結局、何か一律の概念でもって「蘭」を認識・理解することは誤りを招きやすい。そうではなく、「蘭」を個別に細かく検討することが大事だと考える。

そして、どのように研究を尽くしても艸（草）の正体を見極めることができないときは、それはそれで修辞（文飾）の一種として楽しむべよいと考える。次のように考える程度でとどめるべきで、それ以上に、無理に注釈したり翻訳したりする必要性は全くない。

- ① 「蘭」と呼ばれた植物があった。
- ② 人々は、「蘭」がどのような植物なのかを知りたくなると、『説文解字』をひもといて「香艸（芳香をもつ草）」を意味するものとして理解し、その時代や地域において「香草」として利用されていた植物の花、葉、茎または根のことなのだと考えたこともあった。
- ③ 「蘭」は、植物の花やその香りのことを指すこともあったし、根や球根などを指すこともあった。
- ④ 「蘭」は、単に「高貴な草」または「香り高い草」といったような

修辭的な機能しかもたず、現実に存在する特定の植物種を指すわけではなかったこともある

一般論としては以上のとおりとなる。

本稿の考察においては、より具体的な検討結果として、様々な仮説を提示した。その中で、現在のヴェトナム等の東南アジア諸国にも分布があるという事実を重視すれば、古代の楚において存在した可能性の高い植物で「蘭」に該当し得る植物は、従来の本草学における名で「蘭草」として佩蘭 (*Eupatorium fortunei*)、同じく「澤蘭」として林澤蘭 (*Eupatorium lindleyanum*) または多須公 (*Eupatorium chinense*)、同じく「蘭花」として墨蘭すなわち報歳蘭 (*Cymbidium sinense*) の4種の植物を候補にあげることができ⁴⁰⁶、また、それ以外の植物で北方系のもは後順位の候補として扱うべきだということまでは言えるだろうと考える⁴⁰⁷。しかし、『楚辞』の中に「蘭」と名のある植物について個別のかつ慎重な検討を要するという結論には些かの変動もない。

最後に、『楚辞』において「蘭」の語が多出する理由について感想めいたことを述べたいと思う。

この点については、古来、諸説あるけれども、私見としては、屈原が期待をかけた「佳人」が、実は子蘭⁴⁰⁸だったからではないかと考える。

『史記』の「屈原賈生列傳」では、屈原が子蘭を憎んでいたとしている。史実がそうだったと仮定した上で、屈原は大きな期待をかけていた子蘭が、その期待を裏切るようなことばかりするので、憎むようになったのかもしれない。子蘭の失策は、その若さと軟弱さのゆえだろう。しかし、子蘭との名から推測すると、容姿秀麗な貴人だったのではないかと思う。それゆえに、「心に向けてもそれに応えてくれない佳人」といったモチーフが『楚辞』の「九歌」の基底にあるのではなかろうか。そして、その佳人のモデルとなった人物こそまさに子蘭であったことから、随所に「蘭」との語が現れるのではなかろうか。

あくまでも素人の空想に過ぎないのだが、子蘭が幼少の頃、屈原は、その教育係として楚王の蕙圃で艸の栽培の手ほどきし、古い禮を説き、王道を語り、ずっと目をかけ続けていたのかもしれない。子蘭に失望し、落胆・鬱屈の日々を送るようになってしまっても、それでも、屈原は、野の草に幼き日

の無邪気な子蘭の姿を重ね合わせ、美しき記憶と暗鬱なる現実との狭間で苦悩し続けながらも、滅びゆく古代の禮の残滓を秀逸なる辞をもって飾り、詩人としての最後の思いを抱きながら、『楚辞』の詩情を醸成させた。このように想像するのだ。

蘭花の真の栽培者なら誰でも知っていることなのだが、蘭花という艸はとてもわがままで、「自分がなぜここまで苦勞して栽培しなければならないのか」と自問することがしばしばある。自由奔放で強い植物のようでもあるけれども、栽培の手を抜くとたちまち枯死してしまう⁴⁰⁹。実に面倒くさい。それでもなお、ひとたび蘭花の魅力にとりつかれてしまうと、決してそれを見捨てることができなくなってしまう。そのような摩訶不思議さをもっている。

『史記』の「屈原賈生列傳」は、太史公曰くとして、「怪屈原以彼其材 游諸侯 何國不容 而自令若是（屈原が自分の才能をもって諸侯に遊説して回ればどの國でも士官できただろ。それなのに、どうしてそのようにしなかったのか。疑問に思う）」⁴¹⁰と述べて楚の詩人の列傳を結んでいる⁴¹¹。

司馬遷（太史公）の疑問はよく理解できる。しかし、屈原にとって、楚という國もまた、権謀術数渦巻く厄介な國ではあるけれども、それを見捨てて去ることの決してできない國、すなわち、屈原にとっての心の蕙圃だったのに違いない。

以上をもって本稿のまとめとする。⁴¹²

[注記]

¹ 公田連太郎譯註『劉向新序』（東明書院、1932）、野間文史「新序・説苑攷一説話による思想表現の形式一」広島大学文学部紀要 35 卷 30～51 頁が参考になる。

² 公田連太郎譯註『劉向説苑』（東明書院、1935）、南部英彦「劉向『説苑』の公私観とその意味」山口大学教育学部研究論叢（第1部）人文科学・社会科学 61 卷 1 号 87～101 頁が参考になる。

³ 下見隆雄『劉向『列女傳』の研究』（東海大学出版会、1989）、吉田照子「『韓詩外伝』と『列女伝』」福岡女子短大紀要 59 号 125～140 頁が参考になる。

⁴ 劉向の本名は「更生」、字は「子政」で、その事跡は、『漢書』の「楚元王傳（楚元王傳附劉向傳）」の中にある。劉向の著作に関しては、野間文史「劉向春秋説攷」哲学 31 号 57～70 頁、野間文史「尚書正義版本小考 一八行本『尚書正義』と九行本『尚書注疏』一」東洋古典學研究 23 号 109～130 頁が参考になる。

- ⁵ 宮野直也『楚辞章句』引書考」鹿児島女子大学研究紀要 11 卷 1 号 251～271 頁が参考になる。
- ⁶ 小南一郎「王逸『楚辞章句』をめぐって—漢代章句の學の一側面—」東方學報 63 冊 61～114 頁が参考になる。
- ⁷ 屈原が楚の国においてどのような地位にありどのような権限を有していたのかについては、大澤直人「『史記』屈原列伝の史料的性格について」立命館文學 619 号 22～34 頁が参考になる。
- ⁸ 楚王の姓は「芈（び）」なのだが、「芈」は「咩」とも書き、「羊」と「口」を合わせた各種の別字によって表現される。『説文解字』には「芈 羊鳴也 从羊 象聲 气上出 與牟同意」とある。要するに羊が鳴く声を示す文字と解される。羊と関連する先史遺跡については、王毓紅『羊書 一種象形表意石頭文』（商務印書館、2012）が参考になる。日本国では、羊姓は希少に属する。多胡羊太夫については、夏井高人「艸—財産権としての植物 (1)」法律論叢 87 卷 2・3 号 207～244 頁の脚注 24 で触れた。
- ⁹ 楚の懐王（前 329 年頃～前 299 年）は、威王の子。姓は「芈」、氏は「熊」、名は「槐」。古代中国の戦国時代における暗君の代表と評されてきた。
- ¹⁰ 王族の姓の中に「昭」があることには着目したい。時代は相当異なるが、唐代の「昭武九姓」の中にある「昭」との関連性があるかもしれない。なお、欽定四庫全書版の朱熹『楚辞集注』巻一では「曰昭屈景」の部分に「戦国策楚有昭奚恤元和姓 纂云楚武王子食采于屈因氏焉屈重屈屈平屈建并其后又云景氏有景差至汉皆徙」との注釈がある。また、『戦国策』の「楚策・昭奚恤與彭城君議於王前」には「昭奚恤與彭城君議於王前 王召江乙而問焉 江乙曰 二人之言皆善也 臣不敢言其後 此謂慮賢也」とある。
- ¹¹ 星川清孝『新釈漢文大系 34 楚辞』（明治書院、1970）7～10 頁
- ¹² 従来の主要な研究書としては、星川清孝『楚辞の研究』（養徳社、1961）、竹治貞夫『楚辞研究』（風間書房、1978）、赤塚忠『楚辞研究』（研文社、1986）、林庚『林庚楚辞研究兩種』（清華大学出版社、2006）、大野圭介主編『『楚辞』と楚文化の総合的研究』（汲古書院、2014）がある。
- ¹³ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』16 頁、105～106 頁、272 頁、278 頁
- ¹⁴ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』250～251 頁
- ¹⁵ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』17 頁、282 頁、306 頁
- ¹⁶ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』16～17 頁
- ¹⁷ 長沙馬王堆一號漢墓出土資料等に基づく新たな方向性を示す研究結果としては、石川三佐男『楚辞新研究』（汲古書院、2002）、黄靈庚『楚辞與簡帛文獻』（人民出版社、2011）、周祖亮・方懿林『簡帛医藥文獻校釈』（学苑出版社、2014）、武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著『楚地出土戦国簡冊合集(一)郭店楚墓竹書』（文物出版社、2011）が参考になる。前掲『『楚辞』と楚文化の総合的研究』83～144 頁[石川三佐男]は、周～楚の時代の考古学資料等を詳細に比較検討した上で『『楚辞』諸篇は「天問」篇の「帝辞」から一源一系的に生成し発展した政治思想色の濃い文学作品となったと跡づけることができる」との結論を示している。
- ¹⁸ 前掲『『楚辞』と楚文化の総合的研究』349～378 頁[田宮昌子]が参考になる。
- ¹⁹ ただし、この「賦二十五篇」が現存する『楚辞』に含まれている詩（賦）と完全に一致するものかどうかは明らかではない。
- ²⁰ 日本語訳としては、小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記列伝二』（岩波文庫、1975）

がある。本稿においてもその訳を参考にした。

²¹ 格言風に表現すれば、漁夫は「長いものには巻かれなさい」と言っていることになる。これはこれで俗世の処世術としては極めて正しいことだ。世間では自分の意見が通ることなど滅多になく、ただただ大きな流れに身を任せるしかないというのが偽らざる現実だ。そのような現実的な世界では、面従腹背が基本となる。朱熹『中庸章句』には、「寛柔以教 不報無道 南方之強也」とある。屈原の姿勢を考えると、日本の事例としては、松平定信が「白河の清き流れに魚住まざるもの濁りの田沼恋しき」と皮肉られたことと一脈通ずるところがある。栄華を楽しんでいた大商人等にとって、松平定信は極めて邪魔な存在だったろうと想像される。しかし、私見としては、松平定信は、まことに立派な人だったと考える。松平定信なしには『集古十種』が誕生することもあり得なかったのに違いない。

²² 『楚辞』の「漁夫」では「寧赴湘流」となっており、ここでは「湘江」を指すものとして構成されている。しかし、『史記』の「屈原賈生列傳」では、あえて別の表現を採用しているものと考えられる。朱熹『楚辞集注』にある「漁夫」の日本語訳としては、吹野安『楚辞集注全注釈五 遠遊・卜居・漁夫』（明德出版社、2012）がある。

²³ 朱熹『中庸章句』には、「衽金革 死而不厭 北方之強也」とあるが、屈原の信念は、これとは異なる。なお、『中庸章句』には「故君子和而不流 強哉矯」とあり、また、『論語』には「學者自彊不息」とある。

²⁴ 『楚辞』の「懷沙」では、「鬱結紆軫兮」となっている。

²⁵ 現実には、屈原が政敵を相手に激論・抗弁して反撃する機会などあり得なかったのだと考える。さりとて過激な行動に走ることもできない。それゆえ、とにかく自分の感情を抑え込むために放浪し続けるしかなかったのだろう。しかし、楚の民衆は、屈原に対して同情的な気持ちをもっていたのではないかと思う。それゆえ、漁夫は、「もっと気楽になさい」という趣旨で屈原に声をかけたのかもしれない。前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』281 頁は、「漁夫」について、老荘の思想と関連するとの解説をしている。また、『楚辞』の「漁夫」では、「俛詘以自抑」のあとに続けて「漁父莞爾而笑 鼓枻而去 乃歌曰 滄浪之水清兮 可以濯吾纓 滄浪之水濁兮 可以濯吾足 遂去不復與言（漁夫は、それを聴いて笑った。それから、櫂を手にとり、漕ぎながら「滄浪の水が清ければ私の冠を洗い、滄浪の水が濁っていれば私の足を洗いましょう」と歌いつつ去った。お互いに二度と言葉を交わすことがなかった）」と記してこの詩を閉じている。屈原と漁夫とは世界観が全く異なっているので最後まで噛みあうことがない。『孟子』の「離婁上」には「有孺子歌曰 滄浪之水清兮 可以濯我纓 滄浪之水濁兮 可以濯我足（子供の歌に「滄浪の水が清ければ私の冠を洗い、滄浪の水が濁っていれば私の足を洗いましょう」というものがある）」とあり、「漁夫」にあるのと同じ歌が引用されている。『孟子』では「孺子歌（童歌）」としているので、漁夫の歌は、楚の古い民謡だったのかもしれない。『孟子』の「離婁上」日本語訳としては、小林勝人『孟子（下）』（岩波文庫、1972）があり、本稿においても参考にした。

²⁶ 「太史公」とは、『史記』の著者である司馬遷自身のことを指す。

²⁷ 『楚辞』の「九章」の中に五番目の詩としてある。朱熹『楚辞集注』にある「天問」の日本語訳としては、吹野安『楚辞集注全注釈四 九章』（明德出版社、2011）がある。

²⁸ 朱熹『楚辞集注』にある「天問」の日本語訳としては、吹野安『楚辞集注全注釈三天問』（明德出版社、2011）がある。

²⁹ 朱熹『楚辞集注』にある「招魂」の日本語訳としては、吹野安『楚辞集注全注釈七

招魂』(明德出版社、2013)がある。

³⁰ 『楚辞』の「九章」の中に三番目の詩としてある。

³¹ 仮説としては、司馬遷は屈原作として残されていた他の詩(賦)も読んだのだけれども屈原以外の者による作品だと判断して『史記』にはその名を記載しなかったと推測することもできる。

³² 『文選』には、宋玉の詩(賦)が収録されている。宋玉の作品については、稲畑耕一郎「宋玉集補説—『宋玉子』から『宋玉集』へ—」中国文学研究7期38~56頁が参考になる。唐勒については、饒宗頤「唐勒及其佚文—楚辭新資料」中国文学論集9号1~8頁が参考になる。

³³ 『拾遺和歌集』巻第十六雑春による。『宝物集』巻第二では「春なわすれそ」となっている。

³⁴ 菅原道真と『文選』との関係については、真壁俊信『天神縁起の基礎的研究』(続群書類従完成会、1998)が詳しい。

³⁵ 参考となる文献として、例えば、黒須重彦『『楚辞』と『日本書紀』—「こえ」から「文字」へ』(武蔵野書院、1999)、大谷歩・大塚千紗子・小野諒巳・加藤千絵美・神宮咲希・鈴木道代・高橋俊之・室屋幸恵・森淳(辰巳正明監修)『古事記歌謡注釈—歌謡の理論から読み解く古代歌謡の全貌』(新典社、2014)がある。

³⁶ この関連では、石田幹之助『近江奈良朝の漢文学』(東洋文庫、1929)が参考になる。ちなみに、現代の日本においても、外国語教師等として非常に多数の外国人が居住し、日本の社会・文化に馴染んで暮らしている。小泉八雲はその代表的な人物だと考えることができるだろう。古来、日本人ないし日本の社会は、基本的に排外的ではない。海の向こうから渡ってきた神を祀る神社が日本各地に残されているのは、その例証だと言える。

³⁷ 『文選』の日本語訳としては、内田泉之助・網祐次(尾形幸子編)『新書漢文大系19 文選 詩篇』(明治書院、2003)、中島千秋・高橋忠彦(今井佳子編)『新書漢文大系20 文選 賦篇』(明治書院、2003)、高橋忠彦(今井佳子編)『新書漢文大系26 文選 賦篇二』(明治書院、2004)、原田種成・竹田晃(小嶋明紀子編)『新書漢文大系35 文選 文章篇』(明治書院、2007)がある。

³⁸ この点に関しては、吹野安『楚辞集注全注釈六 九辯』(明德出版社、2012)117~130頁に収録されている『経国集』の「賦秋可哀」についてが参考になる。

³⁹ 五胡十六国の時代の歴史を知るための史料は、様々な文献に散在しているので、それを調べるのに苦労するのが普通だ。一般に、情報財としての資料の情報共有のためになされるべきことがまだまだ山積している。なお、五胡十六国の時代の文献資料の調査研究のために非常に有用な書籍として、五胡の会編『五胡十六国覇史輯佚』(燎原書店、2012)がある。

⁴⁰ 『文選』などの古代の中国文学が日本の『懐風藻』や『万葉集』に与えた影響については、辰巳正明『懐風藻全注釈』(笠間書院、2012)、同『万葉集と中国文学』(笠間書院、1987)、善養寺淳一『『懐風藻』に於ける吉野仙境観の成立—神仙思想受容の一側面—』大正大学大学院研究論集38号67~86頁、武田比呂男「古代における庭園—その機能と表現をめぐって—」日本文学52巻5号22~31頁が参考になる。なお、『懐風藻』写本の正確性については、土佐朋子『『懐風藻』伝本および本文の諸問題』東京医科歯科大学教養部研究紀要44号1~16頁が参考になる。

⁴¹ 例えば、日本人は、敗将を蔑視・侮蔑することなく、その真価・美徳を認めようと

する心理的傾向を示すことがしばしばある。いわゆる「判官鼻眞(ほうがんびいき)」もその一例で、そのような精神構造のルーツは、源平合戦よりもはるか昔に遡るものではないかと考える。昨今のいわゆる「勝ち組・負け組」といったような単純な発想は、あまりにも粗野・低劣・無教養過ぎて、日本人の高貴な精神風土にはなじまない。

⁴² 北村四郎『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』(保育社、1985) 185頁、広江美之助『花の歴史 万葉・源氏編Ⅰ』(自然史刊行会、1974) 270～275頁など。小野蘭山『本草綱目啓蒙』巻十の「蘭草」は、「蘭草」と「蘭花」との区別を踏まえつつ、「フヂバカマ 古歌」とし、『楚辞』にある「秋蘭」をその別名として扱い、蘭花のことを指すとの説を誤りだとして批判している。

⁴³ ラン科植物が「蘭」に該当するとの見解では、春蘭、報歳蘭、建蘭、寒蘭、蕙蘭などのラン科シュンラン属の植物をもって比定する例が多い。ラン科シュンラン属の植物の分類に関しては、David Du Puy & Phillip Cribb, *The Genus Cymbidium*, Kew, 2007 が最も詳しく信頼できる。中国に自生する野生のラン科植物については、陳心啓・吉占和・羅毅波『中国野生蘭科植物彩色図鑑』(科学出版社、1999)、林維明『台灣野生蘭賞蘭大圖鑑(上)(中)(下)』(天下遠見出版股份有限公司、2006) が参考になる。日本に自生するラン科植物に関する最新の図鑑としては、遊川知久・中山博史・鷹野正次・松岡裕史・山下弘『日本のランハンドブック(1) 低地・低山編』(文一総合出版、2015)、中島睦子(大場秀章監修)『日本ラン科植物図譜』(文一総合出版、2012) がある。前川文夫『原色日本のラン』(誠文新光社、1971) は日本で最初に出版されたラン科植物の図鑑として知られているが、その後の学術研究の進展や分類変更が著しいため、現時点における標準的な知見や学名と一致しない記述が含まれていることに留意しなければならない。なお、植物の分類変更や学術上の知見の変化を無視した場合における関連法令の解釈・運用に与える悪影響に関しては、夏井高人「胡蝶蘭と関連する特許出願」やまくさ 65号 80～123頁、同「青色花の薔薇か薔薇咲きの葦草か」法律論叢 86巻 4・5号 141～187頁、夏井高人「本草特許」・中山信弘先生古稀記念編集委員会(小泉直樹・田村善之)編『はばたき—21世紀の知的財産法—中山信弘先生古稀記念論文集』(弘文堂、2015) 201～213頁で詳しく論じた。

⁴⁴ 顕花植物ではないシダ植物に属するマツバラン (*Psilotum nudum* (L.) P. Beauvois) の品種を収録した書物として、長生舎主人『松葉蘭譜』(1836) がある。

⁴⁵ 植物ではない楽器や音楽について「蘭」の字を用いているものの例として、『幽蘭譜抄』という古琴の楽譜がある。この楽譜については、小野美紀子「七弦琴史料『幽蘭譜抄』初探—その内容と成立事情についての考察」お茶の水音楽論集 4巻 52～72頁が参考になる。

⁴⁶ 『万葉集』の標題となっている「万葉(萬葉)」との語の意義については、『万葉集』それ自体の中に定義が示されているわけではないので、推測によるしかない。過去においては諸説あったようだ。現代においては、「葉」を「詩歌」と理解した上で、「万葉」とは「多数の詩歌」を意味するものだと理解するのが普通の解釈となっているようだ(佐竹昭宏・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集(一)』(岩波文庫、2013) 526～531頁、中西進『万葉集 全訳注原文付(一)』(講談社文庫、1978) 11～13頁)。

そこで、中国における古い用例を調べてみると、『淮南子』の「俶眞訓」には「夫道有經紀條貫 得一之道 連千枝萬葉(さて、道には一貫した筋道というものがあり、その筋道が定まっていれば、千の枝を出し、万の葉を連ねることができる)」と

あり。『淮南子』の「秦族訓」には「故事有鑿一孔而生百隙 樹一物而生萬葉者 所鑿不足以為便 而所開足以為敗 所樹不足以為利 而所生足以為穢 愚者惑於小利而忘其大害（それゆえ、物事にはたった1つの穴のために大きな間隙が生じたり、たった1本の樹木が万葉を繁らせたりすることもある。1つの穴だけでは何の役にもたないが、それによって間隙を拡げて敗北をもたらすこともあり、また、1本の樹木だけでは何の役にもたないだけでなく、生えた葉が積もって汚穢をもたらすこともある。愚者は、小さな利益に惑わされて、大きな害が発生するかもしれないことを忘れてしまうものだ）」、「昌羊去蚤虱 而人弗庠者 為其來蛉窮也 狸執鼠 而不可脫於庭者 為捕雞也（昌羊は蚤や虱を退け、それによって痒みを避けることができるが、蛉窮を招き寄せてしまう。狸（猫）は鼠を捕るが、庭で放し飼いとすることができない。鶏を捕るからである）」、「故事有利於小而害於大 得於此而亡於彼者 故行棋者或食兩而路窮 或予踦而取勝（それゆえ、物事には小において利があっても大において害をなすことがあり、一方では得をするかもしれないが他方では害を被ることもある。また、それゆえに、将棋をさす者は駒を2つ取ってもその先の手に窮することもあるし、駒を1つ取らせて勝つこともある）」とある。『淮南子』の「俶眞訓」の日本語訳としては、楠山春樹『新釈漢文大系 54 淮南子 上』（明治書院、1979）があり、「秦族訓」の日本語訳としては、同『新釈漢文大系 62 淮南子 下』（明治書院、1988）がある。本稿においても参考にした。

なお、『淮南子』の「秦族訓」には「狸」とあるけれども、一般に、タヌキはネズミを捕食しないと推定され、また、家で飼う動物でもないの、この狸とは、ネコ（猫）のことだと考えた。このことから、中国の古語で狸とは、ネコ科の動物を指す場合があることを理解することができる。狸については、夏井高人「狸貉事件判決再考」法律論叢 85 卷 2・3 号 327～385 頁で検討した。「故事有利於小而害於大 得於此而亡於彼者」は、まことに真理だと思う。「蟻の一穴」との格言でも一般に知られていることと同じ教訓を示している。例えば、普段は何も問題が発生しそうにないので大丈夫と思ひ、河岸堤防となっている土手などの一部を開鑿して耕作したり工作物を設置したりしても、それから得られる利は僅少であるのに対し、その開鑿により堤防が決壊し大水害を招いてしまった場合には甚大な害を及ぼすことがある。したがって、このような場合には個人の利害を厳しく抑制・禁圧し、公共的な利益（公共の福祉・極めて多数の個人の集合体の利益）を優先させなければならないことがあり得る。公共の福祉による私権の制限の場合には損失補償を要しないと判示した裁判例として、最高裁昭和 38 年 6 月 26 日判決・刑集 17 卷 5 号 521 頁（奈良県ため池保全条例事件判決）がある。

『万葉集』の「万葉（萬葉）」は、『淮南子』の「俶眞訓」にある「得一之道 連千枝萬葉」に依拠するものかもしれない。「一」を「太一」と補うと、「得太一之道 連千枝萬葉」ともなる。倭國に植えられた1本の樹木から千本の枝が分かれ、そこから更に無数の葉が生えたということだろうか。仮にそのように言えるのだとすれば、『万葉集』は、ある系統に属する人々の全系図としての役割を担うべく編纂されたという隠れた目的をもつものかもしれない。

『淮南子』の「俶眞訓」と「秦族訓」を踏まえたものと指定されるものに『三国志・魏書』の「高堂隆傳」がある。ここには、「今宮觀崇侈 彫鏤極妙 忘有虞之總期 思殷辛之瓊室 禁地千里 舉足投網 麗擬阿房 役百乾谿 臣恐民力彫盡 下不堪命也（現在の宮殿の様子は贅を尽くし、彫刻は精緻を極め、虞舜（重華）の茅葺屋根の

宮殿ことを忘れ、殷の帝辛（紂王）の宝玉の宮殿を慕い、後宮は千里四方、歩けば防御の網にかかり、阿房宮と見間違えるほどの華麗さ、（そのための民の労役は楚の）乾谿の百倍になります。臣（である私）は、民力が尽き、命令に服することができないようになってしまうことを恐れます）、「昔秦據殺函以制六合 自以德高三皇 功兼五帝 欲號諡至萬葉 而二世顛覆 願為黔首 由枝幹既杌 本實先拔也（かつて、秦は、殺山函谷（函谷関）から天地四方を制し、自ら三皇以上の徳を有し、五帝を合わせたよりも多い功績があると、萬葉に至る諡を号しようと望みました。しかし、二代目で転覆し、平民となることを願うようなことになってしまいました。それは、枝と幹から揺らぎ始め、根本から抜けてしまったからなのです）」とある。なお、『三国志』の「魏書・高堂隆傳」の部分の日本語訳としては、陳寿・裴松之注（今鷹真・小南一郎訳）『正史三国志 4 魏書IV』（ちくま学芸文庫、1993）がある。本稿においても参考にした。

⁴⁷ 岩槻邦男『根も葉もある植物談義』（平凡社、1998）240～246 頁、櫻井満『櫻井満著作集第7巻 万葉の花』（おうふう、2000）201～202 頁、松田修『萬葉植物新考』（社会思想社、1970）200～202 頁、有岡利幸『ものと人間の文化史 145 秋の七草』（法政大学出版局、2008）、齊藤正二『植物と日本文化』（八坂書房、2002）148 頁、栗田子郎『折節の花』（静岡新聞社、2003）173～174 頁、小林昭雲『原色万葉植物図鑑』（桜楓社、1968）396～397 頁、中根三枝子『萬葉植物歌考』（渓声出版、2010）など。

なお、『万葉集』には、「蘭」という文字が出てくる箇所が幾つかある。

まず、『万葉集』巻五の「梅花謠卅二首并序」には「梅披鏡前之粉蘭馨珮後之香（梅は鏡の前の化粧粉（の容器）を開披したときのように香り、蘭は珮に隠した匂袋のように薫る）」とある。この「梅花謠卅二首并序」にある「蘭」の意義について、前掲『万葉集 全訳注原文付（一）』377 頁は、「蘭はフジバカマだが、広くキク科の香草をいう。ここでは梅と対にして香草をあげた文飾で実在のものではない」としている。大前提となる「蘭はフジバカマだが、広くキク科の香草をいう」との部分について、固定観念を排した科学的な検証が必要なのではないかと思われる。春蘭や報歳蘭のような梅の時期に咲き香りを漂わせる蘭花が実在し、同じく実在した梅と対をなしてそこにあった可能性がある。仮にそれらが実在していたとすれば、全て当時の中国から持ち込まれて植栽されたものだろうと推定される。なお、私見は、（序という文書を構成する文の一部なので）単なる修辭の一種に過ぎないという可能性を否定する趣旨ではない。また、後述の白居易の「問友」や蘇東坡（蘇軾）の「題楊次公春蘭」にある「春蘭」の描写にあるような観念が古代の中国からあった可能性を考慮に入れると、「珮」は文飾の一種として『万葉集』の編者が書き換えたもので、もともとは「珮後之香」ではなく「藂後之香」だったかもしれないと考える。更に、空想力を最も逞しくすると、中国から渡来して朝廷貴族となった人々、または、当時の中国の皇帝に朝見すべく渡航・滞在した後に帰国した朝廷貴族が中国における正月の祭祀を懐かしみ、日本（倭國）にはない春蘭または報歳蘭の芳香に包まれて正月を迎えた中国での日々を思い出しつつ、この序の文を構成したものとも想像される。なお、丹羽晃子「『万葉集』における「梅花を酒盃に浮かべること」について」東京経営短期大学紀要 21 巻 86～68 頁、龍本那津子「『懐風藻』における嗅覚表現一『万葉集』との比較を通して」人間文化研究科年報 25 号 368～357 頁が参考になる。

また、『万葉集』巻第十七の「二月廿九日大伴宿禰家持」には「豈慮乎蘭蕙隔藂」

とある。この「二月廿九日大伴宿祢家持」（池主からの返書）にある「蘭蕙」について、中西進『万葉集 全訳注原文付（一）』（講談社文庫、1983）97頁は、「蘭も蕙も香りよい草」としている。前記の「梅花詠卅二首并序」では「文飾で実在のものではない」としながら、こちらでは「草」としていることの整合性に若干の疑問がある。その点はひとまず措くとして、後述の白居易の「問友」や蘇東坡（蘇軾）の「題楊次公春蘭」にある「春蘭」の描写を考えると、春（二月）に咲く「春蘭」は、草叢に隠れて姿が見えにくいけれども芳香を漂わせるものだと観念が古代の中国にはあったと推定されることから、「二月廿九日大伴宿祢家持」にある「蘭蕙隔藜（蘭蕙はくさむらを隔て）」もそのような定型的な表現の一種だったと推定することは可能だと思われる。そして、その場合の「蘭蕙」とは、修辞の一種に過ぎないと解するか、または、もしそれが修辞でないとするれば、春に開花して芳香を漂わせる春蘭または報歳蘭と解するのが妥当と思われる。なお、この歌と大伴家持に関しては、島田裕子「大伴家持と梅花の宴」日本文学研究 49 卷 10～18 頁がある。

⁴⁸ 一般に、山上憶良は、山上氏（山上臣・山於臣）の出とされる。『新撰姓氏録』の「第一帙・皇別」には「山上朝臣」とあるので、この山上朝臣と山上氏とが同一だとすれば、山上憶良は皇族ということになる。しかし、栗田麻人との関係を重視する見解もあり、必ずしも明確ではない。神亀3年（726年）頃から天平4年（732年）頃には筑紫国司に任ぜられていた。これらのことから、山上憶良は民衆ではない貴族階級に属し、漢文を理解し、漢語で会話できる相当の教養を有する者だったに違いない。山上憶良に関しては、中西進『山上憶良』（河出書房新社、1973）、東茂美『山上憶良の研究』（翰林書房、2006）、前掲『万葉集と中国文学』377～481頁、王小林「憶良の述作と敦煌願文」日本研究 40 集 247～275 頁、増子優二「山上憶良研究一六三番歌を中心として」国語論集 9 卷 167～188 頁、同「山上憶良研究一三三七番歌を中心にして」国語論集 12 卷 52～75 頁、市瀬雅之「「類聚歌林」覚え書き一編纂時期の論の検討を中心に一」同朋国文 23 号 73～96 頁、東茂美「環日本海の情勢と山上憶良「好去好来歌」の創作」福岡女学院大学紀要人文学部編 15 号 45～66 頁、小川靖彦「山上憶良と<言志>」青山語文 43 卷 54～66 頁、芦名裕子「古代の宗教状況一山上憶良を中心にして一」二松學舎大學論集 49 卷 181～195 頁が参考になる。山上憶良帰化人説については、前掲中西進『山上憶良』、村山出『山上憶良の研究』（桜楓社、1976）が参考になる。

⁴⁹ 「秋」の時期については、『万葉集』巻八のこの歌の前後に七夕の歌などがあるから、当時の暦における七月七日前後を指すものと解される。ただし、当時の星座は現在の星座とは完全に一致していない可能性があるため、注意を要する。「秋野花」の「花」は文字通りの花を意味するものではなく、草を意味すると解すべきではないかとも考えられる。秋の七草は食用または薬用と推定すると、秋の草の開花時期を目安として採取し、食用または薬用に供するためにその根や茎を乾して保存するという収穫期を示す農業歌としてとらえることができる。この点に関しては、藏中しのぶ『奈良朝漢詩文の比較文学的研究』（翰林書院、2003）114～127 頁が参考になる。ちなみに、『万葉集』とは無関係と思われるけれども、静岡県指定無形民俗文化財「日向の七草祭」という民俗芸能が伝承されている。この祭りは、豊穰を祈念する古い祭祀を起源とするものと推定される。

⁵⁰ 前掲『櫻井満著作集第7巻 万葉の花』171～178 頁、前掲『原色万葉植物図鑑』367～369 頁、前掲『ものと人間の文化史 145 秋の七草』63～100 頁は、マメ科ハギ属

(*Lespedeza*) の植物「萩 (はぎ)」のことだと解している。

⁵¹ 前掲『櫻井満著作集第7巻 万葉の花』178～184頁、前掲『原色万葉植物図鑑』302～303頁、前掲『ものと人間の文化史 145 秋の七草』101～137頁、前掲『花の歴史 万葉・源氏編 I』79～84頁は、イネ科のススキ (*Miscanthus sinensis* Andersson) のことだと解している。

⁵² 通説は、マメ科 (*Fabaceae*) のクズ (*Pueraria montana* (Loureiro) Merrill) のことだと解している (前掲『櫻井満著作集第7巻 万葉の花』184～190頁、前掲『原色万葉植物図鑑』256～257頁、『ものと人間の文化史 145 秋の七草』139～175頁)。

⁵³ 前掲『櫻井満著作集第7巻 万葉の花』191～198頁、前掲『原色万葉植物図鑑』355～356頁、前掲『ものと人間の文化史 145 秋の七草』177～200頁は、ナデシコ科のカワラナデシコ (*Dianthus superbus* L.) のことだと解している。

⁵⁴ 前掲『櫻井満著作集第7巻 万葉の花』199～201頁、前掲『原色万葉植物図鑑』224～225頁、『ものと人間の文化史 145 秋の七草』201～222頁は、「おみなへし」と読み、「女郎花」の字をあてるものとして、オミナエシ科のオミナエシ (*Patrinia scabiosifolia* Link) に該当すると解している。

⁵⁵ 前掲『櫻井満著作集第7巻 万葉の花』202～205頁、前掲『原色万葉植物図鑑』176～177頁、前掲『ものと人間の文化史 145 秋の七草』249～280頁は、キキョウ科のキキョウ (*Platycodon grandiflorus* (Jacquin) A. de Candolle) と解釈している。しかし、「朝兒」を「朝時」または「朝路」と解する限り、キキョウは、朝の花とは言えないので基本的に間違っている。「朝兒之花」について、かつては、ヒルガオ科のアサガオ (*Ipomoea nil* (L.) Roth)、アオイ科のムクゲ (*Hibiscus syriacus* L.)、ヒルガオ科のヒルガオ (*Calystegia pubescens* Lindley) と解する見解もあったが、現在では否定されている。牧野富太郎『隨筆植物一日一題』(東洋書館、1953) 95～97頁にある「秋の七草のアサガオを桔梗だとする根拠」は、そのような見解には反対し、桔梗説に賛成している。これによれば、桔梗とする根拠としては『新撰字鏡』に「桔梗 二八月採根曝干 阿佐加保 又云岡止々支」とあることらしい。ただ、根拠とすることができるのは、この文献しかない。しかも、「桔梗 二八月採根曝干」とある部分は中国の『本草集解』の記述そのままとなっており、単に書き写しただけと考えるのが妥当ではないかと思う。その結果、『新撰字鏡』にある「桔梗」または「阿佐加保」がキキョウに該当するものかどうか不明のままと言うしかない。なお、これらの点に関しては、長谷川鑛平「山上の憶良と「秋の七草」」長野大学紀要 5巻4号 35～45頁がある。

⁵⁶ 「姫部志」と「藤袴」には「花」の字が添えられていないことには注目すべきだと考える。これらは、花に意味があるのではなく、根や茎などのような花以外の組織・器官が重要性をもつものと推定すべきだろう。

⁵⁷ 『万葉集』を編纂したとされる大伴家持 (785年没) は、万葉歌人として知られる持統天皇 (太一天皇・703年没) よりもずっと後の世代に属し、万葉歌人と同代人ではないので、世代を異にする過去の万葉歌人がどのように発音して歌を詠んだのかを本当は知らなかったかもしれない。それゆえ、『万葉集』の歌に関する先入観をいったん捨て、直接に原文で読んでみる必要がある。すると、『万葉集』の中には非常に多くの漢文または擬似漢文があるという事実気づくことができる。また、先学の研究によれば、『万葉集』には異なるタイプの歌が収録されており、分類可能なことが判明している。これらの点に関しては、前掲『万葉集と中国文学』51～80頁、

485～506 頁、671～745 頁、廣川晶輝「山上憶良と大伴旅人の作品を論じるための序説」甲南大學紀要文学編 165 号 1～7 頁が参考になる。後の時代における賀茂氏と和歌との関係については、保坂都『賀茂氏の歌人群』（武蔵野書院、1993）が参考になる。「家持（やかもち）」は「賀茂」を隠すための変名だったかもしれない。

⁵⁸ 武田祐吉『萬葉集全註釋七』（改造社、1949）134～137 頁、阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義第 4 卷（卷第七・八）』（笠間書院、2008）606～608 頁、佐竹昭宏・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集（二）』（岩波文庫、2013）372～373 頁、大場秀章「風水樹花徒然記 17 秋の七草考」食品と容器 55 卷 10 号 615～617 頁など。

⁵⁹ 貞和 3 年（1347 年）頃に成立したと推定されている仁和寺藏『萬葉集註釈』にはそもそも「秋野花二首」が収録されていない（佐竹昭広編『仁和寺藏萬葉集註釈（京都大学国語国文学資料叢書別巻二）』（臨川書店、1981）242～254 頁）。

⁶⁰ 日本語の生い立ちについては諸説ある。それらの中で、タミル語起源説については、大野晋『日本語はいかにして成立したか』（中公文庫、2002）が参考になる。私見としては、アルタイ系諸語の系統の言語に類する要素が多いけれども総体としては印欧語を含めた雑種の言語ではないかと思っている。今日においても英語等がどんどん入ってきて混血言語的な性格をますます強めている。

⁶¹ 通説による同定を前提とした上での実証的な研究としては、七海絵里香・大澤啓志・勝野武彦「万葉集にみる秋の七草の生育立地」日本緑化化学会誌 37 卷 1 号 123～126 頁がある。また、通説を前提とした上で、蘭との語のある詩歌等を詳しく検討したものとして、前掲『ものと人間の文化史 145 秋の七草』223～248 頁があるが、その解釈には疑問が多い。例えば、『日本書紀』卷第十三の「允恭天皇」にある「蘭」について、特に根拠を示すことなくフジバカマとしている（同書 233 頁）。しかし、この『日本書紀』にある「蘭」がどのような植物を指すのかについては必ずしも明らかではない。ウマノスズクサ科のカンアオイ (*Asarum*) の類ではないかと思われる。

⁶² この点に関しては、和田義一「上代文学における本草学の影響」福井工業大学研究紀要 35 号 97～104 頁が参考になる。

⁶³ 辰巳正明『山上憶良』（笠間書院、2011）97 頁

⁶⁴ 通説が正しいと仮定して、ハギの中国名は「胡枝子」という。「秋野歌」にある「芽」は「胡枝子」の「枝子」を意識して漢字 1 文字の「芽」としたものでなかろうか。つまり、実は漢名そのままということになる。しかし、「芽」は、「茅」の誤字と解するほうが素直ではないだろうか。なお、大伴家持と萩に関しては、島田裕子「大伴家持の「独り秋野を憶ふ」歌六首」日本文学研究 24 卷 13～22 頁が参考になる。

⁶⁵ 通説は、「乎」を「お」と読み、尾花すなわちススキのことだと解している。しかし、「乎」は「芒」を別の字で表現したものではないかと思う。「芒」はイネ科のススキ (*Platycodon grandiflorus*) のことを指す。なお、「乎」は、「蒲」と読み得る。あるいは、「稻穂」のことを指すものかもしれない。

⁶⁶ 「葛」は、中国の本草書にある正式の漢名そのまま。葛は、乾燥根を本草（薬草）または食用として用いられるほか、蔓が日用品の素材としても用いられる。

⁶⁷ 「瞿麦（くばく）」は、「葛」と同じく中国の本草書にある漢名そのまま。

⁶⁸ オミナエシ (*Patrinia scabiosifolia*) の植物の中国名を「敗醬（敗醬）」という。乾燥根を本草（薬草）として用いる。「姫部志」の「志」は「醬」すなわち「芷」（根の部分）を原料とする香辛料・香草を意味し、また、「姫部」は「陰」すなわち「敗」を意味したと解することができる。後述の『論衡』にも「男陽而女陰 陰氣為害（男

は陽で女は陰、陰の気は禍をもたらす)」とあるとおり、当時の社会通念としては、男性は陽・女性は陰とされた。「姫部」を「おみなへ」と読むと仮定して、末尾の「へ(部)」は性器のことを意味し、男性の性器と区別するために「おみなへ(姫部)」としたものだろう。女性の性器は「陰」なので、「姫部」の字義は「陰」すなわち「敗」となる。結局、「姫部志」は、「敗醬(陰芷)」の別表現に過ぎない。

同様の表現は、『万葉集』中の他の歌にもある。例えば、作者不明の「娘部思 秋芽子交 蘆城野 今日乎始而 萬代尔将見(普通の解釈は「をみなへし、秋萩交る、蘆城の野、今日を始めて、万世に見む」とする。))」、石川朝臣老夫の作とされる「娘部志 秋芽子折礼 玉梓乃 道去畏跡 為乞兒(普通の解釈は「をみなへし、秋萩折れれ、玉梓の、道行きづとと、乞はむ子がため」とする。))」、中臣女郎の作とされる「娘子部 四 咲澤二生流 花勝見 都毛不知 戀裳摺香聞(普通の解釈は「をみなへし、佐紀沢に生ふる、花かつみ、かつても知らぬ恋もするかも」とする。))」などがあり、ここに出ている「娘部」は、全て「姫部」と同じと解することができる。

なお、「敦盛草」の語源を探るべく、全国各地の方言を渉猟していたところ、人間や哺乳動物の性器と関連するものが多いということに気づいた。この点については、東京山草会ラン・ユリ部会の部会誌上で「敦盛草の方言」として論説を公表している(2015年9月現在未完)。

⁶⁹ 「藤袴」が花の形状のことを指し、藤色(青紫色)で釣鐘状(袴型)の花をもつ植物のことを指すと解するとすれば、キキョウ科(*Campanulaceae*)やリンドウ科(*Gentianaceae*)の植物を意味すると解するのが合理的だろう。他方で、音をとるとすれば、「藤袴」は「とうこ」のような音になる。本草としての植物の中では、セリ科(*Apiaceae*)の「當歸(とうき)」が類似の音をもつ植物として存在する。「當歸」とは、シシウド(*Angelica sinensis*(*Oliver*)*Diels*)を指す。この植物は、グレゴリオ暦で8月頃に開花するので、秋に花を咲かせる植物だということができる。

⁷⁰ 「麻子の花」または「麻白の花」だと推定する。「朝兒」の「兒」を「菑落」の「落」と同じと考えると「麻落」となる。『神農本草經』には「麻蕒」の別名として「麻子」が出ている。「麻蕒」は、大麻草(*Cannabis sativa* L.)を意味するが、カラムシ(*Boehmeria nivea* (L.)*Gaudichaud-Beaupré*)と解する見解もある。「菑落」は大麻草の茎を乾燥した蕒状のもの(アサガラ)を意味する。大麻草は、雌雄異株の植物で、雄花は白く、雌花は緑色をしている。「朝兒之花」は、アサガラとして加工するための大麻草の収穫期を示すものではなかろうか。現代の日本では大麻取締法(昭和23年7月10日法律第124号)によって大麻草(*Cannabis sativa*)の栽培等が厳しく禁止・規制されているが、同法制定前には、主として植物繊維を得る目的で、日本各地だけではなく世界各国で広く大麻草が栽培されていた。大麻草については、後述の「湘夫人」のところで更に詳しく述べる。

⁷¹ 『懷風藻』の序には「天平勝宝三年冬十一月」と記載されているので、グレゴリオ暦では751年に成立したものと推定されている。一般に淡海三船が作成したものとされている。しかし、辰巳正明『懷風藻全注釈』(笠間書院、2012)12頁は、その作者(编者)について必ずしも明らかではないとしている。

⁷² 前掲『ものと人間の文化史 145 秋の七草』223~248頁は、『懷風藻』の「於賓宅宴新羅客」(68)にある「金蘭」をフジバカマ(藤袴)だとしている。

⁷³ 『懷風藻』の「初秋於長王宅宴新羅客」(62)、「於賓宅宴新羅客」(68)及び「春日於左僕射長王宅宴」(106)には「金蘭」とある。しかし、『黄帝内經素問』の「氣穴

論に「帝乃辟左右而起再拜曰 今日發蒙解惑 藏之金匱 不敢復出 乃藏之金蘭之室 署曰氣穴所在」とあり、この「金蘭」とは宮廷の文書庫を示す美名であること(郭靄春主編『黄帝内経内経素問校注』(人民衛生出版社、2013) 485 頁参照)、また、『抱朴子 外篇』の「接疏」に「抱朴子曰 以英逸而遭大明 則桑蔭未移 而金蘭之協已固矣」とあり、『藝文類聚』には「金蘭之友」とあることなどからすると、「金蘭」は、修辭(比喩)の一種ではないかと推定される。前掲『懷風藻全注釈』は『懷風藻』にある「金蘭」について様に「金の様に固くて断ち切れない友情の比喩」とした上で、更に、同書 283 頁は「蘭はラン科の植物で、君子の花」としている。この『懷風藻』にある「金蘭」は、植物としてのフジバカマ(藤袴)を指すものではない。

⁷⁴ 『懷風藻』の「元日宴」(67)には「蘭芳染舞巾」、「春月侍宴」(70)には「草秀蘭筵新」、「侍宴」(87)には「斜暉照蘭麗」、「飄寓南荒 贈在京故友」(112)には「風前蘭送馥」、「春日侍宴応詔」(30)には「春日歛春鳥 蘭生折蘭人」、「遊吉野川」(92)には「芝蕙蘭蓀沢」、「贈旧識」(114)には「三冬蘭蕙衰」とある。しかし、これらの「蘭」は、キク科のフジバカマでは全く説明できない。フジバカマの花は香らず(67、70、112)、春には開花しないどころか芽が出ているかどうかさえ怪しく(87)、春には蘭を折ることができず(30)、芝や蕙や蓀と一緒に山沢に生えることはまずなく(92)、冬には衰えるどころか地上部が枯れて消えてしまうのでその姿を見ることもできない(114)からだ。これらの「蘭」をフジバカマと解する見解は、キク科フジバカマ属植物(*Eupatorium*)の客観的・物理的な生態という事実を完全に無視し、それと矛盾することを平然と述べていることになる。

これに対し、『懷風藻』の「七夕」(56)の「桂月照蘭洲」はフジバカマの草叢を指し得るし、「秋日於長王宅宴新羅客」(77)の「蘭期」の「蘭」はフジバカマの乾燥葉の香りのことを指し得ると考えられる。なお、『懷風藻』にある「蘭」をラン科シュンラン属植物だと推定する見解を示すものとして、辻幸治「知りたい日本の園芸 シュンラン栽培は何時代から?」園芸 Japan 2015 年 10 月号 69 頁がある。

⁷⁵ 佩蘭(*Eupatorium fortunei*)の現在の分布は、陝西省、山東省、湖北省、湖南省、江蘇省、江西省、広東省、浙江省、広西チワン族自治区、貴州省、四川省、雲南省、海南省、ヴェトナム、タイ北部となっている。南方系の植物だと言える。現在の分布状況から考えると、数ある蘭草(*Eupatorium*)の中でも古代の楚の人々が接した可能性が最も高いものだということができる。

⁷⁶ 難波恒雄『原色和漢薬図鑑(下)』(保育社、1960) 32 頁は、蘭草について、「キク科(*Compositae*)のフジバカマ *Eupatorium fortunei* Turcz.であろう」としつつも、寇宗奭が「春芳しいものは春蘭で色深く、秋芳しいものは秋蘭で色淡い」云々と述べている点に関して、「この蘭はいわゆる蘭花のことで、ラン科(*Orchidaceae*)の東洋蘭の仲間のものであり、古来の蘭草とは全く異なるものである」と述べている。刈米達夫・木村康一監修『廣川薬用植物大辞典(修正版)』(廣川書店、1967) 317 頁は、「フジバカマ」の説明として、「中国渡来の多年生草本で日本西部の河辺に自生、また庭園にも植栽される。奈良朝時代に帰化したものをいう」とした上で「薬用には全草を開花時に採集して乾燥し、これを蘭草または佩蘭といい」としている。「開花時に採集」との説明に着目すべきだろう。

⁷⁷ 前掲『楚辞』と楚文化の総合的研究』53~57 頁[澁澤尚]。なお、出土標本それ自体には「蘭」との名札が付されていたわけではなく、それを発掘した研究者がその植物標本を「蘭」だと思ったということに過ぎない。従って、佩蘭に該当する植物標本

が存在するという事実は、それが「蘭」に該当するという事実の直接の証拠にはならない。その植物標本は、被葬者の埋葬当時、「蘭」とは別の名前では呼ばれていた植物かもしれないからだ。なお、長沙馬王堆漢墓から出土した『五十二病方』という医方書残片には「蘭」を用いた療方が記載されている。小曾戸洋・長谷部栄一・町泉寿郎『馬王堆出土文献訳注叢書 五十二病方』（東方書店、2007）50頁、76～77頁、198～199頁は、「蘭」を「フジバカマ」と口語訳しているが、そのよう解する科学的根拠は明らかではない。文献上の根拠としては、『神農本草經』をあげ、そこにある「蘭」は「澤蘭」を指すので「蘭草」が該当するとの解釈を示している（同書50頁）。同様の解釈は、前掲『簡帛医薬文献校釈』89頁、102頁、163頁にも示されている。『神農本草經』の「蘭草」には「味辛平 主利水道 殺蠱毒 關不祥 久服益氣 輕身不老 通神明 一名水香 生池澤」とあり、「澤蘭」には「澤蘭 味酸無毒。主治乳婦衄血 中風餘疾 大腹水腫 身面四肢浮腫 骨節中水 金創 癰腫瘡膿 一名虎蘭 一名龍棗 生澤傍」とあり、これら「蘭草」及び「澤蘭」をキク科フジバカマ属植物 (*Eupatorium*) と解釈するのが本草学上の通説なので、『五十二病方』の「蘭」と『神農本草經』の「蘭草」または「澤蘭」とが同一の植物だとすれば、キク科フジバカマ属植物に該当する可能性はあると言える。しかし、『神農本草經』は、馬王堆漢墓の被葬者・利蒼（前186年没）の時代から更に約200年を経た後に始まる後漢～三国の時代（20年～220年頃）に編纂されたものと推定されているので、同書にある「蘭草」及び「澤蘭」の概念は、馬王堆漢墓に埋葬された『五十二病方』が編纂された時期よりもはるかに後の時代における概念だということになる。そしてまた、屈原が生きた戦国時代及びそれ以前の時代における「蘭」をセリ科植物やシソ科植物等の「芷（菝）」と解すべき余地は十分にあり（前掲『孔子家語』の蘭）及び『荀子』の蘭（参照）、そのように解する場合には、本草学の通説における解釈論がほぼ全面的に崩壊することになる。馬王堆漢墓から発掘された遺物によって、その被葬者が『五十二病方』などの古代の医学書を読み、その療法に従って暮らしていた可能性は十分に推定される。しかし、それは、馬王堆漢墓の被葬者が「蘭」の意義についてキク科フジバカマ属植物だと解釈していたということを推定させ得るものだとしても、それが屈原の『楚辞』にある「蘭」と同一のものだとの事実の証明にはならない。屈原が生きた時代（前343年～前278年頃）と馬王堆漢墓の被葬者・利蒼（前186年没）が生きた時代との間には100年ほどの開きがある。結局、『楚辞』に含まれる個々の詩（賦）に書かれている「蘭」について、本稿における検討・考察が示すように、それがキク科フジバカマ属植物に該当すると解することが客観的な合理性を有するか否かを逐次個別に判断するのが妥当と思われ、また、そのような解釈方法論しか成立し得ないと考えられる。

⁷⁸ http://www.efloras.org/florataxon.aspx?flora_id=2&taxon_id=200023936 [2015年9月3日確認]

⁷⁹ 「白頭婆」は、『玉造小町子悲哀書』との名で伝えられている『悲哀書』に出てくる老婆を連想させる。『悲哀書』は、作者（空海?）が都の街路を散策していて偶然出会ったみすばらしい老婆に声をかけたところ、その老婆が自分の若い頃の栄華と落ちぶれた後の悲惨さを述べ、仏門に入りたいとの希望を示して終わるという構成になっており、能楽（申楽）にしばしば見られるのと同じような構成となっている。文章は全て漢文で、元になる漢詩が存在したと推定される。その老婆が若い頃の何ひとつ不自由ない豪華な暮らしをしていた頃の生活を示す下りに「数満蘭閨之裏」とあ

る。これを「婦人の室内には蘭の香りが満ち」と解釈するとすれば、ここにある「蘭」は、「芳香」を示す単なる修辭の一種に過ぎず、特定の植物種を指すものではないと考えられる。しかし、この部分を「婦人の室内には蘭がいっぱいあり」と解釈するとすれば、特定の植物種を指す可能性があることになる。この『壮哀書』の現代語訳としては朽尾武校注『玉造小町子壮哀書—小野小町物語』（岩波文庫、1994）があり、非常に参考になる。

⁸⁰ 白頭婆 (*Eupatorium japonicum*) の現在の分布は、中国（黒竜江省、吉林省、遼寧省、陝西省、山東省、浙江省、安徽省、湖北省、湖南省、江西省、福建省、広西チワン族自治区、貴州省、海南省、四川省、雲南省）、韓国、日本となっている。かなり中国東北部にも広く分布があることから、もともとは北方系の植物で、鮮卑族の南下に伴い中国南部にも広まった植物との可能性を考えることができる。逆から言うと、それ以前の時代には中国南部には存在しなかった植物かもしれない。

⁸¹ サケバヒヨドリ (*Eupatorium laciniatum* Kitamura) は、葉が小葉状に細裂することがある（北村四郎・村田源・堀勝『原色日本植物図鑑 草本編 [I] 合弁花類』（保育社、1957）88頁）。それゆえに「裂葉鶉」との名がある。Kew の分類では、サケバヒヨドリ (*Eupatorium laciniatum*) を中国の多須公 (*Eupatorium chinense* L.) と同一の植物として扱っている。雑種起源と推定される。この植物の苗が「フジバカマ（藤袴）」との名称で流通していることがある。キク科フジバカマ属に属する植物の遺伝子研究を示すものとしては、佐々木陽平・松本篤・滝戸道夫・吉浦衛・南雲清二「フジバカマと称される2タイプの植物について」生薬学雑誌 60 巻 1 号 15~20 頁、Gregory J. Schmidt and Edward E. Schilling, Phylogeny and biogeography of *Eupatorium* (Asteraceae: Eupatorieae) based on nuclear ITS sequence data, *Am. J. Bot.* May 2000 vol. 87 no. 5 716-726 がある。

⁸² 牧野富太郎『牧野日本植物圖鑑』（北隆館、1940）78 頁

⁸³ 「鶉」の字は「卑」と「鳥」を合わせてつくられている。「卑鳥花（卑鳥華）」は「びちよふあ」または「ひちよふあ」と読み得るので、これまた、本当の名前が「白頭婆（現代の中国語音韻では *bai tou po*）」であることを隠すためにあてられた漢字だと推定することができるかもしれない。ちなみに、鳥類の中にも「白頭婆」との中国名をもつものがある。「白頭婆」という鳥は、「白頭翁」、「白頭鶉」とも呼ばれる。現代の台湾では「白頭殼（ぺたこ）」と呼ばれているらしい。これは、スズメ目ヒヨドリ科のシロガシラ (*Pycnonotus sinensis*, Gmelin) のことを指す。この鳥は、主に中国に分布するが、日本の南西諸島にも棲息している。古代における鶉とは、スズメ目ヒヨドリ科のヒヨドリ (*Hypsipetes amaurotis*, Temminck) のことではなく、白頭鶉すなわちシロガシラのことを指すものかもしれない。古墳時代~奈良時代~平安時代初期には、縄文時代における温暖化の影響がまだ残っており、当時の日本国（倭國）は現在よりもかなり暑かったと推定されるので、シロガシラが畿内に飛来し棲息していた可能性がある。一般に、動植物の分布は気象変動と共に変化するので、そのことを考慮に入れて考察しなければならない。なお、古代の海岸線や地形等に関しては、遠藤邦彦『日本の沖積層—未来と過去を結ぶ最新の地層—』（富山房インターナショナル、2015）、山野井徹『日本の土—地質学が明かす黒土と縄文文化』（築地書館、2015）、松本健一『海岸線の歴史』（ミシマ社、2009）が参考になる。また、内容的には若干古いかかもしれないが、地理的条件を重視して古代史を考察したものとして、福永光司『「馬」の文化と「船」の文化—古代日本と中国文化』（人文書院、1996）がある。

⁸⁴ この解釈を採る場合、「加万」は植物の特定の部位・器官を指す名称だったと解することができる。別科の植物を前提とする場合、「加万」が植物名の本体で「布知波」は形容詞だと考えることは可能で、例えば、「蒲（ガマ、カホ）」の類を想定することができる。「藤袴」なる字は、『万葉集』の編者等によって後代にあてられたもので、当初からそのような字で表現される植物ではなかったのだろうと推定される。このような推定とは全く別に、藤色（青紫色）の薄荷の実（紫蘇の種子）のことを指すとの解釈も成立可能かもしれない。

⁸⁵ 中国における「白頭婆」との名称がどの時代から用いられていたかについて、綿密な検証・考証を要することは言うまでもない。なお、日本国における「藤袴」の由来について考えてみると、キク科フジバカマ属に属する何らかの植物が古代～江戸時代に「蘭」または「蘭花」として中国から輸入され、その後、帰化して定着した植物（園芸植物及びその交配品の野外逸出またはそれらの自然交雑）を「藤袴」として扱っているのではないかと推定される。長い年月の間に混乱・誤認が生じたのだろう。

⁸⁶ 「麥門冬」とは、ジャノヒゲ (*Ophiopogon japonicus* (L. f.) Ker Gawler) やヤブラン (*Liriope muscari* (Decaisne) L. H. Bailey) の類を指す。常緑性で冬でも枯れず、その根を生薬（中薬）の原料として利用するが、花が芳香を放つことはない。

⁸⁷ ラン科シュンラン属に属するランとその品種については、笹山三次・永野芳夫『東洋蘭譜』（加島書店、1957）が詳しい。このほか、黒崎陽人『東洋ラン・花物』（誠文堂新光社、1966）、東洋ラン柄物編集委員会編『東洋ラン・柄物』（誠文堂新光社、1967）、鈴木助三・鈴木愛國『原色古典園芸植物』（集英社、1971）、江澤慧主編『中国蘭花—奇花芸研究及奇花名品鑑賞』（中国林業出版社、2000）がある。日本にあるラン科植物とその栽培に関しては、イズミエイコ（丸山尚敏監修）『日本の野生ラン』（東京新聞出版社、1980）、鈴木吉五郎『続野生ランの栽培』（誠文堂新光社、1977）、同『続野生ランの栽培』（誠文堂新光社、1986）、東京山草会ラン・ユリ部会編著『ふやして楽しむ野生ラン』（農文協、2001）、小田倉正圀『日本の野生ラン—自然の姿を楽しむ』（主婦と生活社、1979）がある。

⁸⁸ このような見解については、小野蘭山『本草綱目啓蒙』を含め、誤認として批判する向きが多い。

⁸⁹ 日本語訳として、國民文庫刊行會編『續國譯漢文大成 文學部第九卷 白樂天詩集第一部』（國民文庫刊行會、1920）73～74 頁がある。

⁹⁰ 白居易には「草茫茫」（『全唐詩』卷四百二十七）という詩があり、この詩の趣旨について「懲厚葬也（厚葬を戒めるものなり）」との註がある。

⁹¹ 日本語訳として、國民文庫刊行會編『続國譯漢文大成 文學部 第十六卷 蘇東坡詩集四』（國民文庫刊行會、1930）580～581 頁がある。

⁹² 『揚子法言』の「吾子卷第二」に「或問 屈原智乎 曰 如玉如瑩 爰變丹青 如其智 如其智（あるいは問う、屈原は智者なのかと。答えて曰く、玉の如く、宝の如く、丹青に変化する。その智の如く、その智の如く）」とある。屈原の秀でた才知のことを指すと解する。

⁹³ 「真色」は、完全無欠を意味する。表面的には「丹青は真の色を反映する」といった意味になる。

⁹⁴ 『楚辞』の「離騷」に「名余曰正則兮 字余曰靈均（自分の名を正則とし、自分の字を靈均とした）」とあるので、「靈均」は屈原のことを指すと解する。

⁹⁵ 蘇東坡（蘇軾）が政争に破れ、皇帝から退けられて孤独に読書に励んでいた時期の心境を示すものではなかろうか。自らを春蘭にたとえ、草叢に紛れて姿を隠しても、芳香を漂わせるがごとく立派に生きていれば、いつか気づいてもらえるだろうという趣旨かもしれない。

⁹⁶ 春蘭（*Cymbidium goeringii*）の現在の分布は、中国（陝西省、安徽省、湖北省、湖南省、浙江省、江蘇省、江西省、福建省、広東省、広西チワン族自治区、貴州省、甘肅省、四川省、雲南省）、台湾、韓国、日本、ブータン、インド北西部となっている。韓国と日本にあるものは、古代の移入・植栽によるものの子孫という可能性がある。ブータンとインド北西部にあるとされているものについては、再検討の余地がある。

⁹⁷ 墨蘭すなわち報歳蘭（*Cymbidium sinense*）の現在の分布は、中国（安徽省、湖南省、江西省、広東省、福建省、広西チワン族自治区、貴州省、海南省、四川省、雲南省）、台湾、ヴェトナム、タイ、ミャンマー、インドとなっている。多種多様な蘭花（*Cymbidium*）の中でも古代の楚の人々が親しんだ可能性が最も高いものだと言える。日本にもあるが、これについては慎重な検討を要する。

⁹⁸ 蘇東坡の「送張軒民寺丞赴省試」（『蘇軾詩集』巻八）には「人競春蘭笑秋菊（人は春蘭を競い秋菊を笑う）」とある。小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集 第二冊』（筑摩書房、1984）412 頁は、「春蘭」と「秋菊」には優劣がないという考え方を前提にした上で、「人々は春の蘭ばかりを競いあって、秋の菊を嘲笑する（偏頗な風潮）」と訳している。

⁹⁹ 別の角度から考えてみると、蘇東坡（蘇軾）の「題楊次公春蘭」にある「蓬艾」なるものが実は春蘭それ自体の葉を意味するのだと解釈するのであれば、異なった角度からの検討が必要となる。ラン科シュンラン属の植物の葉は常緑性なので、冬でも枯れることがない。大株となり、それが葉だけの状態のときには、その草が蘭なののだとはわからない。ただの雑草が大きく叢生しているようにしか見えない。一般に、野生のシュンラン（*Cymbidium goeringii*）の花茎は、葉の丈よりも低く、その葉に隠れるようにして花が咲く。また、ラン科植物の種子を播種してみると、その実生の中からは花をつけることなく葉だけで生涯を終えるものが出てくることを知ることができる。この場合、花を楽しみにしている栽培者にとっては、葉だけの個体は、待てど暮らせど期待に届えてくれることのない単なる雑草の一種に過ぎないことになる。

¹⁰⁰ 「報歳」との語は、中国の主要な古典中にはない。「報歳」と同義の「豊年」との語が用いられるのは魏晉南北朝以降の時代となる。それゆえ、仮に「豊年蘭」が元の名だったとすれば、それを迎春のものとして飾るのは漢の武帝によって旧暦の正月に改められて以降ということになるので、議論の実益はほとんどないことになるかもしれない。ただ、「豊年」との語は現代語では「豊年」という意味もあるので、収穫期のことを指すことがあり得る。そうなると、議論がまた振り出しに戻る。いずれにしても、かつては「豊年蘭」または「豊歳蘭」だったものが、後の時代に「報歳蘭」に変化したという可能性は否定されない。

¹⁰¹ 古代の中国における正月は現在とは異なっていた。漢の武帝以降は、現在のように旧暦の1月1日を正月（春節）とするようになった。しかし、それ以前の時代には、異なっていて、殷代は12月、周代は11月、秦代は10月を正月としていたらしい。ただ、この10月、11月、12月が現在のグレゴリオ暦と一致しているかどうかは不明。仮に秦代以前の10月、11月、12月が現在のグレゴリオ暦の10月、11月、12月とほぼ一致していたとした場合、春夏秋冬の季節とは無関係に、正月を迎えるため

の「報歳蘭」は、寒蘭 (*Cymbidium kanran* Makino) のような遅咲きの蘭でなければならぬことになる。このように考えると、「報歳蘭」が現在の報歳蘭 (*Cymbidium sinense*) と同じ植物であると確実に言えるのは、漢の武帝以降ということになる。そして、グレゴリオ暦の 2 月では、普通の草はまだ芽が出るか出ないかくらいのもので、草叢に蘭が隠れるということもないことを考慮に入れると、ますますもって疑問が生ずる。あるいは、蘇東坡 (蘇軾) は、屈原の時代すなわち漢の武帝以前の暦が適用される戦国時代を想定してこの詩をつくったものかもしれない。すると、この詩にある「春蘭」は、寒蘭などの秋～晩秋に開花して芳香を漂わせる蘭だったかもしれないということにもなる。修辞の極みというべきか。なお、中国古代の暦については、平勢隆郎『中國古代紀年の研究—天文と暦の研究から—』(汲古書院、1996)、久保田剛『時令説の基礎的研究』(溪水社、2000) が参考になる。

¹⁰² 念のため、「フジバカマ (*Eupatorium* sp.)」として流通している植物苗を購入して栽培してみた。すると、小さな池の近くの水気の多いところで栽培したものは秋でも葉がしっかりしていたが、日向の軒下で育てたものは葉が傷んでしまった。また、この苗から育てた植物は芳香を放つことがない。花は 9 月中旬に開花したけれども、その香りが漂うことはない。しかし、その葉や茎を乾燥させたものからは確かに甘い芳香が漂う。この植物は、本来、乾燥葉や乾燥茎を小袋に詰めて匂袋として用いるべきもので、生きた植物体の葉や花の香りを楽しむ植物ではないと判断することができる。なお、フジバカマ (*Eupatorium japonicum*) の栽培に関しては、本田裕紀郎・伊藤浩二・加藤和弘「絶滅危惧植物フジバカマの種子発芽特性および埋土種子集団の形成可能性」ランドスケープ研究 (日本造園学会誌) 68 巻 5 号 693～696 頁がある。

¹⁰³ 『本草綱目』では「蘭草」と「蘭花」とを分けて説明しているのだが、「蘭草」がキク科フジバカマ植物と即断することはできない。『本草綱目』が引用する『名醫別録』の「蘭草」には「除胸中痰癖 生大吳 四月五月採」とある。「蘭草」が『名醫別録』に書いてあるとおりの植物だとすれば、まさに香草であるシソ科のハッカ (*Mentha*) の類以外にはあり得ない。すると、日本では、『本草和名』以来、大きな勘違いがずっと続いてきたというのが真相だと考える。なお、『本草和名』にある「布知波加万」は、「薄荷蒲」と読めないことはない。

¹⁰⁴ 小野蘭山『本草綱目啓蒙』も同じ。

¹⁰⁵ 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳 日葡辞書』(岩波書店、1980) 526 頁には、「Ran, qei ラン、ケイ (蘭、桂) 芳香のある草二種」及び「Ransō ランサウ (蘭草) Araraguino cusa. (蘭の草) この名で呼ばれる、芳香のある草」とある。『日葡辞書』は、日本の戦国時代にポルトガル人宣教師が収集した日本語彙集として非常に高い学術的価値があると考えられている。ところが、「Ran, qei」は、『説文解字』にある「蘭 香艸也」の直訳と同然のもので、また、「Ransō」の意味説明も同様だが「あらざぐさ」という訓読みを示しているところが異なる。「あらざぐさ」は「あら(新)」+「らぎ(らに・らん)」で、唐から新たに渡来した蘭を意味するものではないかと推定される。仮説だが、戦国時代には蘭花や蘭草の実物が既に失せてしまっており、日本人の知識人が古典籍を引用してポルトガル人に説明するしかなかったという可能性がある。

¹⁰⁶ 松岡玄達(恕庵)『怡顔齋蘭品』(1772) には、「蘭草類」の「澤蘭」としてシソ科のシロネ (*Lycopus lucidus* Turczaninow ex Benth) またはコシロネ (*Lycopus cavaleriei* H. Léveillé) が示され、「蘭花類」の「真珠蘭」としてイラクサ科のアカソ (*Boehmeria*

tricuspis (Hance) Makino) の図が示され、「珍珠蘭」としてクサスギカズラ科のヤブラン (*Liriope muscari* (Decaisne) L. H. Bailey) の図が示され、「蘭花類」の「蘭根」としてイネ科のチガヤ (*Imperata cylindrica* (L.) Raeuschel) の図が示され、「蘭花類」の「石蘭」としてウラボシ科のヒトツバ (*Pyrrosia lingua* (Thunberg) Farwell) の図が示されている。ヒトツバは、シダ植物で顕花植物ではないので、花を咲かせることがない。

¹⁰⁷ 本稿におけるのと同様の考察は、夏井高人「中国古典文献にみえる石斛の産地」やまくさ 64 号 137～177 頁、同「保久利—伝統的な有用植物の特定と法的課題」法律論叢 87 巻 4・5 号 45～68 頁、同「『孔子家語』の蘭」らん・ゆり 448 号 12～31 頁、同「『荀子』の蘭(1)」同誌 449 号 11～34 頁、同「『荀子』の蘭(2)」同誌 450 号 17～44 頁及び同「『荀子』の蘭(3・完)」同誌 451 号 25～52 頁でも試みた。

¹⁰⁸ 本稿においては、原則として、前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』を底本とすることとした。ただし、「中國哲學書電子化計劃」の Web サイト (<http://ctext.org/zh>) にある『楚辞』のテキストを参照して部分的に修正してある。

¹⁰⁹ 谷中信一『齊地の思想文化の展開と古代中國の形成』(汲古書院、2008) 480～528 頁が参考になる。

¹¹⁰ 『詩經』の「商頌・烈祖」にある。

¹¹¹ 張純一撰『晏子春秋校注』(中華書局、2014) 330 頁

¹¹² ヘロドトス(前 485 年頃～前 420 年頃)は、『歴史』第 1 卷 131 章で古代ペルシアの宗教について触れている。そこでは、ペルシア人は、「日、月、地、火、風、水」に対する祭祀を行っていたのだという(松平千秋訳『ヘロドトス』(筑摩書房、1967) 46 頁)。この古代ペルシア人が信仰の対象とした「日」を「金」に置き換え、「風」を「穀」に置き換え順序を並べ替えると、『春秋左傳』にある六府すなわち「水 火 金 木 土 穀」と同じとなる。非常に興味深い。

¹¹³ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』39 頁

¹¹⁴ 古い時代の「九歌」と『楚辞』の「九歌」との関係については、藤野岩友『巫系文學論』(大學書房、1951) が参考になる。

¹¹⁵ 前掲『楚辞集注全注釈二 九歌』6～7 頁参照に『楚辞章句』卷二「九歌」の序の部分の邦訳がある。

¹¹⁶ 「其詞必作歌樂舞鼓 以樂諸神」との部分、『古事記』や『日本書紀』にある天岩戸の神話に描かれている状況とほぼ符合するのではないかと思う。欽定四庫全書版の朱熹『楚辞集注』卷二の序では、この部分が「其祀必使巫覡作樂歌舞以娛神(祭祀では、必ず女の巫と男の巫に音楽を演奏させ、歌を謡わせ、舞を躍らせ、これによって神を楽しませた)」となっている。これは、日本の神社で奉納される神楽、田楽、申楽の類と基本的には変わらないものだと理解することができる。そして、『楚辞集注』卷二の序では、これに続けて、「蠻荆陋俗詞既鄙但而其陰陽人鬼之間又或不能無褻慢淫荒之雜(南蛮(楚)には野卑な習俗があり、その詞は既に鄙びたものとなっていた。その陰と陽、人と鬼との区別が乱れ、また、猥褻や淫濫が混じっていることがあった)」とある。このような様子は、現代においては様々な非難を受け得るもので、極端な場合には、公然わいせつ罪として処罰され得るものかもしれない。しかし、戦前の日本の田舎の祭礼等では比較的普通に一般的な習俗としてみられたものではないかと思う。古代の中国南部(楚や巴があった地域)における古い祭祀と古代の日本(倭國)における祭祀との間には、ほとんど双子と言っても過言ではないほどの相似性があると考えられる。

¹¹⁷ 「離騷」には、「國無人莫我知兮 又何懷乎故都」とある。これを意識すると、「楚国にはまともな人材はなく自分に注目してくれる人もいないので、故国に思い残すことは何もない」となる。楚の対秦政策に関する政争に破れて失脚し、政治的な地位や実質的な権力を回復する見込みを失い、仮に屈原が地位を回復したとしても楚の國が既にボロボロになってしまっており、猛進する秦の軍門に下る以外にはない状況に至ってしまったことへの屈原の絶望感を強調しているように思う。

¹¹⁸ ここには「奏九歌」とあるので、屈原の時代には歌詞を除いた旋律部分だけが「九歌」として伝わっていてそれを楽曲として演奏したと解することもできるが、「奏」を「歌唱しつつ演奏すること」と解すると、旋律だけではなく歌詞も存在していたと解することができる。

¹¹⁹ 現在でも中国の少数民族の歌謡の中にその断片または残滓のようなものが残存しているかもしれない。「九歌」に含まれている詩の中にはそのような疑いを抱かせるものを極めて多い。なお、この点については、前掲黄靈庚『楚辭與簡帛文獻』162～194頁が参考になる。

¹²⁰ 『楚辭』の「九歌」は、元は合計9個の詩で構成されていたとの見解もある。この問題の根底には「九歌」の全体構成をどのように理解するかという問題があり、様々な議論がある。この点については、吹野安『楚辭集注全注釈二 九歌』（明德出版、2005）215～230頁に収録されている「楚辭「九歌」礼魂考」、吹野安『楚辭集注全注釈一 離騷』（明德出版、2004）309～323頁に収録されている「『楚辭』の文学的系列について」、前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』68～69頁、前掲石川三佐男『楚辭新研究』292～308頁、前掲黄靈庚『楚辭與簡帛文獻』45～63頁が参考になる。

¹²¹ 古代の中国における『楚辭』の「九歌」の歴史の変遷等に関しては、『『楚辭』と楚文化の総合的研究』219～244頁[谷口洋]が参考になる。

¹²² 「山鬼」にも「石蘭」とあるけれども、割愛する。「山鬼」については、非常に難しい問題がある。素材となった伝承等が西域由来のものとするか、それとも、楚のような南方系のものとするかによって根本的なところで解釈に相違が出てしまうのだ。『山海經』の「西山經」にある記述等を基礎として考察すると、現在の中国甘肅省（特に酒泉市、蘭州市周辺）及び寧夏回族自治区（特に賀蘭山周辺）やそれよりも西方の地域を意識してものごとを考えなければならない。甘肅省には、後述の「北周史君墓」があり、五胡十六国の時代にはソグド系の文化が濃厚だったと推定される。更に古い時代には「馬家塬戦国墓地」があり、やはり胡人の文化圏だったと推定される。この地域は、古代の気象条件の相違を考慮に入れても、楚の地とは相当異なる気候と風土をもつ。更に、「山鬼」に出てくる植物についても、山鬼という精霊のような存在をどのようにとらえるかによって相当異なった解釈となる。例えば、「石蘭」については、ラン科セッコク属植物 (*Dendrobium*) を示す石斛が該当すると考える見解もあるけれども、判然としない。仮に「石蘭」がラン科植物の植物だとしても、石斛ではなく、ラン科ツルツチアケビ属 (*Erythrorchis*) の蔓性植物である倒吊蘭 (*Erythrorchis altissima* (Blume) Blume (Syn. *Galeola altissima* (Blume) H. G. Reichenbach)) を考えることも可能なので、「石蘭」の解釈は非常に難しい。紙数の関係もあるので、「山鬼」の解釈については他日を期したい。

¹²³ 派生的に様々な検討課題が生ずる部分があるけれども、そのようなものについては、それぞれの該当箇所において、注記の形式により、その問題の所在と私見を述べることにした。私見は、単なる仮説や感想に過ぎないものを含む。

¹²⁴ 太鼓のような楽器を叩くのではなく、日本の神社における参拝の際と同様に拍手を打つことを指すのかもしれない。あるいは、日本の神社の巫女のように鈴を手に持ち、それを打つようにして鳴らしたのものかもしれない。現時点では確定できない。なお、李国棟「玉で結ぶ日本列島と長江下流域」広島大学大学院文学研究科論集 66 巻 103～118 頁が参考になる。

¹²⁵ 一般に、「娉女」とは、女性の巫を指すものだと言われている。中国では、女性の巫を「巫」といい、男性の巫を「覡」という。古代の巫がどのようなものであったのかについては、中国の少数民族に残されているシャーマン・巫の祭祀を知ることが非常に有用だと思われる。この関連では、張紫晨（伊藤清司・堀田洋子訳）『中国の巫術—原理・祭祀・鬼祓い・招魂・シャーマニズム等』（学生社、1995）、萩原秀三郎『稲を伝えた民族—苗族と江南の民族文化』（雄山閣、1987）、同『カミの発生—日本文化と信仰』（大和書房、2008）、呂大吉・何耀華総主編『中国各民族原始宗教資料集成 考古卷』（中国社会科学出版社、1996）、王貞月『台湾シャーマニズムの民俗医療メカニズム』（中国書店、2011）、龍運光・蕭成紋・吳國勇・鄧星煌主編『中国侗族医薬』（中医古籍出版社、2011）、陸科閔・陸彝中『苗族方剂学』（貴州科学出版社、2009）、李国棟『稲作文化にみる中国貴州と日本』（雄山閣、2015）が参考になる。また、文化圏が異なるかもしれないが、ヒッタイトの巫については、中村光男「ヒッタイトの祭祀の一断面—huuasi—に関する若干の考察」東京大学考古学研究室研究紀要 3 号 139～166 頁が参考になる。

¹²⁶ 全体として、日本の謡曲「鶴亀」と類似した部分がある。「鶴亀」は、「山河草木國土ゆたかに千代萬代と 悦び給へば官人駕輿丁御輿を早め 君の齢も長生殿に君の齢も長生殿に 還御成るこそ めでたけれ」との句で締めくくられる。

¹²⁷ 本田二郎（原田種成校閲）『周禮通釋 上』（秀英出版、1977）、同『周禮通釋 上』（秀英出版、1979）が参考になる。

¹²⁸ 西岡弘『中国古代の葬礼と文学』（三光社出版、1970）が参考になる。

¹²⁹ 「巴」の語源・意義については諸説あり、定説がない。しかし、古代の四川省付近には巴という国があった。巴の文化については、古賀登『四川と長江文明』（東方書店、2003）、李進増主編『古蜀王国—三星堆和金沙遺址出土文物精華録』（寧夏人民出版社、2012）、四川省文物考古研究院編『巴蜀埋珍—四川五十年搶救性考古發掘紀事』（天地出版社、2006）が参考になる。巴の地が秦の支配下となった秦恵王の時期（前 336 年ころ）と推定される墳墓（四川省青川県）から 1979～1980 年に発掘された漆器は、赤と朱色で彩色されており、図柄や筆致がヘレニズム的な工芸品といった印象を与える（『巴蜀埋珍』40～42 頁）。

¹³⁰ 『新釈漢文大系 34 楚辞』103～104 頁は、巫女が手にもつ「香草」を指すと解しつつも、「芭蕉」のことではないかとの見解も引用している。しかし、芭蕉は芳香を放たないので、芳香にこだわる限り、芭蕉説をとることはできない。むしろ、日本の神社の神事で用いられる榊（さかき）のような植物を想定したほうが妥当なのではないかと思う。

¹³¹ 『日諱貴本紀』には関連する事柄が多数述べられている。なお、『日諱貴本紀』に関するものとしては、吉田唯「『日諱貴本紀』の国譲り神話に見る天照大神の両性具有性」國文學論叢 54 輯 1～24 頁がある。

¹³² 「春蘭秋菊」との句は、一般的には、「どちらもかけがないもの」または「どちらも遜色のないもの」といった意味をもつ修辭（成句）として用いられる。

133 『呂氏春秋』にもそのような思想が顕著に現れており、季節の変化に対応させて、統治と軍事の要点が述べられている。『呂氏春秋』では、全体として、国の農業政策と軍事とは密接不離なものとして扱われている。

134 農業を適切に統率できなければ天子（君主・帝）としての資質を疑われ、帝位を失う結果になるだろうと想像する。『禮記』の「月令」では、季節によって天子が着用する衣服を換えるということが定められている。その目的は、文字を読むことのできない民衆であっても天子の服の形や色を見れば、現時点がどの季節・時期に該当するのかを知ることができるようにすることだったのではないかと考えられる。天子は、その着用する衣服の色によって、いわば「歩くカレンダー」としての社会的機能を有していたのではなかろうか。

135 現時点では太陰暦（月暦）と太陽暦（日暦）とは相当ずれてしまっている。また、閏年の概念が導入される以前の時代とそれ以降の時代とでは太陽暦と太陰暦との間のずれの大きさが異なっている。

136 日本の宮中祭儀では、祈年祭（3月）と神嘗祭（10月）が同様の古来の農耕儀礼を今日に伝えるものになるのではないかと思われる。

137 武内照夫『新釈漢文大系 27 礼記 上』（明治書院、1971）235～236頁は、鞠衣は「菊桑の服ともいい、桑の葉にかたどっている。蚕が桑をよく食って良いまゆを造るようにと祈る」としている。『日本書紀』巻第十四の雄略天皇六年三月に、雄略天皇が皇后に養蚕を勧めたとの記述がある。これは、『禮記』にある月令をそのまま踏襲するものだと言える。

138 夏偉瑛『植物名釋札記』（農業出版社、1990）151～152頁

139 「靡」は「淫靡」や「奢靡」との語にも用いられるので、内心で批判的・皮肉的な感情を込めてなされる「贅沢なこと」の表現ではないかと思う。『史記』の「殷本紀」には「帝紂」について「好酒淫樂 嬖於婦人 愛妲己 妲己之言是從（酒好き淫蕩で、他人の妻を自分の妾とし、妲己を愛して妲己の言いなりとなった）」、「於是使師涓作新淫聲 北里之舞 靡靡之樂 厚賦稅以實鹿臺之錢 而盈鉅橋之粟 益收狗馬奇物 充仞宮室 益廣沙丘苑臺 多取野獸蜚鳥置其中 慢於鬼神 大聚樂戲於沙丘（そして、師涓（楽師）に新たに淫聲の樂、「北里之舞」と「靡靡の樂」をつくらせた。税を重くして集めた錢で鹿臺を満たし、鉅橋の倉庫を穀物でいっぱいにし、狗や馬や奇妙な文物をとりあげて宮殿いっぱい収納し、沙丘という離宮を拡張し、野獸や飛鳥を捕獲してはその中に放った。鬼神のごとく慢心し、沙丘で大いに楽しみ戯れた）」、「以酒為池 縣肉為林 使男女裸相逐其間 為長夜之飲（酒で池をつくり、肉を掛けて林立させ、男女を裸にして互いに追い回させ、夜通しで飲食した）」とある。ここに「靡靡之樂」とあるのも、文脈からして、「淫靡な音楽や奢靡な音楽」という意味ではないかと思われる。ただ、「淫聲」との表現は、（西方から渡来した珍奇な音楽の要素を導入し）伝統的な禮で用いられていた旋法とは異なるような新たな樂を興隆させたというだけのことかもしれない。これらの点については、江文也『東洋文庫 774 上代支那正樂考—孔子の音楽論』（平凡社、2008）88～90が参考になる。

中国において殷（商）が滅びた紀元前 1000 年頃の時代には、イタリア半島ではエトルリア人の国々が栄え、ギリシアではスパルタが建国され、イスラエル王国ではダビデ王やソロモン王による絶頂期を迎える一方でアッシリアが台頭し、イラン高原のエラム王国（シュトルク朝）が衰退して混乱期を迎えている間に、その北方にスキタイが勃興し、インド亜大陸ではアーリア人が侵入してヒンズー教（バラモン教）を

信奉する諸王国が形成されたとされている（エラムから移動した人々かもしれない）。つまり、世界史規模でみると、全体として、相当大規模な民族とその文化の移動があったと考えざるを得ない。周による殷（商）の攻撃にはじまり戦国時代まで続く諸族の群雄割拠と混乱は、そのような世界規模での大変動の一部として考えられるべきだろう。そして、この頃に中国大陸から日本列島に大規模な移住があったことが知られているから、殷（商）と周及びその支配下にあった諸族、あるいは、中国南部の楚の地にあった諸族が周の圧迫を受けて日本列島に大規模移動し、これら諸族と先住の海洋系民族との混合によってその時期における倭人の基礎を形成した可能性が高い。比喩的に言えば、地球規模で諸民族の玉突き現象が生じたと理解するのが正しい。古代の楚の民俗や文化についてもまた、そのような大きな枠組みの中で再検討されるべきではないかと思う。従来からある考え方だけでは、古代の東アジアで発生した鉄器製造技術の起源、あるいは、現在まで伝承されている苗族等の中国南部少数民族の極めて秀逸な貴金属製品（装飾品）加工技術の起源を十分な説得力をもって説明することができない。なお、『史記』の「殷本紀」の日本語訳としては、前掲『新釈漢文大系 38 史記 一（本紀）』がある。本稿においても参考にした。

¹⁴⁰ 『淮南子』の「天文訓」の日本語訳としては、前掲『新釈漢文大系 54 淮南子 上』があり、本稿でも参考にした。

¹⁴¹ 『文始真經』の「九薬」には、關尹子曰として「天不能冬蓮春菊（天は、冬に蓮の花を咲かせることはないし春に菊の花を咲かせることもない）」とあるから、現在の植物分類学上ではキク科植物に分類されている植物でも春に開花するものは菊の範疇に属しなかったということを理解することができる。『文始真經』は、『關尹子』とも呼ばれる。『漢書』の「藝文志」に「關尹子九篇」とある。

¹⁴² 祁承経・喻勳林『湖南種子植物総覧』（湖南科学技術出版社、2002）』391頁（ただし、同書では旧属名の「*Dendranthema*」に属する植物として記載されている。）、齊建文・黄志軍・戴勇主編『湖南六步溪国家級自然保護区生物多様性研究』（中国林業出版社、2012）208頁

¹⁴³ 野菊（*Chrysanthemum indicum*）の現在の分布は、ロシア、ウズベキスタン、中国（黒竜江省、河北省、河南省、安徽省、湖北省、湖南省、山東省、江蘇省、江西省、広東省、福建省、広西チワン族自治区、貴州省、四川省、雲南省）、台湾、韓国、日本、ブータン、ネパール、インドとなっている。蒙古高原には分布がないようなので、もともとは中央アジア原産の植物で、ソグド人などの様々な種族が西方から東方へ移動するに伴って中国に広まった可能性がある。

¹⁴⁴ 甘菊（*Chrysanthemum lavandulifolium*）の現在の分布は、モンゴル、中国（内モンゴル自治区、吉林省、遼寧省、陝西省、山西省、山東省、安徽省、湖北省、湖南省、浙江省、貴州省、江蘇省、江西省、甘粛省、青海省、四川省、雲南省、新疆ウイグル自治区）、台湾、韓国、日本、インドとなっている。もともとは蒙古高原のようなところを原産とする北方系の植物で、鮮卑族やモンゴル系諸族の南下に伴って中国南部にも広まったものかもしれない。ただし、植栽の可能性は否定されない。

¹⁴⁵ 野菊（*Chrysanthemum indicum*）の学名は、日本ではシマカンギクの学名として用いられている。中国の野菊（*Chrysanthemum indicum*）と日本のシマカンギクとが同一種だとすれば、シマカンギクは、中国から輸入された野菊（*Chrysanthemum indicum*）の原種が野生化して残存しているものとして理解することができるだろう。日本にある近縁種・類似種は、江戸時代に作出された交配品ではなかろうか前掲『北川四郎

選集Ⅱ 本草の植物』189頁は、「中国で唐代以前にできた雑種起源の植物である。唐代以後宋代に大きく改良された。日本では中国から伝来し、平安の初めから宮廷で栽培されたが、江戸時代中期に大きく改良されて、現代の園芸の菊ができた。唐以前の菊、鞠は雑種でない野生種であろう」としている。また、牧野富太郎『植物集説 上』（誠文堂新光社、1935）322～332頁、同『植物集説 下』（誠文堂新光社、1936）281～288頁は、奈良時代～平安時代以前の日本には菊の自生はなく、全て中国から渡来したもので、園芸品種として改良されて現在に至っているとの見解を示している。なお、日本の野菊に関する比較的最近の図鑑としては、いがりまさし『山溪ハンドブック 11 日本の野菊』（山と溪谷社、2007）がある。

¹⁴⁶ 前掲『湖南種子植物総覧』387～388頁、前掲『湖南六歩溪国家級自然保護区生物多様性研究』208頁

¹⁴⁷ 甘菊 (*Chrysanthemum lavandulifolium*) は、日本で園芸品として広く流通しているコギク（小菊）の交配親ではないかと思われる。江戸時代に清から輸入されたものと推定される。小野蘭山『本草綱目啓蒙』卷之十一の「菊」には「菊花種類多シ 大抵二品二分ツ 薬食ニ用ル菊ト花ヲ賞スル菊トナリ 薬用ノ菊ハ甘菊ナリ」とある。三基脉紫菀 (*Aster trinervius*) は、日本のコンギクとほぼ同様の形態を示す植物で、その舌状花は美しい紫色を示すものが多い。日本にあるコンギクは、園芸交配品として認識されているが、三基脉紫菀 (*Aster trinervius*) から派生した品種ではないかと思われる。

¹⁴⁸ 前掲『湖南種子植物総覧』407頁、前掲『湖南六歩溪国家級自然保護区生物多様性研究』208頁

¹⁴⁹ 中国名「千里光」に該当する植物の和名は「タイキンギク（堆金菊）」で、「林蔭千里光」に該当する植物の和名は「キオン（黄苑）」となっている。

¹⁵⁰ 大呉風草 (*Farfugium japonicum*) の現在の分布は、中国（湖北省、湖南省、浙江省、広東省、福建省、広西チワン族自治区）となっている。かなり限定された地域に自生する植物だと言える。台湾と日本にもあるが、それらは移入・植栽によるものではないかと推定される。日本では、戦国時代以降に福建商人が日本国へ持ち込み、その苗や種子が日本国内各地で植栽・播種された結果、増えたものだろうか（古くからの自生は存在しないと思われる。また、帰化により野生化した状態にあると言えるような地域は極めて限定されている。）。

¹⁵¹ 小野蘭山『本草綱目啓蒙』卷之八の「白頭翁」の項には、白頭翁の別名として「ツワブキ 參州」との記述がある。白頭翁は、日本では、キンポウゲ科のオキナグサ (*Pulsatilla cernua* (Thunberg) Berchtold & Presl) のことを指すものと理解されている（難波恒雄『原色和漢薬図鑑（上）』（保育社、1960）32頁）。中国では、オキナグサ (*Pulsatilla cernua*) は「朝鮮白頭翁」と呼ばれ、白頭翁 (*Pulsatilla chinensis* (Bunge) Regel) と区別して扱われている。キク科ツワブキ属のツワブキ (*Farfugium japonicum*) は、日本では「石蓐」または「艶蓐」と書かれるが、中国名は「大呉風草」となっており、一致していない。大呉風草は、「橐吾(たくご)」または「八角烏」との名で生薬（中薬）原料とされることもあるが、「橐吾」は、キク科メタカラコウ属 (*Ligularia*) の植物全般を指す。中国の福建省では「蓮蓬草」との名で民間薬として全草が用いられるらしいし、日本でも食用とする。「橐吾」は、音読みでは「トゥフ」と読めるので、「つわぶき」の語源と推定される（前掲『折節の花』208～209頁）。「石」は「つわ」またはこれに類する発音にならない。なお、中国産のキク科ツワブキ属植物につ

いては、岡本育子ほか「中国産キク科 *Ligularia kanaitzensis*, *Ligularia vellerea*, *Ligularia subspicata* および *Ligularia lamarum* の化学成分と遺伝子の多様性」第 49 回天然有機化合物討論会講演要旨集 247~252 頁が参考になる。

¹⁵² 仮にツワブキ (*Farfugium japonicum*) やサワオグルマ (*Senecio pierotii*) が該当するとした場合、朱熹等による代表的な注釈書の基礎が揺らぐことになる。

¹⁵³ 「蘭」が香りの良い植物一般(香草)を指した可能性があることなどについては、前掲『孔子家語』の蘭及び『荀子』の蘭で検討した。

¹⁵⁴ 春蘭(しゅんらん)は、現在の中国では、主に安徽省、江蘇省、福建省、甘肅省、広東省、広西チワン族自治区、貴州省、海南省、湖北省、湖南省、江西省、陝西省、浙江省、四川省、雲南省、台湾に自生している。中国以外では、日本のほか、韓国、ヒマラヤ、インドに自生している。

¹⁵⁵ 報歳蘭(ほうさいらん)は、中国では墨蘭(もらん)、報春蘭(ほうしゅんらん)、豊歳蘭(ぼさいらん)とも呼ばれる。比較的暖かい地方に自生するもので、現在の中国では、主に安徽省、福建省、広東省、江西省、広西チワン族自治区、四川省、雲南省、台湾などに自生している。これら中国における墨蘭の自生地となっている地域は、古代の楚の主要な支配地(領土)と大きく重なっている。なお、中国以外では東南アジアの山地に自生する。報歳蘭は日本にも自生があるとされているが、園芸植物の植栽または帰化植物の一種だろうと思われる。とりわけ、薩摩藩によって清から輸入・植栽された栽培品の可能性が高い。河原田盛美『沖繩物産志』(1874)には、報歳蘭(ホウサイラン)の説明として「琉球にては皆清国福州より持来りしもの也」とあり、素心蘭(ソシンラン)の説明として「是も清国より舶来せしもの」とある。同書の現代語訳として、河原田盛美(増田昭子編、高江洲昌哉・中林広一・中野泰校訂)『東洋文庫 859 沖繩物産志一附・清国輸出日本水産図説』(平凡社、2015)がある。また、呉継志(原田禹雄訳注)『訳注質問本草』(榕樹書林、2002) 573 頁の注 2 には、報歳蘭の項の説明に「即建蘭之流亞也」と記載されていることの注記として、「建蘭という名は、四川省の扇子を川扇とよぶように、福建省の蘭ということであろう。秋蘭ともよび」とある。『質問本草』は、天明 5 年(1785 年)に完成し島津重豪に献上された後、天保 8 年(1837 年)に刊行されたい。その経緯については、上野益三『薩摩博物学史』(つかさ書房、1982) 182~190 頁及び 235~245 頁が詳しい。

¹⁵⁶ 蕙蘭(けいらん)の花は、虎頭蘭の花と似ており、基本的に緑花で、新弁は淡黄色の地に赤色の斑点模様が入る。グレゴリオ暦では 7 月~9 月に開花する。現在の中国では、主に安徽省、福建省、甘肅省、広東省、広西チワン族自治区、貴州省、河南省、湖南省、浙江省、江西省、陝西省、四川省、雲南省、チベット自治区、台湾に自生する。中国以外では、ヒマラヤ、インドに自生する。

¹⁵⁷ 虎頭蘭(ことうらん)は、グレゴリオ暦では 1 月~3 月頃に開花する。その花は緑花で、唇弁は白地に茶褐色の斑点模様が入り、1 本の茎に多数の花をつける。現在の中国では、主に広西チワン族自治区、貴州省、広東省、四川省、雲南省、チベット自治区に自生している。現在の日本国の領土内には存在しないが、類似する花を咲かせるものが春蘭等の品種中には存在する。

¹⁵⁸ 硬葉蘭(こうようらん)は、日本のヘツカラン(*Cymbidium dayanum* H. G. Reichenbach)と似ていて、樹木の樹幹に着生し、ペンダント状の花穂を下垂させて多数の花を咲かせる。しかし、硬葉蘭の開花時期は、グレゴリオ暦で 3 月~4 月頃、春咲きになっているところが秋咲きのヘツカランと基本的に異なる。硬葉蘭の花は赤

褐色で、唇弁は黄色地に赤褐色の斑点模様が入る。現在の中国では、主に広東省、広西チワン族自治区、貴州省、海南省、雲南省に自生している。中国以外では、東南アジア、ヒマラヤ、インド、バングラディシュに自生している。

¹⁵⁹ シュンラン属 (*Cymbidium*) に属するラン科植物に関しては、前掲「保久利ー伝統的な有用植物の特定と法的課題」、前掲『孔子家語』の蘭」でも私見を述べた。

¹⁶⁰ 現在の湖南省に分布はないが、蕙蘭とよく似た植物として莎葉蘭 (*Cymbidium cyperifolium* Wallich ex Lindley) がある。グレゴリオ暦で3~5月に開花する。中国南部 (広西チワン族自治区、貴州省、海南省、四川省、雲南省)、台湾、フィリピン、東南アジア、ヒマラヤに広く分布する。その花は、日本の「対馬匂春蘭」と似ている。

¹⁶¹ 古代の楚の南方山地や低地ではかなり温暖だったと推定されるので、現在では亜熱帯~熱帯にある植物で四季咲きのものが該当するかもしれない。しかし、特に「春蘭」として季節を明記していることから推定すると、「春蘭」は四季咲きの植物を指すものではなく、当時の暦の上での春にのみ開花する植物を指すものと理解するのが妥当だろう。

¹⁶² 日本国の古典園芸等においては、常緑の植物をいわゆる「縁起もの」として珍重することがある。例えば、万年青 (オモト) や万両 (マンリョウ) がその代表的なものだと言える。古典園芸の中での蘭科植物としては、春蘭 (シュンラン) や富貴蘭 (フウラン) の常緑の葉を愛でることにも一脈通ずるところがあるのではないかと思う。

¹⁶³ 能においては、過去の人の亡霊が現れて物語するという形式をとるものが少なくない。そのような様式の原型は、古代中国で行われていた祭祀・儀礼のように、神鼓や笛などにより演奏される音楽に合わせた歌謡によって降霊の儀式を行い、降臨した霊と共に謡い舞い踊るように演じ、そして、霊が満足して静かに消えていく様子を演ずるといようなものだったのかもしれない。『古語拾遺』には「猿女君氏 供神楽之事」とあり、「猿女」は「猿女」と同じで「さるめ」と読み、天岩戸神話で知られるアメノウズメの子孫とされる。アメノウズメは、『古事記』では「天宇受賣命」と書いてあり、『日本書紀』では「天鈿女命」と書いてある。「受賣」と「猿女」は、元は同じもので、例えば、『楚辞』の「禮魂」にある「婞女」だったかもしれないと思われる。「猿女」は、女性の巫女で、神楽を奉納したとされている。そのことから、「申楽」と「神楽」は同じとも理解されている。なお、申楽については、世阿弥 (表章校註)『申楽談儀』(岩波文庫、1960)、武田祐吉編『神楽歌・催馬楽 (附 東遊・風俗)』(岩波文庫、1935) が参考になる。また、能と並ぶ日本の古典演劇の一種・狂言の歴史に関しては、大蔵虎明 (笹野堅校訂)『わらんべ草』(岩波文庫、1962) が参考になる (特に同書 430~431 頁に収録されている「道倫碑銘」の記載内容が重要だと考える。この碑銘は漢文で書かれている。。「猿女」については、坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋『日本書紀 (一)』(岩波文庫、1994) 380~381 頁が参考になる。「古楽」については、正宗敦夫編『日本古典全集 信西古楽圖』(現代思潮新社、復刻オンデマンド版 2007) が非常に参考になる。『風姿花伝』及び『花鏡』の現代語訳としては、世阿弥 (小西甚一編訳)『風姿花伝・花鏡』(たちばな出版、2012) がある。日本の神社では、式内社天目一神社 (現在の名は青玉神社・兵庫県多可郡多可町加美区山寄上) で巫女により奉納される『浦安の舞い』と『四方拜』が興味深い。同社では天戸間見命 (天目一箇命) を祭神として祀り、大歳御祖命を合祀している。天目一箇神は天津彦根命の子で鍛冶 (製鉄) の神として知られる。

¹⁶⁴ 日本語の定型的な挨拶に「御日柄もよく」云々とすることがしばしばある。古代

の中国から伝承した定型的な表現形式の一種なのではないかと思う。

¹⁶⁵ 「珥」とは刀剣の柄の「つば」の部分を目指す。「玉珥」なので、美しく宝飾されたものを示していると考えられる。ここでいう「玉」が宝石などを意味するのか金製品のようなものなのかは不明。中国貴州省等に居住する少数民族・苗族の女性は、極めて美しく精巧な銀細工品（銀飾）で身を飾ることで知られているので、そのようなものを示すものかもしれない。この銀飾は、数千年の歴史をもつものとされている。なお、湖南省の墳墓等において発掘された古代の金銀の装飾品については、喻燕姣『湖南出土金銀器』（湖南美術出版社、2009）が参考になる。剣に関しては、前掲『荀子』の蘭(2) 脚注 10 でも述べた。

¹⁶⁶ 武人または巫が祭壇を拝するときには、腰に下げた太刀のつばや装飾品に手を触れたり揺らしたりして音を立てるような慣習があったのかもしれない。前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』70 頁は、「仕えまつる巫が長剣の玉の柄頭を握れば」と訳している。日本国の類似の祭礼としては、かなり多数の神社において、巫女が小刀の柄のつばの部分に鈴をつけたものを手に以て舞う神事が存在している。長い刀を用いる神事としては、上御霊神社（京都市上京区上御霊前通烏丸東入上御霊堅町）の刀舞と大山阿夫利神社（神奈川県伊勢原市大山）の倭舞がある。大山阿夫利神社の倭舞は、巫女が腰に刀を挿して舞うものなのだが、これは、明治 6 年（1873 年）に阿夫利神社神官・権田直助が奈良の春日大社（奈良県奈良市春日野町）の富田家から伝授されたものらしい。日本の古墳等で発掘される鈴鏡については、夏井高人「美多加羅葉」らん・ゆり 438 号 5～39 頁、同「比布利也未比（日震病）の葉方（上）」らん・ゆり 439 号 6～53 頁でも述べた。古代の中央アメリカにおける祭器としての鏡については、狩野千秋「斧・鏡・玉—オルメカの三種の宝器をめぐる一考察」東京大学考古学研究室研究紀要 5 号 195～222 頁が参考になる。

¹⁶⁷ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』70 頁は、「璆鏘（キウサウ）」について「佩び玉の打ち触れる音」とし、「琳琅（リンラウ）」について「美しい球の名・佩び玉にする」としている。『史記』の「夏本紀」には「華陽黒水惟梁州 汶 岷既藝 沱 洑既道 蔡 蒙旅平 和夷底績 其土青驪 田下上 賦下中三錯」、「貢 璆 鐵 銀 鏤 罍 磬 熊 羆 狐 狸 織皮」、「西傾因桓是來 浮于潛 踰于沔 入于渭 亂于河」とあり、また、「黒水西河惟雍州 弱水既西 涇屬渭汭 漆 沮既從 澧水所同 荊 岐已旅 終南 敦物至于鳥鼠 原隰底績 至于都野 三危既度 三苗大序 其土黃壤 田上上 賦中下」、「貢 璆 琳琅玕 浮于積石」、「至于龍門西河 會于渭汭 織皮毘毘 析支 渠搜 西戎即序」とあるから、「璆」、「琳」及び「瑯」は、本来的には、何らかの鉱物（原石またはその加工品）を示すものだと理解するほうが合理的ではないかと思う。『尚書』の「夏書」の「禹貢」には「黒水 西河惟雍州 弱水既西 涇屬渭汭 漆沮既從 澧水攸同 荊 岐既旅 終南 惇物 至于鳥鼠 原隰底績 至于猪野 三危既宅 三苗丕敘 厥土惟黃壤 厥田惟上上 厥賦中下」、「厥貢 惟球 琳琅玕 浮于積石」、「至于龍門 西河 會于渭汭 織皮毘毘 析支 渠搜 西戎即敘」とあるから、「璆」と「惟球」が同一の物体を意味すると解すべきだろう。

『尚書』の「虞書」の「益稷」には「夔曰 戛擊鳴球 搏拊 琴 瑟 以詠」、「祖考 來格 虞賓在位 群后德讓 下管鼗鼓 合止祝敵 笙鏞以間 鳥獸蹌蹌」、「簫韶 九成 鳳皇來儀」、「夔曰 於 予擊石拊石 百獸率舞 庶尹允諧」とある。『漢書』の「禮樂志」の「天地」には「璆磬金鼓」とある。小竹武夫訳『漢書 2 表・志上』（ちくま学芸文庫、1998）374 頁は、その注釈として、「璆以下みな樂器の名。璆は

玉磬」と解している。要するに、長剣の柄のところに佩いたトンボ玉のような石製装飾品のことを指すと思われる。日本の古代遺跡からは、トンボ玉も発掘されている。一般的には、身体に巻き付けて使用する装飾品だと推定されているが、中には佩び玉として用いられたものが含まれているかもしれない。地名の「華陽黒水惟梁州」と「黒水西河惟雍州」の所在地については、現在の中国陝西城固県墨水付近を指すと解されている。ただし、苗族の銀飾のようなものを想定する場合には、「瑠鏘」と「琳琅」は、いずれも「リンリン」または「チリンチリン」となる様子を示す修辭のようなもので、何か特定の種類の鉱物などの物体を指すものではないのだろうと思われる。ここでは修辭という前提で意識を示すことにした。物体としての鉱物(宝玉の類)が鳴る様子を指すと解するときは、「瑠鏘が鳴り、琳琅が鳴る」と訳すべきだろう。なお、『史記』の「夏本紀」の日本語訳としては、前掲『新釈漢文大系 38 史記 一(本紀)』がある。本稿においても参考にした。

¹⁶⁸ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』70 頁は、「瑤」について「美玉。一説に菴(靈草の名)の借り字であるともいうが、この両句はすべて玉をもって美化したものと見る方がよいので、美玉と解する」としている。『荀子』の「賦篇」には「琤 玉 瑤 珠 不知佩也」、「雜布與帛 不知異也」とあるから、元は同じ単なる石材に過ぎないものでも特に美しいものは研磨されて玉器とされ、また、同じ繊維原料からつくられた布でも上等のものは「帛」となり、そうでないものは別の用途に用いられたことを理解することができる。なお、小寺智津子「弥生時代のガラス釧とその副葬」東京大学考古学研究室研究紀要 24 号 45~63 頁が参考になる。

¹⁶⁹ 難解だが、香を焚くことを意味するのではないだろうか。古代の楚の祭礼なので仏教とは無関係という先入観で解釈しているものが圧倒的に多いけれども、道教の祭祀・儀礼でも香を焚くのはごく普通のことなので、そのような状況を示していると解釈する余地はある。そして、その香が天子(帝)のみが用いることのできる特殊なものを示すために、天子のみが保有することを許される赤色の玉(瓊)にたとえたのではないかと想像する。前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』70 頁は、「玉のように美しい香りのよい花を合わせ取り持って献げ」と訳している。

「瓊」の字は、ニニギノミコト(瓊瓊杵尊)の名にも用いられている。前掲『稲作文化にみる中国貴州と日本』121~136 頁は、鉱石としての「瓊」は、朝鮮半島にも日本にも産しない水銀化合物を含む「鶏血石」だとしている。「瓊」を用いた璧は、日本国内では文政元年(1818年)に日向国那珂郡今町(現在の宮崎県日南市)の「王之山」の石棺から中国製の穀文璧が出土し、前田育徳会が収蔵している。この中国製の穀文璧については、李国棟「山形県中川遺跡の石鉞と日向王之山の玉璧」広島大学大学院文学研究科論集 67 巻 111~129 頁が詳しい。李国棟は、ニニギノミコト(瓊瓊杵尊)が中国の戦国時代の越國からの亡命者で、その後、越國は秦に降伏して滅んだとの見解を示している。しかし、日向国那珂郡今町にあったという穀文璧の発掘地の年代が科学的に確定されない限り、何とも言えない。なお、古代の越(後の呉)の地域からの出土物については、蘇州博物館編『蘇州博物館蔵出土文物』(文物出版社、2009)が参考になる。

¹⁷⁰ 一般に肉料理のことを指すと解されている。しかし、現在では中国の子供のおやつになっている粽(ちまき)のようなものを指すのではなかろうか。

¹⁷¹ 「醬」がどのようなものを指すのかについては不明で、植物由来のものか動物蛋白質由来のものかも不明。ダイズを用いた「醬」の歴史については、山本泰・田中秀

夫『改訂第5版 味噌・醤油入門』（日本食糧新聞社、2013）125～129頁が参考になる。なお、この点については、前掲『孔子家語』の蘭でも検討した。

¹⁷² 既に調理済みの料理を御供物として持参して配置するのではなく、祭礼の場所で料理をし、できあがった料理を奉納すると同時に会席者がそれを食したものではないかと想像する。これは、『旧約聖書』の「創世記」にあるカインとアベルの逸話とも通ずることで、古代においては、調理をするための炊事場兼祭壇として石積みをつくり、その石積みを利用して神の前で実際に調理してみせ、できたばかりの料理を神に捧げることが一般的だったのではないかと思う。前掲『中国各民族原始宗教資料集成 布依族卷・侗族卷・仡佬族卷』の冒頭にある写真の中には、粽ではないけれども、祭礼の場で御供物となる料理を炊事している状況を撮影したものがある。

¹⁷³ 「鼓」は太鼓のような打楽器を意味する。「拊」は太鼓を打つことを意味する。ここに示されている「鼓」は「建鼓」と呼ばれるタイプの太鼓かもしれない。建鼓については、前掲『荀子』の蘭(2)脚注49で述べた。銅鼓の可能性は否定されない。なお、銅鼓については、蒋廷瑜『銅鼓史活』（文物出版社、1982）、鈴木正崇・金丸良子『西南中国の少数民族—貴州省苗族民族誌』（古今書院、1985）117～120頁、251～255頁、西村昌也・ファン・ミン・フエン「中部ヴェトナム・ビンディン省出土の銅鼓資料と文化的脈絡についての検討」東アジア文化交渉研究創刊号187～219頁、西村昌也「北部ヴェトナム銅鼓をめぐる民族史的視点からの理解」東アジア研究46巻1号3～32頁、今村啓爾「Heger I 式金銅鼓における2つの系統」東京大学文学部考古学研究室研究紀要11号109～124頁、鈴木正崇「銅鼓の儀礼と世界観についての一考察—中国・広西壮族自治区の褲瑤の事例から—」史学64巻3・4号267～285頁が参考になる。

¹⁷⁴ 想像だが、麻（大麻草）を焚いた煙かもしれない。

¹⁷⁵ 『説文解字』には「榑」の説明として「榑桑 神木 日所出也 从木專聲」とある。なお、『呂氏春秋』の「慎行論・求人」には「堯傳天下於舜 禮之諸侯 妻以二女 臣以十子 身請北面朝之 至卑也」、「伊尹 庖廚之臣也」、「傳說 殷之胥靡也」、「皆上相天子 至賤也」、「禹東至榑木之地 日出 九津 青羌之野 攢樹之所 摺天之山 鳥谷 青丘之鄉 黑齒之國」とある。

¹⁷⁶ 日本の文献の中で最も古いものとしては、一条兼良『日本書紀纂疏』をあげることができる。『日本書紀』の注釈の部分の冒頭に「日本」の字義の解釈が示されており、「太一」と「日」と「木（扶桑）」とを関連付けた解釈が示されている。すなわち「日本吾國之大名 在東海中 近於日出所也 據韻書說分曰 日實也 太陽之精不虧 从圈一象形 [中略] 天二日無 故於文圈一爲日 又本字說文木下曰本 从木一在其下一記其處也 與末同義太陽出於扶桑 則比地自爲日下 故名曰日本 東字从日木義同也 鄭氏曰 木若木也 日所昇降 在上日杲 在中日東 在下日杳（日本は我国の大いなる名称である。東海中にあり、日の出る処である。韻書によれば（説文解字が言うには）、日は実であり、太陽の精は欠けるところがなく、一個の円（圓）をもってその形状とする。[中略] 天に二個の日はない。故に文では円（圓）に一で日とする。また、本の字は（説文解字によれば）木の下を本とするので、木と一に従い、その下に在る一はその処を記すものである。末と意味を同じくする。太陽が扶桑から出るのは、この地が自ら日下とすることになるので、その名を日本という。東の字は日木に従い同じ意味をもつものである。鄭氏が言うには、木は成長する若木であり、日の昇り降りする処であり、日が木の上にあるときは杲、日が木の中にあるとき

は東、日が木の下にあるときは杳となる)」云々とある。このままでは非常に分かりにくいのが、『淮南子』の「天文訓」を読むと理解が容易となる。『淮南子』の「天文訓」には「日出於暘谷 浴于咸池 拂於扶桑 是謂晨明（日は、暘谷から出て、咸池で沐浴し、扶桑にさしかかる。このことを晨明（神明）という）」、「登於扶桑 爰始將行 是謂朏明（扶桑の上に昇り、更に行こうとする。これを朏明という）」とあり、以下、太陽の運行について、太陽の真下にある地域の名前を示しながら、その地域の上にあることを示す時刻を逐次説明している（詳細は省略する。『淮南子』の「天文訓」の日本語訳としては、前掲『新釈漢文大系 54 淮南子 上』があり、本稿でも参考にした。）。そして、『康熙字典』では『淮南子』の「天文訓」にあるものとして「日登於扶桑 是謂朏明 故杲字日在木上（日は扶桑に昇る。これを朏明という。それゆえ、杲の字は、木の上に日がある）」としている。古代日本における国家神道の基本は、このような日（太陽・太一）の運行に関する思索から構成されてきたと推定することができる。日本の神社における御神体である鏡が太陽を意味することについて特に異論はない。この点については、前掲『荀子』の蘭(2)脚注42、前掲「艸—財産権としての植物 (1)」の脚注1で触れた。

¹⁷⁷ 一般名詞としての「東皇」との語は普遍的なものではない。『吳越春秋』の「勾踐陰謀外傳」に「乃行第一術 立東郊以祭陽 名曰東皇公 立西郊以祭陰 名曰西王母」、「祭陵山於會稽 祀水澤於江州」、「事鬼神一年 國不被災」、「越王曰 善哉 大夫之術 願論其餘」とあり、また、『焦氏易林』の「蠱之部」に「旅 南山黃竹 三身六目 出入制命 東皇宣政 主尊君安 鄭國無患」とあるくらいしか見当たらない。

¹⁷⁸ 前掲『余崗楚墓』及び『楚文物圖典』には、発掘品として鏡の支持台が示されている。楚の支持台は、1対の鳥が背中合わせになっている。日本の神鏡の支持台は雲形台と呼ばれ雲の紋様または水流の紋様を伴うが、全体としては水牛の角の形状をしている。古代エジプトのラー神は両腕またはガゼルの角によって支持される。これらは、形状と機能という点では全て基本的に同一のパターンに属するもので、古代における太陽神信仰の共通性を証明するものとして夙に指摘されてきた。鏡という円形の平板を支持するための最適解として必然的に（平行進化的に）そのような形状になるとも考えられるが、鏡が太陽（太一）の象徴であるという共通性は無視できないので、文化的な共通性を考えるのが妥当だと思われる。なお、この関連では、櫻井満『万葉集の民俗学的研究』（おうふう、1995）、有木撰美『大伴家持の認識論的研究—万葉集と「日本神道」—』（株式会社教育出版センター、1985）が参考になる。

¹⁷⁹ 日本国の古代～中世における神道と道教との関係について論じたものとして、下出積興『日本古代の神祇と道教』（吉川弘文館、1972）がある。また、天照大神信仰と密教との関連を論ずるものとして、伊藤聡『中世天照大神信仰の研究』（法蔵館、2011）がある。

¹⁸⁰ 『太一生水』には「大一生水 水反輔大一 是以成天 天反輔大一 是以成地 天地□□□也 是以成神明 神明復□輔也 是以成陰陽 陰陽復相輔也 是以成四時 四時復相輔也 是以成滄熱 滄熱復相輔也 是以成濕燥 濕燥復相輔也 成歲而止」、「故 歲者 濕燥之所生也 濕燥者 滄熱之所生也 滄熱者□□□□□□ 四時者 陰陽之所生□ 陰陽者 神明之所生也 神明者 天地之所生也 天地者 大一之所生也」、「是故 大一藏於水 行於時 周而或□ □□□萬物母 一缺一盈 以己為萬物經」、「此天之所不能殺 地之所不能厘 陰陽之所不能成 君子知此之謂」

とある（反復表現が多いので、欠字部分は容易に推定することができる。）。

¹⁸¹ ここに書かれていることは、日本国の神社・神道における「神明」を理解する上でも重要だと考える。神明とは「神」であり「太一」なのだが、「太一」は「日（太陽）」と同じなので、天照大神を主祭神として祀る神社は神明社となる。最初に道教があって日本の神道が形成されたのか、在来の神道に道教の太一や神明の概念が後から付与されたのかを、歴史学・考古学において確定する方法はない。しかし、今日において神道と道教とは相互に不可分・不離の関係にあり、これを分離して考えることができない。

¹⁸² 馮時『出土古代天文学文献研究（出土思想文物與文献研究叢書2）』（台湾古籍出版公司、2001）19頁は、漢代の石刻文献に「伏羲と女媧が夫婦として交わったとの伝承を記していることを根拠に、「女皇」とは「女媧」を指すとの解釈を提示している。この「女媧」は、首から下が蛇の形をした女性だということになっている。「伏羲」と「女媧」の伝承は、中国の古い文献中にも見られ、例えば、『論衡』の「順鼓」には、「攻社之義 於事不得 雨不霽 祭女媧 於禮何見 伏羲 女媧 俱聖者也 舍伏羲而祭女媧 春秋不言 董仲舒之議 其故何哉（社を攻めるとの解釈は理解できない。雨が晴れないときに女媧を祀るのは禮からするとどのような意味があるのか。伏羲と女媧は共に聖人である。伏羲を無視して女媧だけ祀るとは春秋も言っていない。董仲舒はどのような論拠でそのようなことを議論するのか）」、「俗圖畫女媧之象為婦人之形 又其號曰女 仲舒之意 殆謂女媧古婦人帝王者也 男陽而女陰 陰氣為害 故祭女媧求福祐也（世間の絵画では女媧の姿を描くときは女性の形にしており、その名を女としている。董仲舒の意図は、女媧を古代の女帝だと言おうとするものだ。男は陽で女は陰、陰の気は禍をもたらすので、女媧を祀って福を求めたということなのだろう）」、「傳又言 共工與顓頊爭為天子 不勝 怒而觸不周之山 使天柱折地維絶 女媧消煉五色石以補蒼天 斷鼇之足以立四極（伝承ではまた「共工が天子になろうとして顓頊と争って負けたことに腹をたてて不周之山（扶桑山?）を掴み、天柱を折り、地維を切ってしまった。女媧は五色の岩を精錬して蒼天を修繕し、大亀の脚を切って四方の柱にした」という）」、「仲舒之祭女媧 殆見此傳也（董仲舒が女媧を祀ったのはこの伝承に依るものだ）」、「本有補蒼天立四極之神 天氣不和 陽道不勝 儻女媧以精神助聖王止雨湛乎（あるいは、蒼天を繕い四方の神を立てたけれども天の気が和合せず陽の道が勝たなかったけれども、たまたま女媧の神力が聖王を援けて雨を止ませることができたというようなことなのだろうか）」とある。また、『列子』の「黃帝」には、「庖犧氏 女媧氏 神農氏 夏后氏 蛇身人面 牛首虎鼻 此有非人之狀（庖犧氏、女媧氏、神農氏、夏后氏は、人面で身体は蛇、牛の首で虎の鼻で、まるで人間ではないような姿をしている）」とあり、『山海經』の「大荒西經」には、「有神十人 名曰女媧之腸 化為神 處栗廣之野 橫道而處（十人の神がいる。女媧之腸という名の者は変化して神となり、栗廣之野という処にいて、悪事をなして暮らしている）」とある。「大荒西經」では、これに続けて「有人名曰石夷 來風曰韋 處西北隅以司日月之長短（石夷という名の者がおり、風が吹くことを韋といい、西北隅の処で月日の長短を司っている）」とある。西域のかなり西方のことを記しているはずなのに、これが倭國のことを記したものだと言われてもまるで違和感のない奇妙な文だと言える。しかし、「石夷」とは、サマルカンド人（石人）を指すと解するのが妥当だろう。「石夷」は風水や天文に精通していたことを示すものと思われる。なお、伏羲と女媧については、大野裕司「睡虎地秦簡『日書』における神靈と時の禁

忌」中国出土資料研究 9 卷 42～70 頁、小南一郎「中国西部地域における伏羲・女媧図像（上）」龍谷大學論集 473 号 1～40 頁、同「中国西部地域における伏羲・女媧図像（下）」同誌 474・475 号 395～433 頁が参考になる。）。また、この関連では、大和岩男『鬼と天皇』（白水社、1992）が興味深い考察を提示している。

¹⁸³『淮南子』の「要略」には「原道者 虚牟六合 混沌萬物 象太一之容 測窈冥之深 以翔虚無之軫 托小以苞大 守約以治廣 使人知先後之禍福 動靜之利害」とあるが「混沌」は世界が始まる黎明のこと（混沌為太始）を示すので、「原道なるものは、六合を統合するものであり、萬物の始まりであり、その形を太一に象るものであり、闇の深さを知るものである」との意味だと理解することができる。

¹⁸⁴「代赭石」について、王敏・邵暉・呉文青・張端賢主編『礦産本草』（中国医薬科技出版社、2003）135 頁は、「赤鉄礦」を指すとし、その別名として、「須丸」、「赤土」、「土朱」、「鉄朱」等を列挙している。赤鉄鉱（赤鉄礦）とは、酸化鉄（Fe₂O₃）のことを指す。なお、この関連では、児玉大成「亀ヶ岡文化を中心としたベンガラ生産の復元」日本考古学 12 卷 20 号 25～45 頁、益富壽之助・山崎一雄「爐甘石について－漢方石薬の研究Ⅱ」生薬学雑誌 6 卷 1 号 23～34 頁が参考になる。

¹⁸⁵ 木村陽二郎編『白井光太郎著作集第 I 卷 本草学・本草学史研究』（科学書院、1985）196 頁

¹⁸⁶ 「糧」の音は、「鑪」の音と類似している。

¹⁸⁷ 『名醫別録』にあるとおり、「太一余糧」には赤色のものだけではなく黄色や青色のものもあるとされている。これは、銅、青銅、錫などの鉄以外の鉱物の精錬と鑄造の際にできる残滓が硫黄化合物などである場合に、酸化鉄の赤色とは別の色彩をもつことに起因しているのではなかろうか。すると、そもそも青銅器などの金属器を鑄造する技術が開発されたときに「太一」の原型が形成され、後に鉄器製造技術が開発されるようになってから、精錬した鉄の残滓が赤い酸化鉄であることに着目して「太一余糧」という概念が確立したとも考えられる。

¹⁸⁸ 古代の中国における製鉄業に関しては、徐光輝「中国古代の鉄製道具について－漢代の考古資料を中心に－」国際社会文化研究所紀要 12 号 91～106 頁が参考になる。

¹⁸⁹ 参考となる文献として、長谷川熊彦・芹沢正雄・天田誠一「自然通風炉による古代製鉄法復元実験について」鐵と鋼（日本鐵鋼協會々誌）64 卷 3 号 133～141 頁、新井宏「日本の古代鉄価とその国際比較」鐵と鋼（日本鐵鋼協會々誌）91 卷 1 号 116～121 頁、山本博『古代の製鉄』（学生社、1975）、大和岩男『続秦氏の研究－日本の産業と信仰に深く関与した渡来集団の研究』（大和書房、2013）がある。

¹⁹⁰ 関連するものとして、井上孝夫「房総地域の製鉄文化に関する基礎的研究」千葉大学教育学部研究紀要Ⅱ人文・社会科学 42 卷 1～12 頁、井上孝夫「房総・弘文天皇伝説の研究」千葉大学教育学部研究紀要Ⅱ人文・社会科学 52 卷 171～178 頁がある。製鉄の際に用いる石灰については、夏井高人「播磨風土記にみえる石灰の解釈」らん・ゆり 433 号 9～16 頁で述べた。

¹⁹¹ 襄陽市文物考古研究所編著・王志剛主編『余崗楚墓（上下冊）』（科学出版社、2011）には、中国湖北省襄陽市近郊で発掘された楚の時代の墳墓の出土品が示されている。その中には、透明な水晶製の玉（数珠状）、佩、玉坏（玉鐲）が含まれている。「瑤」は、鉱物だとすれば、この水晶が該当するのではないかと思われる。

¹⁹² 呂大吉・何耀華総主編『中国各民族原始宗教資料集成 布依族卷・侗族卷・仡佬族卷』（中国社会科学出版社、2012）の口絵写真の中にそのようなものがある。

193 前掲『中国各民族原始宗教資料集成 布依族卷・侗族卷・仡佬族卷』342～359 頁

194 この関連では、西幹夫・黒川美富子『中国貴州省少数民族の暮らしと祭り—苗族・トン族・プイ族・老漢族の村々を行く』（文理閣、2008）、萩原秀三郎『図説日本人の原郷—揚子江流域の少数民族文化を訪ねて』（小学館、1990）、前掲『西南中国の少数民族—貴州省苗族民族誌』が参考になる。

195 前掲『余崗楚墓』に示されている出土品の中には、鮮血色の瑪瑙製の玉环（玉鐲）、玉管、赤褐色の玉璧が含まれている。「瑱」が鉞物だとすれば、この赤褐色の玉璧が該当するのではないかと思われる。なお、高至喜主編『楚文物圖典』（湖北教育出版社、2000）にも同様の玉璧等の写真が収録されている。

196 日本における祭祀等に関しては、岩井宏實・日和祐樹『神饌—神と人との饗宴』（法政大学出版局、2007）、中島誠一・宇野日出生『神々の酒肴 湖国の神饌』（思文閣出版、1999）、萩原秀三郎『目でみる民俗神 第2巻 豊穰の神と家の神』（東京美術、1988）が参考になる。

197 石蒸し料理に関しては、ラファエル・スタインバーグ『太平洋/東南アジア料理』（タイムライフブックス、1974）、遠城道雄「鹿児島から南西諸島におけるヤムイモ栽培」奄美ニューズレター11号1～7頁、野嶋洋子「石蒸し焼き料理法の諸相 :オセアニアにおける調理の民族考古学的研究にむけて」民族學研究 59巻2号 146～160頁、鈴木忠司「石蒸し調理実験の成果と岩宿時代の植物食」月刊考古学ジャーナル 531号5～8頁が参考になる。

198 日本で粽をつくる際に笹の葉が用いられるのは、保存食としての殺菌効果を有することが経験的に知られているというだけでなく、蒸した際に葉から出る汁の香りが料理の中身である穀類や魚貝類等の風味を損なわず、ほのかに良い香りをつけるものだからではないかと想像される。

199 「蘭」と名のつく植物で大きな葉をもつものとしては、クサスギカズラ科ハラン属の植物がある。ハラン (*Aspidistra elatior* Blume) は「葉蘭」と書く。迫静男・丸野勝敏・永徳亨・西井田光広「宇治群島の植物相」鹿児島大学農学部演習林報告 16巻 83～108 頁によれば、日本国内では鹿児島県南部の宇治群島等が自生地と推定され、中国大陸原産の植物種ではないとのことだ。中国大陸には、かなり多くの種類のハラン属植物があり、その中には、葉を石蒸し料理に用いることのできる程度の大きささと強度を有するものがある。ハラン属の植物の中国名は「蜘蛛抱蛋」となっている。現代の日本では、調理用ではなく、緑化や観賞用に植栽されることが多い。

200 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』72 頁は、「芳」を「芷（よろいぐさ）の湯」と解し、「沐」を「髪を洗う」と解している。『孔子家語』、『荀子』等にある古典的な訓詁学に従い、「蘭芷」の解釈を踏まえたものと思われる。

201 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』72 頁は、「色彩麗しい衣」と訳している。しかしながら、「華」はまさに「花」を指し、「采」は「彩」ではなく「刺繍する」を意味すると解する。現在の中国広西チワン族自治区や貴州省等に居住する苗族等の少数民族は、布にとっても美しい花柄の刺繍をする文化や花を図案化したロウケツ染めをする文化をもっている。図案化される植物の花は、牡丹の花など様々なものが用いられるらしい。少数民族の刺繍については、中国人民美術出版社+美乃美遍『貴州蠟染（中国少数民族染織刺繍編 2）』（美乃美、1981）、中国人民美術出版社+美乃美遍『貴州苗族桃花（中国少数民族染織刺繍編 3）』（美乃美、1981）が参考になる。

202 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』72 頁は、「英」の意義について、朱熹の『楚辞集註』

を引用して、「草木の英（はな）の如し」と解釈している。「華采」について花柄の刺繍をほどこした衣類と解すると「まさに生きた花の如し」と理解することができる。この解釈のほうが適切だと思う。

²⁰³ 現代の中国では主として女性の衣服を装飾するためにこのような花柄（華柄）の刺繍等が用いられているけれども、古代においては男性の貴人のためにも刺繍や染めを施したものかもしれない。『楚辞』の「雲中君」では、女性の巫のまとう美しい衣のことを指しているものと解する。

²⁰⁴ 「雲中君」のここまでの部分は、日本の謡曲「鶴亀」にある「月宮殿の白衣の袂 月宮殿の白衣の袂の色々妙なる花の袖 秋ハ時雨の紅葉の葉袖 冬ハ冴えゆく雪の袂を ひるがへす衣も薄紫の 雲の上人の舞楽の声々に霓裳羽衣乃曲をなせば」という部分との類似点が多いように思われる。

²⁰⁵ 現在の中国の河北省衡水市冀州鎮付近を指すと思われる。古代の楚の地（現在の湖北省・湖南省を中心とする地域）からすると、北方に位置する。屈原の隠された真意としては、楚の君主が遠くのことばかり考えていて、内政をきちんとしていないことを嘆く趣旨かもしれない。

²⁰⁶ 別の解釈もあり得る。例えば、大麻草（*Cannabis sativa* L.）の煙によってトランス状態から正気に戻った巫が朦朧としてふらふらになっている状況を示していると解すべき余地がないわけではない。

²⁰⁷ 通説においては、フジバカマ属植物（*Eupatorium*）の類の乾燥した葉を匂袋に入れ、芳香剤として用いたと解している。決して湯に溶いて用いるというものとは解されていない。

²⁰⁸ 青木正児『東洋文庫 479 中華名物考』（平凡社、1988）264～265 頁

²⁰⁹ 米のとぎ汁を用いたことについては、前掲『『荀子』の蘭』の中で述べた。

²¹⁰ 例えば、東京・浅草の浅草寺本堂前の様子などを思い出してみると良い。

²¹¹ 例えば、東南アジア諸国の道教寺院では、香の煙が流れている。

²¹² 大麻草と人間との関係については、Mitchell Earleywine, *Understanding Marijuana - A New Look At The Scientific Evidence*, Oxford University Press, 2005、ジャック・ヘラー（エリック・イングリグ訳）『大麻草と文明』（築地書館、2014）、山口博『大麻と古代日本の神々』（宝島社新書、2014）が参考になる。なお、大麻草に関しては、夏井高人「植物分類体系の変化が法制度に与える影響—大麻規制法令を中心とする考察—」法律論叢 84 巻 4・5 号 91～112 頁で検討結果を示した。

²¹³ ショウブ（*Acorus calamus* L.）は、ユーラシア大陸と北米に広く分布しており、その分布の範囲が極めて広範囲にわたっている。中国内にも広く分布し、古来、薬草として用いられてきた。日本においても、菖蒲の葉を風呂に入れて入浴剤とする。

²¹⁴ 灸に用いることのできる植物なので、ヨモギすなわち五月艾（*Artemisia indica* Willdenow）の可能性が高い。日本国の植物分類では、日本産のヨモギは中国産の五月艾の変種という扱いになっているが、同一種の範囲内にあり、品種程度の相違しかないものと思われる。

²¹⁵ 宗代の呂原明が編纂した『歳時記雑記』にも「蘭湯 五月五日蓄蘭爲沐浴」とある。

²¹⁶ 中国少数民族における茅の輪の伝承に関しては、前掲『図説日本人の原郷—揚子江流域の少数民族文化を訪ねて』89～96 頁が参考になる。

²¹⁷ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』（明治書院、1970）78 頁によれば、『楚辞』の「九

歌」にある「湘君」と「湘夫人」とは対になった詩で、「湘君」では湘夫人が夫である湘君神を思慕する気持ちが謡われ、「湘夫人」では湘君神が妻である湘夫人を愛でる気持ちが謡われているのだという。しかし、別の見解もある。これらの点については、白倉直樹「Herbs and Love Songs—九歌・九章・離騷各篇の性格について—」立命館文學 619 号 313～327 号、石川三佐男『楚辞』9 歌の湘君篇と湘夫人篇の主題について」集刊東洋學 75 号 1～22 頁、安藤信広『九歌』ノート(一) —屈原以前の<楚辞>についての覚え書き」日本文學誌要 30 号 62～72 頁、蔡翊鑫「從<九歌>中的神觀看楚民的宗教文化」成大宗教與文化學報第 13 期 59～72 頁が参考になる。

²¹⁸ 「君」とは男神である湘君のことを指すと解されている。前掲石川三佐男『楚辞新研究』では、「湘君」と「湘夫人」とが長沙馬王堆第一號漢墓出土彩繪帛畫に描かれた左右一對の龍神と同様に対になっているものとの理解を基礎にして、全体として楚の時代における信仰を反映するものだと解釈論が提示されている。この解釈では、湘君と湘夫人は人間ではなく龍神ということになる。『楚辞』の「湘君」と「湘夫人」は、現在でも苗族等の間で行われている龍頭船競争(ドラゴンボート・レース)の際に歌われた素朴な歌謡のようなものがあって、それを基礎とし、これに芸術的な修辭を積み重ねて成立したものではないかとも考えられるのだが、このように考える場合でも、苗族等の龍頭船それ自体を龍神にみたてることが可能だ。日本ではペーロン(白龍・長崎)あるいはハーリーブニ(肥竜船・沖繩)とも呼ばれる龍頭船競争(ドラゴンボート・レース)は、中国南部やその文化的影響を受けた地域では広く行われているもので、古い歴史をもつものと考えられる。この点については、前掲『図説日本人の原郷—揚子江流域の少数民族文化を訪ねて』121～168 頁が非常に参考になる。

²¹⁹ 「桂舟」の「桂」は、修辭の一種だと考えるので、「よき舟」くらいの意味ではないかと思う。つまり、「桂」は、特定の植物種(用材)を指すわけではないと解する。なお、植物の名として解釈する場合、各種用材として使用されるカツラ科カツラ属の落葉高木カツラ(*Cercidiphyllum japonicum* Siebold & Zuccarini)は、中国では「連香樹」と呼ばれている。カツラは、日本にも分布するが、現在の中国では、安徽省、甘肅省、貴州省、湖南省、湖北省、浙江省、江西省、陝西省、山西省、四川省、雲南省に分布している。中国で「桂樹」と呼ばれているものは、クスノキ科ニッケイ属の常緑高木ニッケイ(*Cinnamomum cassia* (L.) D. Don)のことを指す。ニッケイ(肉桂)は、香辛料・シナモンの原料となる樹木で、その樹皮を乾燥したものが生薬(中薬)の「桂皮」として用いられる。肉桂は、東南アジア原産の植物といわれる。現在の中国では、福建省、広東省、広西チワン族自治区、貴州省、海南省、台湾に分布する。肉桂は、香料の一種として用いられ、用材とはならない。

²²⁰ 沅江と湘水は、いずれも河川の名前で、洞庭湖に流れ込んだ後、更に揚子江へと流れ下る。古代においては現在よりも水位が高く、それゆえにその川幅が現在よりもずっと広がった可能性がある。なお、楚の時代、洞庭湖周辺には大小の河川や湿地が広がっていたと想像され、交通手段としては主として舟に頼るしかなかったと考えられるから、人々が出逢うための手段も舟で、出逢う場所は水上だったと解するのが合理的だと思われる。

²²¹ 湘君神は、水の神なので、その靈力により、湘君神のいるところでは水面に波風が立たない。

²²² 「簫」に関しては「東皇太一」との関連でも述べた。

223 通説の理解では、「湘君夫人が湘君神のことばかり思っている」ということを示す反語表現。

224 舟には大きな帆があり、風の力によって北上して洞庭湖の支流を遡るといふ趣旨ではないかと思う。

225 柏・綢・橈・旌は、全て舟に装備された備品・装置等の器物の名を示すものだと思われる。いずれも豪華な装飾のある器物と推定され、比較的大型の船を想定することができる。つまり、小さな舟に乗船して孤独を味わい、ひとり笛を吹いて風流を味わうといったような静かな情景ではないと考えるほうが妥当だと思われる。

226 この部分は、この詩の真意をどう解釈するかによって大きく異なる可能性がある。なお、前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』74 頁は、「大川に充ち満ちて盛んにわが神霊の気を揚げる。霊気を揚げてまだ終わらぬのに」と訳している。

227 「女」については、湘君夫人の姉妹である神を指すと解する説と船に同乗している侍女と解する説とがある。前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』76 頁は、後者の説を採用している。どちらも判別し難いが、仮に侍女だとした場合、詩にある舟が相当大きなものだったと推定することが可能となる。小舟に婦人とその侍女だけが乗船し、湖面を静かに流れるといったような図ではない。

228 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』77 頁によれば、櫂（かい）は長い棹を指し、楫（かじ）は短い棹を指すとされている。

229 龍頭船を飾る布の帆のようなものがはためく様子を示すものかもしれない。

230 既述の仮説とは全く別に、楚と齊（田齊）とを連合させて秦に対抗しようとする屈原の思惑がなかなか成就しないことを怨む政治的な意味合の強い詩だと解釈も成立可能ではないかと思われる。そのように解釈する場合、「心不同兮媒勞 恩不甚兮輕絕 石瀨兮淺淺 飛龍兮翩翩 交不忠兮怨長 期不信兮告余以不聞」との句の重要性を認識することができ、また、詩全体の趣旨を合理的に理解することができる。このような仮説を前提とした場合、この詩は、神話上の湘君神と湘夫人をひきあいに出して隠れた政治的意図を巧妙に隠蔽しつつ練り上げられた非常に興味深い詩だと評することもできる。この点について、前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』68～69 頁にある「解題」に示されている見解は反対で、政治的な意図を含まないと解している。そして、同書 74～75 頁は、この部分を「私はかの君の来ないのを悲しんで、せきあえぬ涙がはらはらと流れ、君を思い痛んで、胸はもだえるのである」と訳しているけれども、センチメンタルに過ぎるように思う。

231 古代の中国における「鳥」については、中國古代史研究會編『中國古代史研究 第七』(研文出版、1997) 123～141 頁[高浜侑子]、萩原秀三郎『稲と鳥と太陽の道—日本文化の原点を追う』(大修館書店、1996) 7～118 頁、鈴木舞「殷墟遺跡出土の鳥形骨筭に関する小考察」東京大学考古学研究室研究紀要 25 号 33～64 頁、石川岳彦「戦国期における燕の墓葬について」東京大学考古学研究室研究紀要 16 号 1～58 頁(特に 39～43 頁)、坂田光「春秋戦国時代の南方諸国における神話・信仰と鳥書について」日本デザイン学会研究発表大会概要集 58 回 93 頁、吉成直樹「鳥霊信仰の地域的展開と幼児葬法」高知大学学術研究報告・人文科学編 44 卷 111～120 頁、萩原秀三郎「対馬の鳥霊信仰」比較民俗研究 6 号 189～190 頁が参考になる。なお、『金樓子』の「興王」には「少昊帝金天氏 一號窮桑 二曰白帝朱宣帝 黄帝之子 姬姓 母曰女節 黄帝時有大星如虹 下流華渚意感 生少昊於窮桑 是為元囂 姓姬氏 或云己氏 降居江水 以登帝位 以金承土 都曲阜(少昊帝は金天氏で、窮桑ともいい、

また白帝朱宣帝ともいう。黄帝の子で姫姓。母の名を女節という。黄帝の治世に虹のように輝く大きな星が出で華渚(子宮)に入る夢を見て、窮桑の生えている處で少昊を産んだ。少昊を元囂とする。姓は姫氏だが、己氏ともされる。若い時は江水のあたりに住んでいたが、帝位につき、金で土を承け、都を曲阜とした)、「有鳳鳥之瑞 以鳥紀官 鳳鳥氏為司歷正 元鳥氏為司分伯 趙氏為司至 青鳥氏為司開 丹鳥氏為司閉 祝鳩氏為司徒 睢鳩氏為司空 爽鳩氏為司寇 鶡鳩氏為司事 五雉為五工正 九扈為九農正 天下大治焉(鳳鳥が現れる瑞祥があったので、鳥の名で官職を設けた。鳳鳥氏を司歷正とし、元鳥氏を司分伯とし、趙氏を司至とし、青鳥氏を司開とし、丹鳥氏を司閉とし、祝鳩氏を司徒とし、睢鳩氏を司空とし、爽鳩氏を司寇とし、鶡鳩氏を司事とした。また、五雉を五工正とし、九扈を九農正とした。天下が大いに治まった)」とある。

²³² 「余」について、これまでの注釈書等では論理的整合性を完全に維持できるような納得のいく解釈が見当たらない。「湘君」と「湘夫人」は最初から2個の詩(賦)として存在していたのではなく、どちらか一方だけが存在しており、他方は後代の偽作という推理も成立しそうだ。

²³³ 「玦」は、環状の玉の一部を欠いて馬蹄形に似たような形になっている玉を意味する。「湘夫人」では「袂」となっている。

²³⁴ 「佩」は、玉や金銀でつくられた様々な装飾品を意味する。男性用の装飾品としては、特に刀剣につける装飾品を意味する。「湘君」の「余」をどのように解するかによって決定的に異なる解釈論的結果となる。なお、古代の中国における「佩」がどのようなものだったのかについては、威琳琳編『古代佩飾』(全国百佳図書出版、2012)が参考になる。現代の苗族の銀飾については、貴州省文化庁・貴州省博物館編『苗族銀飾』(文物出版社、2000)が参考になる。

²³⁵ 洞庭湖に注ぐ湖南省の四大河川(湘江、沅江、資江、澧水)の1つで、澧水を意味する。

²³⁶ 「湘君」では「芳洲」となっているところが「湘夫人」では「汀洲」となっている。

²³⁷ 「杜若」は、一般には、ヤブミョウガ(*Polliajaponica*)を意味する。ただし、後述のとおり、大麻草(*Cannabis sativa*)と解する余地がある。

²³⁸ 「湘君」では「下女」となっているところが「湘夫人」では「遠者」となっている。「遠者」が「湘夫人」を意味するものだとすれば、「下女」は、意味的には対応していない。ここでも「余」をどのように解するかによって解釈が大きく異なることになる。

²³⁹ 「湘君」では「將以遺兮下女」となっているところが「湘夫人」では「將呂遺兮遠者」となっている。

²⁴⁰ 「湘君」では「再得」となっているところが「湘夫人」では「驟得」となっている。

²⁴¹ 「湘君」では「再得」が「湘夫人」では「驟得」となっているが、意味的には全く同じと考えることができる。「湘君」の最後の部分と「湘夫人」の最後の部分はほとんど同じになっている。

²⁴² 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』75頁

²⁴³ 古代においては、オオイタビ(*Ficus pumila* L.)から繊維を採取して利用したのかもしれない。しかし、文献資料が乏しく、推測の域を出ない。なお、オオイタビは、

現代の中国では、福建省、広東省、広西チワン族自治区、貴州省、湖北省、湖南省、河南省、江蘇省、江西省、陝西省、四川省、雲南省、チベット自治区、台湾に分布する。

²⁴⁴ ヒメコウゾ (*Broussonetia papyrifera* (L.) L'Héritier ex Ventenat) は、現代の中国では、福建省、広東省、甘肅省、貴州省、河南省、湖北省、湖南省、山西省、江西省、陝西省、山東省、浙江省、広西チワン族自治区、四川省、雲南省、チベット自治区、台湾に分布する。

²⁴⁵ カジノキ (*Broussonetia kazinoki* Siebold) は、現代の中国では、安徽省、福建省、広東省、広西チワン族自治区、貴州省、海南省、河南省、湖南省、湖北省、江蘇省、江西省、四川省、雲南省、チベット自治区、台湾に分布する。

²⁴⁶ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』75 頁

²⁴⁷ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』75 頁

²⁴⁸ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』75 頁

²⁴⁹ 「蘭の花の図案」としては、ラン科植物 (*Orchidaceae*) の花はあまり適切ではないように思う。古代中国の貴人の豪華な船を装飾するのであれば、牡丹が相応しいかもしれない。なお、現在の苗族等の少数民族の龍頭船や民族衣装等でもラン科植物の図案は用いられていない。

²⁵⁰ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』77 頁

²⁵¹ 前掲『随筆植物一日一題』269 頁は、「辛夷は支那特産植物専用の支那名即ち漢名であって、一に木筆とも称せられる」とした上で、「コブシ (*Magnolia kobus* DC.) は日本の特産で全然支那にはない。支那にはない植物に支那名のあらうはずがない」と述べている。そして、同書 270 頁は、「モクレン」について「支那の本当の木蓮そのものは決してこんな落葉灌木ではなく、落葉灌木のモクレンこれこそが真の辛夷である。故にモクレンの漢名は辛夷と書くべきであって、断じて木蓮と書くべきではないのである」としている。そして、更に、「従来日本の諸学者が辛夷をモクレンだと気づかなかつた迂闊さには実に驚くの外はない。例えば『秘伝花鏡』や『八種画譜』の図を見ただけでもそれが直ぐに判かるのではないかと厳しく批判しているまことにそのとおりだと思う。ただ、牧野富太郎が生きていた時代には、過去の図版や絵画等が秘蔵・死蔵され、古書として流通する版本等は極めて高価なものだったため、普通の国民の目に触れることは滅多になかった。しかし、現在では、そうした図版等がデジタル記録として東京国立博物館、国立国会図書館その他の公的機関のサイト上において無料で提供されている。重要な情報財の一種だと考える。なお、前掲『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』464 は、「辛夷はシモクレンである」としている。前掲『原色和漢薬図鑑 (下)』127 頁は、「明代以降になると紫花の辛味のない木筆を辛夷としており、これはモクレン *M. liliflora* Desr. であり、知ら花の辛味のある玉蘭は、ハクモクレン *M. denudata* Desr. で、その辛味の点から後者を辛夷とする方が適当と思われる。一方日本では『大和本草』以来、辛夷をコブシ *M. kobus* DC. に充て、この誤解がそのままその後の本草家に踏襲されてきたが、当然これは中国本草の辛夷ではない」としている。

²⁵² 夏井高人「美々之多礼也味 (耳の垂れ病) の薬方 (上)」らん・ゆり 446 号 17~32 頁。なお、オガタマノキ (*Michelia compressa*) の巨木で有名な神社として、多賀神社 (福岡県直方市大字直方) と日吉神社 (福岡県筑紫郡那珂川町大字市ノ瀬) がある。オガタマノキは、「黄玉樹」と書かれることが多いけれども、本来は「招魂木」

と書くものらしい。

²⁵³ まだ決定的と言える文献はないように思うが、さしあたり Flora of China の「Magnoliaceae」の解説が参考になる。

http://www.efloras.org/florataxon.aspx?flora_id=2&taxon_id=10530

²⁵⁴ 現代語訳として、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編『豊後国風土記 肥前国風土記』（山川出版社、2008）がある。

²⁵⁵ 前掲『中国貴州省少数民族の暮らしと祭り－苗族・トン族・パイ族・老漢族の村々を行く』には、苗族等における楽器演奏や舞踏の様子を撮影した詳細な写真が多数収録されており、参考になる。

²⁵⁶ ここにある太鼓の音に合わせて管楽器を吹奏することは、トルコの軍楽メフテルでも同じなので、非常に興味深い。日本国に古代に渡来し現在まで宮中に伝承されている雅楽でも基本的には同じような演奏方法が採られており、太鼓の音が全体を統率する役割を果たしている。

²⁵⁷ 中国の古楽については、前掲『上代支那正楽考－孔子の音楽論』41～139 頁が参考になる。

²⁵⁸ 発掘された文物の写真は、西安市文物保護考古研究院編著・楊軍凱著『北周史君墓』（文物出版社、2014）で公開されている。

²⁵⁹ 「尉各伽 (Wirkak)」は「狼」を意味する。古印欧語の「w₁k^wos」、サンスクリット語の「वृक (vr̥ka)」、アヴェスタの「vōhrka」、古アラビア語の「ulk」、古ゲルマン語の「wulfaz」、古英語の「wulf」と同じ。現代英語の「wolf」の語源。日本語の「大神」の訓である「おほ (かみ)」も同根かもしれない。古代の日本において「大」が「王」と同じ発音だったと仮定した場合、中国語の発音では「wang shen」またはこれに類似する発音になったと推定されるが、この発音は、より「vōhrka」に類似しているように思う。

²⁶⁰ 漢文の墓誌には「康氏」とあるのみだが、墓誌の解説により、康氏の本名は「維優斯 (Wiyusī)」だったということが判明している。この維優斯 (Wiyusī) との名は、ソグド語で「黎明」を意味している。康氏は康國の出身と推定される。康國とは、サマルカンド (Samarkand) を意味する。康國は、月氏の子孫とされる。私見では、月氏と釈迦族 (サハ族) とは同族で、「鮮卑」は「サハ」の音の漢文表記に過ぎないのではないかと考える。仏教との関連で、「毘盧遮那仏」は、梵語の「वैरोचन Mahāvairocana」を漢訳したものとされている。これは、「大日如来」と同義なのだが、漢語では「神明」または「光明」と訳することもある。そのことから、ゾロアスター教の光明神アフラマズダと同視する見解もある。長い歴史の中で、拝火教と仏教 (ヒンズー教・バラモン教) とが共存または融合する地域・場所があったと推測される。また、とりわけ広域に通商・公益を行っていたソグド人にとっては、どの宗教が優勢な地域に立ち寄りときでも困らないように習合させた神が必要だったのではないかと想像される。ちなみに、ゾロアスター教の最高神であるアフラ・マズダ (Ahura Mazdā) は「智慧の神」という意味を有し、意味的には「大日如来」と共通している。また、その音は、「蝦夷、蛭子、夷 (えみし、えびす)」と類似しているように思われる。「蝦」は「胡」と同義かもしれない。大日如来は、天照大神と同一視されることがある。

²⁶¹ 「史國」は、現在の中央アジアのウズベキスタン・カシュカダリヤ州にあるシャフリサブス (Shahrisabz) にあったキシユ (Kesh) を指す。キシユは、ソグド語で「平安」を意味する。漢字では、史國のほか、竭石國、渴石國、可石國、乞史國、羯霜那

等とも書かれた。大乘の毘盧遮那仏は、遮那仏とも呼ばれる。漢字それ自体を読んだ場合のソグド語の音としては、キシユ(Kesh)とほぼ同音または類似音となる。アレクサンドロス大王は、その東征の途上、紀元前 328 年～327 年頃にシャフリサブス(史國)に駐屯・滞在し、その地で妻ロザンナを娶ったとされている。なお、アレクサンドロスについては、前掲『荀子』の蘭(2)の脚注 46、前掲「美々之多礼也味(耳の垂れ病)の薬方(上)」の脚注 32 でも触れた。

²⁶² 北周の「大象元年」は西暦 579 年にあたる。

²⁶³ 「薩保(薩寶、薩甫)²⁶³」は、本来はソグド語で、ソグド人のキャラバン隊の隊長のことを意味する。薩保(薩寶、薩甫)は「薩摩」に通ずる。

²⁶⁴ 中国甘肅省の北西にある肅北蒙古族自治県の天水市北東にある馬家塬戦国墓地からは、2006 年、長い角をもつ山羊や虎をかたどった金製品など実に見事な副葬品が多数発掘されている。それらの風葬品の多くは、遠く西方の騎馬民族的な文化を伝えるものだと推定することができる。俑の姿は明らかに胡人の特徴を示している。その発掘品の写真は、甘肅省文物考古研究所『西戎遺珍—馬家塬戦国墓地出土文物』(文物出版社、2014)で公開されている。同書によれば、この遺跡は紀元前 350 年前後のもので、ロシア・アルタイ共和国にあるパジリク(Pazyryk)遺跡(前 300 年頃～前 200 年頃)出土の発掘品との関連性を強く疑わせるものだという(ロシアにおける通説では、パジリク遺跡の主はサカ族(サハ族)で、スキタイとの関連が深いとされている。広範囲な交易または侵略がなされていたと推定され、エジプトや中国の文物も発掘されている。)。この時代は、古代中国の戦国時代に該当し、秦または月氏の支配領域に属していたと推定される。なお、秦の始皇帝陵からは、見事な青銅製馬車が出土している。この青銅製馬車については、秦始皇帝陵博物院編『秦始皇帝陵出土一號青銅馬車』(文物出版社、2012)が詳しい。

²⁶⁵ 前掲『北周史君墓』293～310 頁

²⁶⁶ 墓室の基本プランには、古代エジプトの王墓との類似性が認められるように思われる。

²⁶⁷ ソグド人と仏教との関係については、新川登亀男編『仏教文明の転回と表現』(勉誠出版、2015)、吉田豊「トルファン学研究所所蔵のソグド語仏典と『菩薩』を意味するソグド語語彙の形式の来源について—百済康義先生のソグド語仏典研究を偲んで」佛教学研究 62・63 号 46～87 頁が非常に参考になる。この「トルファン学研究所所蔵のソグド語仏典と『菩薩』を意味するソグド語語彙の形式の来源について—百済康義先生のソグド語仏典研究を偲んで」という論文では、トカラ人僧侶が「羅」姓を名乗っているとの指摘がある。トカラは、「吐火羅」と書くが、バクトリアにあった「大夏國」の後裔と推定される。魏収(塚本善隆訳注・笠沙雅章解説)『東洋文庫 515 魏書釈老志』(平凡社、1990)には、北魏における仏教の興隆と墮落について詳細な記述がある。

²⁶⁸ 飛天・天人・天女については、吉村怜『天人誕生図の研究—東アジア仏教美術史論集』(東方書店、1999)が参考になる。

²⁶⁹ 日本にある古代の琴については、前掲『荀子』の蘭(2)脚注 32 でも述べた。

²⁷⁰ 古い時代の楽器に関しては、柘植元一監修・古代オリエント博物館編『シルクロードの響き—ペルシア・敦煌・正倉院』(山川出版社、2002)、アンソニー・ペインズ(奥田恵二訳)『木管楽器とその歴史』(音楽之友社、1965)、デイビット・マンロウ(柿木吾郎訳)『中世・ルネサンスの楽器』が参考になる。

271 副葬品の中には、東ローマ帝国・テオドシウス 1 世金貨と東ローマ帝国・レオ 1 世金貨が含まれている。『莊子』にあるように、葬儀に際して錢を副葬する習慣があったのではないかと思われる。前掲『荀子』の蘭(1)脚注 3 では、『莊子』の「雜篇・外物」にある「口中有珠」について触れた。なお、「北周史君墓」の彫刻の中には、植物の彫刻としては、葡萄、蓮花、柘榴、七葉樹が描かれている。動物の彫刻としては、馬、犬、駱駝、驢馬、牛、羊、山羊、鹿、象、兔、獅子、猪、虎、鳳凰、鷹、各種水禽が描かれている。神獣としては、ペルシア風の龍、翼のある馬（天馬）、グリフォン（griffon）、海獣の類がある。

272 林謙三『正倉院楽器の研究』（風間書房、1964）、正倉院事務所『正倉院の楽器』（日本経済新聞社、1967）が参考になる。

273 「昭武」は「神武」や「聖武」に通ずる。なお、張福有『集安麻綫高句麗碑』（文物出版社、2013）によれば、2012 年 7 月 29 日に中国吉林省集安市麻綫村付近の河床で発見された平板状の碑文について、他の碑文断片等との比較検討の結果、「唯國置上太王 號平安 太王神武」との記載があると判読可能になったとされている。

274 タシュケントは、「石の町」を意味するとのことで、古代の石國の出身者は、姓を「石」としたらしい。宮城県石巻市をはじめ、日本国内には「石」と名のつく地名が多数ある。

275 「尉各伽（Wirka）」は、「いるか」と発音でき、「入鹿（いるか）」や「斑鳩（いかるが）」とも類似している。今後、『古事記』や『日本書紀』について、ソグド語による解析が待たれる。安祿山は、康国系のソグド人で、その名の「祿山」はソグド語では「光明」を意味する。安祿山は、反乱を起こして燕國を建国し、洛陽を首都とし、元号を「聖武」とし、雄武皇帝として即位した（756 年）。この年は、聖武天皇の没年にあたる。いわゆる「安史の乱」の後、唐の勢力圏内に居住していたソグド人は概ね肅清され、衰退した。ちなみに、古代の中国には「燕」との名の國が幾つかあるが、ソグド語や古代ペルシア語による解析により新たな知見が得られるのではなかろうか。

276 比較的最近の研究結果を示すものとしては、宮本一夫『中国古代北疆史の考古学的研究』（中国書店、2000）、呂学明『中国北方地区出土の先秦時期銅刀研究』（科学出版社、2010）がある。

漢代の発掘品は多数あるが、1994～1995 年の発掘により、中国江蘇省の徐州市近郊にある前漢代の獅子山楚王陵から大量の副葬品が発掘された。その中には龍の姿をあしらった金製品なども発掘されているが、金銀ではない青銅器や石製の玉器が大部分を占めている。俑の姿は明らかに漢人の特徴を示している。その発掘品の写真は、徐州漢文化風景園林管理處・徐州楚王陵漢兵馬俑博物館編『獅子山楚王陵』（南京出版社、2011）で公開されている。この獅子山西漢楚王陵の副葬品は明らかに漢文化の流れを反映するもので、西域的要素はほとんどない。

中国陝西省西安市近郊にある茂陵（武帝墓）の近くにはその陪葬墓として霍去病（前 140 年～前 117 年）の墓がある。霍去病墓の出土品の写真は、王志傑『茂陵文物鑑賞図誌』（三秦出版社、2012）で公開されている。金象嵌の青銅製犀像、鍍金銅製馬像、金銀で象嵌された弩のほか玉器や青銅器などの副葬品が多数出土した。大半の俑の姿は明らかに漢人の特徴を示しているけれども、胡人の特徴を示す彩陶俑もある。基本的には古風な漢文化を反映しつつも西域の文物が混在していると見ることができる。

2009年の発掘により、中国山東省の東平後屯漢代壁画墓で非常に保存状態の良い壁画が発見された。神像的なものとしては、雲流紋様の中央に赤い丸とその丸の中央に飛翔する黒い鳥のような鳥の絵がある。その姿は「八咫鳥」を連想させる。ただ、赤い丸がたたら（鑪）の中で熱せられて溶解した鉄鉱石と考えると、黒い鳥はその残滓である「太一余糧」または将来刀剣等として鑄造される製品の萌芽を示すものかもしれない。壁面には多数の人物像が描かれている。その容姿は、明らかに胡人と推定できるものと漢人と推定できるものとが混在している。墓誌等から、被葬者は「張」という姓の一族の者で、新の王莽の時代前後に葬られたものだということが判明している。この壁画を含む発掘品は、山東省文物考古研究所・東平県文物管理所編著『東平後屯漢代壁画墓』（文物出版社、2010）で公開されている。

1971年に中国・内モンゴル自治区和林格爾県で発掘された和林格爾漢墓には非常に多数の壁画が比較的良い状態で保存されていた。壁画には解説のための文字が付されており、葬られた者と関連する出来事（孝廉に挙げられてから郎、西河長史、行上郡属国都尉、繁陽令を経て使持節護烏桓校尉となった。）が回想的に連続して描かれている。被葬者本人の名前は剥落により読みにくい状態となっているけれども、「夫人」と読める字が残されていることから、後漢末の李膺（169年没）の夫人の墓所なのではないかと推定される。その内容については、内蒙古自治区文物考古研究所編『和林格爾漢墓』（文物出版社、2007）で公開されている。孔子とその弟子、晏子、忠臣、武人、列女、神獣、白像に騎乗する神仙（帝釈天?）等の姿も残されているほか、幕府（当時の政庁）、寧城や莊園（庄園）の内外の様子も詳細に描かれている。莊園の様子を詳細に示す壁画は、当時の民衆の生活を知る上で極めて貴重なものと言える。なお、同書中では、匈奴（休屠胡）との関連について述べられている。

このほか、漢代の王墓等からの発掘品は多数ある。参考となる書籍として、羅二虎（渡辺武訳）『中国漢代の画像と画像墓 本文編』（慶友社、2002）、同『中国漢代の画像と画像墓 資料編』（慶友社、2002）がある。秦代以前の発掘品については、陝西省考古研究院・宝鶏市考古研究所・鳳翔県博物館『鳳翔孫家南頭一周秦墓葬与西漢倉儲建築遺址発掘報告』（科学出版社、2015）が参考になる。

²⁷⁷ 唐の時代には中華的（漢人的）な要素が再び優勢になったと推定される。例えば、敦煌では多数の本草書が発掘されている。その詳細は、馬継興『中国出土古医書考釈与研究 中巻 敦煌古医書考釈』（上海科学技術出版社、2015）、岩本篤志『立正大学文学部学術叢書 01 唐代の医薬書と敦煌文献』（角川学芸出版、2015）、王淑民編著『英藏敦煌醫學文獻圖影與注疏』（人民衛生出版社、2012）で知ることができる。陳明『中古醫療與外来文化』（北京大学出版社、2013）は、唐代以降の中国医学がインドやペルシアの医学から大きな影響を受けているとの見解を実証的に示している。このようなインドやペルシアの医学からの影響は、五胡十六国の時代に始まり、隋・唐の時代において発展し、次第に本草学等の中に吸収され、定着したものと推定することが可能だろう。なお、毛継祖・馬世林訳注『蔵伝医薬經典叢書 月王薬診』（上海科学技術出版社、2012）が参考になる。また、大部のものになるが、北里研究所附属東洋医学総合研究所医史文献研究室編『和刻漢籍医書集成』（エンタプライズ、1988～1992）がある。

²⁷⁸ 「菑」と「芳椒」の解釈については、前掲『『孔子家語』の蘭』及び『『荀子』の蘭』で詳しく検討したので、本稿では省略する。なお、この詩に出てくる「菑」に関しては、前掲『『楚辞』と楚文化の総合的研究』45～53頁[澁澤尚]に本草学の立場での検

討結果がある。

²⁷⁹ 全体として、もともと素朴な葬送歌謡のようなものが存在し、それを基礎として美しい修辭を加えた上で作成された詩ではないかというような印象を受ける。

²⁸⁰ 湘夫人のことを指す。朱熹の解釈については、前掲『楚辭集注全注釈二』55～56頁。

²⁸¹ 洞庭湖またはその北畔を指す。

²⁸² 前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』80頁は、「かの君との楽しい逢瀬のために支度をす」と訳している。

²⁸³ 通説は、湘夫人のことを指すと解している。

²⁸⁴ 前掲『楚辭集注全注釈二』59頁

²⁸⁵ 「沅水」は「沅江」のことを意味する。湖南省の四大河川（湘江、沅江、資江、澧水）の1つ。洞庭湖に注ぎ長江（揚子江）の支流となっている。

²⁸⁶ 「菝」をセリ科のヨロイグサ (*Angelica dahurica*) と仮定して、湖南省内の分布を調べてみると、前掲『湖南種子植物総覧』315頁には「省内有栽培」とある。野生種の自生があるかどうかは不明。なお、「菝」を春の香草、「蘭」を秋の香草として対比させていると仮定すると、ヨロイグサは、春の香草ではないので、「菝」の該当性がないことになる。加えて、ヨロイグサ及びその近縁種は、水辺の植物でもない。セリ科の植物の中で春に花が咲き香草としても用いられるもので水辺に生えるものとしては、セリ (*Oenanthe javanica* (Blume) A.P. de Candolle) が該当するのではないかと考えられる。

²⁸⁷ 「醴水」は「澧水」とも書く。湖南省の四大河川の1つ。

²⁸⁸ 通説は、湘夫人のことを指すと解している。

²⁸⁹ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』81頁

²⁹⁰ 大型の鹿のような野生動物のことを指す。ヘラジカ (*Alces L.*) の類とする見解とシフゾウ (*Elaphurus davidianus* Milne-Edwards) とする見解などがある。

²⁹¹ 「自分には行き場がない」という心情を示すものかもしれない。宮殿の庭で草を食んでいても大鹿らしい生き方とは言えないし、水を失った龍は神力を発揮することができず、無為に生きているだけということになる。

²⁹² 前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』80～81頁は、湘夫人に恋焦がれる者の心情を示すものとしている。

²⁹³ 「水」は洞庭湖を指すと解されるから「水中」とは洞庭湖の底ということになる。呂大吉・何耀華総主編『中国各民族原始宗教資料集成 苗族卷・水族卷』（中国社会科学出版社、2013）の口絵写真には、藁のような草で編んでつくり綺麗な布片等で飾った上で川に浮かべて流す「鬼船」のカラー写真が収録されている。この鬼船は、苗族等の祖先が水葬の習慣をもっていたことを示唆するものかもしれない。なお、水葬ではないが、舟を棺として用いた出土物については、辻尾榮市「舟・船棺をつかう埋葬法—四川省昭化県宝輪院墓と巴県冬笋壩墓の例—」人文学論集 29 集 67～108 頁が参考になる。

²⁹⁴ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』82頁

²⁹⁵ 『香藥抄』（『續群書類従 31 上・雑部』87頁）の「菖蒲」には、「爾不入服用詠詠多云蘭蓀 正謂此也」とある。「蓀」はショウブ科のショウブ (*Acorus calamus L.*) またはセキショウ (*Acorus gramineus*) を指すものと思われる。

²⁹⁶ 日本でも古くは竹などで編んで板状にしたものを壁材とすることがあったし、現

在でも南方ではそのような建築様式が残されている。正倉院などに代表される校倉造の通気性の良い壁構造も(木材を用いているとはいえ)同じようなルーツをもつものではないかと想像される。この点については、前掲『図説日本人の原郷—揚子江流域の少数民族文化を訪ねて』228~229頁、鈴木正崇『中国南部少数民族誌—海南島・雲南・貴州』(三和書房、1985)186~190頁、前掲黄靈庚『楚辭與簡帛文獻』180~186頁、前掲『稲作文化にみる中国貴州と日本』153~172頁が参考になる。

²⁹⁷ 「紫」という植物(香草)で「壇」を造るという趣旨に解することもできるし、「紫壇」という植物(香草)を指すと解釈することもできる。

²⁹⁸ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』82頁

²⁹⁹ 「桂」と「椒蘭」については、前掲『荀子』の蘭(3・完)25頁及び脚注1で述べた。「椒蘭」については、前掲『荀子』の蘭(2)でも述べた。

³⁰⁰ 一般的には屋根の庇の裏側にある垂木を支えるための桁状の横木のことを意味する。

³⁰¹ 戸口の上に桁状にある横木のことを意味する。

³⁰² 「薜荔」については、「湘君」との関連で既に述べた。

³⁰³ 既に河畔に四つ出網で粗末な帷帳を造営するという前提なのだが、改めて洞庭湖の水中に裳屋のような小屋を造営するために再び柱を建て、屋根を葺き、香草を用いて帷帳をめぐらすという構成なのだろうと推定される。

³⁰⁴ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』82頁は、「白玉を押しとし」と訳し、その解釈として「白玉をおさえにして敷物に置く。鎮は押し石、おもし。一に瑱につくる。」と述べている。

³⁰⁵ 「石蘭」については、前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』82頁は「蘭の一種。山蘭、香草」としている。「山蘭」とは、一般に、白頭婆(*Eupatorium japonicum*)の別名とされている。これに対し、潘富俊・呂勝由『楚辭植物圖鑑』(猫頭鷹出版、2002)82~83頁は、「石斛」のことだという解釈を示している。同書には、学名として「*Dendrobium nobile* Lindl.」と記載されているが、正確な考察に基づくものとは言い難い。

³⁰⁶ 「芷」は「菝」と同じで、セリ科のヨロイグサ(*Angelica dahurica*)と解するのが通説だと思われるが、問題があることは、前掲『孔子家語』の蘭脚注14で述べたとおりだ。

³⁰⁷ 古くからあるような茅葺屋根を葺く手順に従って「湘夫人」にある水中の建物の構造を読み解くと、従来とは別の解釈が成立するかもしれないと考える。従来の通説では、木材でつくられた宮殿のようなものを前提にしていると思われる部分が多い。しかし、部材の名前・形状・用法が異なることがある。

³⁰⁸ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辭』82頁

³⁰⁹ 『禮記』の「檀弓上」には「舜葬於蒼梧之野 蓋三妃未之從也 季武子曰 周公蓋祔」とある。『山海經』の「海内經」には「南方蒼梧之丘 蒼梧之淵 其中有九嶷山 舜之所葬 在長沙零陵界中(南方には梧之丘と蒼梧之淵があり、その間に九嶷山がある。舜を葬った所で、長沙と零陵の境界にあたる)」とある。『大戴禮記』の「五帝徳」には宰我の孔子への「帝舜」についての質問に対する孔子の返答として、「南撫交阯 大教 鮮支 渠廋 氏 羌 北山戎 發 息慎 東長鳥夷 羽民 舜之少也 惡惓勞苦 二十以孝聞乎天下 三十在位 嗣帝所 五十乃死 葬於蒼梧之野 (南方の交阯を開拓し、鮮支、渠廋、氏、羌、北は山戎、發、息慎、東は長夷、鳥夷

羽民に赴いて大いに教えた。舜が幼少の頃には、苦勞をしてやつれていたが、20歳で孝をもって世に名を知られるようになり、30歳で位に就き帝位を嗣ぎ、50歳で亡くなり、蒼梧之野に葬られた」とある。「長夷」と「鳥夷羽民」は、「東夷」を連想させる。「長夷」は「長髓彦」または「息長氏」を連想させる。現在、九嶷山と呼ばれる山（別名・蒼梧山）は湖南省永州市寧遠県にある。寧遠県の人民政府は、同県舜陵鎮に置かれている。なお、帝舜が没した地に関して、『論衡』の「偶會」には「傳曰 舜葬蒼梧 象為之耕 禹葬會稽 鳥為之佃 失事之實 虛妄之言也（伝説によると、舜が蒼梧に葬られると象が舜のために陵墓を造営し、禹が會稽に葬られると鳥が地面を掘って墓所を造営したという。これらは事実と反しており、嘘である）」とある。

³¹⁰ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』82頁は、「湘君の靈は衆神を随えて雲のように降ってこられる」と訳している。前掲石川三佐男『楚辞新研究』73頁は、「(神々の)靈の來たること雲のごとし」と訳している。

³¹¹ 「余」については、湘夫人が自分のことを述べているとする見解とそうでないとする見解があるようだ。この点については、前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』83頁に解説がある。私見としては、湘夫人または湘君ではなく作者である屈原自身のことを指すと解しても全体としてつじつまが合うと考える。

³¹² 「湘君」では「袂」となっているところが「湘夫人」では「袂」となっていて、同音だと推定される。「袂」は袖を意味するので、文字通りに解釈するとすれば袖をちぎって河に投げ入れるということになるのだろうが、単に韻を踏んでいるだけだとすれば、袖につけた佩のような飾りをとって投げ入れるということを示すと解釈することもできるだろう。

³¹³ 「湘君」では「佩」となっているところが「湘夫人」では「裸」となっている。「裸」は肌着を意味するので、肌着を脱いで川に捨てるということになる。しかし、「湘君」と対応させているだけで、肌着につけた飾りをちぎって投げ捨てることを示すと解釈することもできる。

³¹⁴ 前述のとおり、『楚辞』の「漁夫」には「吾聞之 新沐者必彈冠 新浴者必振衣 安能以身之察察 受物之汶汶者乎」とある。「漁夫」で描写されている状況と意味合いは「湘夫人」とは異なるが、仮に「湘夫人」が後世の偽作だとした場合、この「漁夫」にある一節が何らかのかたちで影響していると考えられることは可能なことではないかと思われる。なお、前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』281頁にある解説が参考になる。

³¹⁵ 「杜若」は、ヤブミョウガ (*Polia japonica* Thunberg) を意味する。

³¹⁶ 通説は、湘君と湘夫人とが遭うという構図に固執しているので、「杜若」の贈り主は湘夫人であり贈られるのは湘君という解釈を離れることができない(前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』82~83頁、前掲石川三佐男『楚辞新研究』74頁、76頁)。しかし、もともと古い歌謡が存在し、それを基礎として後代に語句の挿入や修辭を重ねて「湘夫人」がつけられたものだとすれば、このような通説における解釈の全ての前提が崩壊する可能性がある。この点については、今後の考古学上の発見とその解析・検討結果を待ちたい。

³¹⁷ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』83頁は、「君と会うのによい時は、しばしば得られないから、しばらくここに目的もなく歩きまわり、ゆっくりと遊ぼうかと思う」と訳している。解釈が分かれるところだが、どの解釈を採用にしても、唐突な印象を否めない。後代に挿入されたものかもしれない。

³¹⁸ 前掲『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』301 頁は、「蕨」をデンジソウ (*Marsilea quadrifolia*) と解するのは誤りとしている。

³¹⁹ 前掲『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』301 頁は、『呉晋本草』の記載を根拠として、トチカガミ科 (*Hydrocharitaceae*) のトチカガミ (*Hydrocharis dubia* (Blume) Backer) としている。葉の形からすると、バイカモよりもトチカガミのほうが適切だと言えるかもしれない。ただし、トチカガミの葉も四葉になっているわけではない。なお、既に絶滅した種の可能性も否定されない。水辺の環境に棲息する動植物は、棲息可能な環境が限定されているため、比較的絶滅しやすいという一般的傾向がある。

³²⁰ デンジソウの実物は、国立科学博物館筑波実験植物園、大阪市立大学理学部附属植物園などで観察することができる。

³²¹ 南方熊楠『十二支考 (上)』(岩波文庫、1994) 222~223 頁

³²² 大島直行『月と蛇と縄文人—シンボリズムとレトリックで読み解く神話的世界観』(寿郎社、2014)、谷川健一『蛇—不死と再生の民俗』(富山房インターナショナル、2012)、谷川健一編『日本民俗文化集成第 20 巻 蛇 (ハブ) の民俗』(三一書房、1998)、前掲『カミの発生—日本文化と信仰』89~96 頁、伊藤好英「済州島民俗の比較研究—蛇の信仰・春祭・石の塔—」実践女子大学美學美術史學 27 巻 11~35 頁が参考になる。なお、「王」の字は、漢字の大篆では柱 (扶桑樹) に蛇がからみついているようなトーテム状の形状をしている。王や神の概念の起源を理解する上では重要だ。このことは、先学によって夙に指摘されてきた。この点に関しては、前掲『稲と鳥と太陽の道—日本文化の原点を追う』、杉浦康平『宇宙を叩く—火焰太鼓・曼荼羅・アジアの響き』(工作舎、2004)、福永光司・千田稔・高橋徹『日本の道教遺跡を歩く—陰陽道・修験道のルーツもここにあった』(朝日新聞出版、2003)、前掲『中国各民族原始宗教資料集成 考古卷』、植田文雄「立柱祭祀の史的的研究—立柱遺構と神樹信仰の淵源をさぐる—」日本考古学 12 巻 19 号 95~114 頁などが参考になる。

³²³ 中村璋八・清水浩子『風俗通義』(明德出版社、2002) 285~288 頁。

³²⁴ 地下水位の深さの相違によって地上の植生に相違が出現するというところに着目して、『管子』にある植物の同定を試みるものとして、原宗子『古代中国の開發と環境—『管子』地員篇研究』(研文出版、1994) 134~177 頁がある。

³²⁵ 陶弘景『名醫別録』については、真柳誠「3 卷本『本草集注』と出土史料」Conference and Workshop on Dunhuang Medical Manuscripts, Centre for the History and Culture of Medicine, School of Oriental and African Studies, University of London in association with the Needham Research Institute, Cambridge. September, 9-10th, 2000 が参考になる。陶弘景は、『神農本草經』の編纂者として知られている。

³²⁶ http://www.efloras.org/florataxon.aspx?flora_id=2&taxon_id=200027132 [2015 年 9 月 18 日確認]

³²⁷ 前掲『湖南種子植物総覧』395 頁によれば、湖南省内には、白頭婆 (*Eupatorium japonicum*)、多須公 (*Eupatorium chinense*) の分布がある。これらの他に「佩蘭」として、「*Eupatorium lindleyanum* de Candolle」の名が記載されており、「*Eupatorium fortunei*」の記載はない。学名についての見解の相違に基づくものと推定される。この「*Eupatorium lindleyanum*」の和名は「サワヒヨドリ (沢鴨)」なのだが、Flora of China では、その中国名を「林澤蘭」として扱い、新疆ウイグル自治区を除く中国全土、ロシア、韓国、日本、ミャンマー、フィリピンに分布するものとしている。本草書にいう「澤蘭」がこれに該当する。古代の楚の人々にとっても親しみのある植物だったの

に違いない。なお、邢福武・陳紅鋒・秦新生・張榮京・周勁松主編『中国熱帯雨林地区植物図鑑—海南植物（第2冊）』（華中科技大学出版社、2014）1224～1225頁は、中国南部に分布しているキク科フジバカマ属植物（*Eupatorium*）として、多須公（*Eupatorium chinense*）、佩蘭（*Eupatorium fortunei*）及び白頭婆の別名・山蘭（*Eupatorium japonicum*）を掲げている。

³²⁸ 「湘夫人」の全体としてのモチーフが「水葬」だと仮定することが許されるとすれば、この詩に出現する植物は水草であるとしたほうが適切・妥当な解釈だということになる。そして、白頭婆（*Eupatorium japonicum*）と白菖すなわちセキショウ（*Acorus gramineus*）とを比較してみた場合、明らかに後者のほうが水草としての要素を多く帯びていることは言うまでもない。

³²⁹ 「菝若」は「芷（菝）」と「杜若」を合わせた合成語だと思われる。

³³⁰ この「蕙」は、一般名詞として「香草」という意味で用いられている。そのように解さないと、「蕙圃」の意味がなくなる。

³³¹ 「射干」については『荀子』の蘭(1)脚注30で述べた。

³³² 「江離 麋蕪 諸蔗 獐且」については、「少司命」で後述する。

³³³ 司馬相如の「天子游獵賦」は、「子虚賦」を自ら改作してつくられたものだとされている。「子虚賦」は『文選』に収録されている。

³³⁴ 前掲石川三佐男『楚辞新研究』315～319頁は、『楚辞』の中にしばしば香草が登場することについて検討を加えた上で、「離騷篇等『楚辞』は香草美人の文學、といひ表してもよいのではあるまいか」と述べている。

³³⁵ 屈原自らが手を汚して栽培していたとは考えない。屈原が政争に敗れて失脚した結果、王の支配地である蕙圃に立ち入ることができなくなったと推定される。

³³⁶ 「天子游獵の賦」全体の構成をみても、『山海經』を下敷きにして構成されていることが明らかなので、「天子游獵の賦」の中で示されている植物が実際に存在したかどうかについては確実とは言えない。それにしても、「蕙圃」の中で楚王が狩猟をすることができるくらいなので相当広い場所ということになりそうだ。日本の徳川将軍が鷹狩をした場所のような広大さをもっていたと推定することができる。鷹狩のような狩猟場の敬称として「蕙圃」という語が成立し、そのあとで、蕙圃の中に菓草園のようなものが構築されたのかもしれない。鷹狩それ自体は、古代のメソポタミア起源の可能性があるが、遅くとも魏晋南北朝の頃には中国の貴族階級の間にも普及していた。なお、「司馬相如列傳」の日本語訳としては、小川環樹・今鷹真・福島義彦訳『史記列伝四』（岩波文庫、1975）がある。本稿においても参考にした。

³³⁷ 劉希夷『公子行』に「此日遨遊邀美女 此時歌舞入娼家 娼家美女鬱金香 飛來飛去公子傍（この日は遊びに遊び、美女と遊ぶ。歌い舞いながら娼家に入る。娼家の美女は鬱金香だ。貴公子のあたりを歩きつ戻りつしている）」とある。六朝時代の貴族の様子を示すものと推定される。『水經注』の「温水」には「鬱人掌裸器 凡祭醞賓客之裸事 和鬱鬯以實樽彝」、「鬱 芳草也 百草之華煮以合釀黑黍 以降神者也 或說今鬱金香是也（鬱は香草で、百草の花を煮て黒黍と一緒に醸成し、神を降臨させるのに用いるものである。一説によれば、現在の鬱金香がこれだともされている）」とある。しかし、「鬱」や「鬱金香」がどのような植物またはその加工品を指すのかについては必ずしも明らかではない。現代では、「鬱金香」との語は、チューリップ（*Tulipa gesneriana* L.）の中国名として用いられる。なお、宮川尚志「水經注に見えたる祠廟」東洋史研究会5巻1号21～38頁が参考になる。

338 「芝蘭」については、前掲『孔子家語』の蘭」13～15頁で述べた。

339 『後漢書』の「西域傳」に「土多金銀奇寶 有夜光璧 明月珠 駭雞犀 珊瑚 虎魄 琉璃 琅玕 朱丹 青碧 刺金縷繡 織成金縷罽 雜色綾 作黃金塗 火浣布 又有細布 或言水羊毳 野蠶繭所作也 合會諸香 煎其汁以為蘇合 凡外國諸珍異皆出焉」とある。「西域傳」の日本語訳としては、吉川忠夫訓注『後漢書第10冊列伝八』(岩波書店、2005)がある。

340 「江離」については、「少司命」の【麋蕪】のところで後述する。

341 「秋蘭」については、「少司命」の【秋蘭】のところで後述する。

342 『抱朴子』の「内篇」の日本語訳としては、本田濟訳注『東洋文庫512 抱朴子 内篇』(平凡社、1990)がある。本稿においても参考にした。

343 後宮の美女や愛妾などの女性が老いて捨てられてしまった後にどのような境遇になってしまうのかについては想像の域を出ない。中国の史書を読むと、従前の妻子を殺して別の妻を迎えた例はあるが、これは正妻(正室)のゆえにそうしたのだろうと推定される。その背後には妻の実家である豪族の政治的影響力等があったと考えられる。歴史の常というものだが、詳細はよくわからない。この点に関して、前記『玉造小町子壯哀書』が示唆するところは少なくないように思う。

344 『漢書』の「王貢兩龔鮑傳」には「薰以香自燒」とある。

345 密教の護摩の起源は、一般に、紀元前2000年頃に成立したとされるバラモン教にあると考えられている。しかし、その起源は紀元前3000年頃に成立したと推定されているゾロアスター教にもあるのではなからうか。ゾロアスター教については、エミール・バンヴェニスト、ゲラルド・ニヨリ(前田耕作訳)『東洋文庫609 ゾロアスター教論考』(平凡社、1996)、メアリー・ボイス(山本由美子訳)『ゾロアスター教』(講談社学術文庫、2010)が参考になる。

346 前掲『北村四郎選集II 本草の植物』185頁など。なお、前掲『隨筆植物一日一題』198～200頁には「蕙蘭と書く蕙とは何んだ」との小稿が収録されている。その中で、牧野富太郎は、「松村任三博士の『改訂植物名彙』前篇漢名之部に蕙即薰草を *Ocimum Basilicum* L.即ちメバハキ(目箒の意)にあててあるが、それは誤りでこれは前記の通りカミメハバキの名とせねばならない」と述べている。

347 『香藥抄』(『續群書類従31上・雑部』81頁)は、「香蒲」の別名として「蕙草」をあげている。この「香蒲」は、ガマ科のガマ(*Typha latifolia* L.)、ヒメガマ(*Typha domingensis* Presl)またはコガマ(*Typha orientalis* L.)を意味すると解されている。

348 大麻草(*Cannabis sativa*)は、現在の日本では違法な麻薬の一種として大麻取締法による処罰の対象となり得る。しかし、古代の日本においては広く神事や祭祀において使用されていた。それゆえ、現代における価値観や法的規制等をひとまず措いて、問題となる事柄が存在した時代における社会環境を前提に、当時の祭祀・儀礼に用いられる薬種薬物や菓草等について即物的な考察を丁寧に行い、当時の社会における価値観に即した解釈をすべきだと考える。

349 小野蘭山『本草綱目啓蒙』卷之九では、「杜衡」と「細辛」とは異なるものとした上で、「杜衡」について、「山ニ多クアリ陰地ニ生ス 葉圓ニ末尖リ莖ノ付クトコロカケテ馬蹄ノ形ノ如シ 大サ二三寸形圓ナルモノアリ 長キモノアリ 又苦蕎麥葉ノ如キモノアリ 質皆厚シ 冬ヲ経テ枯レズ一カブニ葉叢生ス 莖葉黒色 葉ニ白斑文アリ 其斑數品アリ 葉中左右相對ノ白キ者アリ 中央ノミ白キ者アリ 葉後白キモノアリ 中央一線白キモノアリ 満葉白條ノ如キ者アリ 全ク斑ナキ者アリ

是ヲ種樹家ニテ細辛ト呼ハ誤ナリ」とある。このような斑入り品は、今日でも園芸品「細辛」として流通しているのだが、そのような呼称が江戸時代からあり、伊藤蘭山はそれを誤用だと指摘していたということを知ることができる。

³⁵⁰ 小野蘭山『本草綱目啓蒙』巻之九には、「延喜式ニ載ルハ当時何ノ草ヲ以テ細辛トナシタルヤ詳ナラズ 眞ノ細辛ハ近来出タリ 加茂アオヒヲ以細辛ニ充ツル古説ハ穩ナラズ」と明記してある。

³⁵¹ 野生状態のヤブミヨウガ (*Polia japonica*) は、林床や林縁などの湿った陰地に生育するのが通常で、河畔や湖畔などに生えているのを見かけることはない。このことからすると、ここでいう「杜衡」も麻のことを指す可能性があることを否定することができない。麻すなわち大麻草 (*Cannabis sativa*) は、しばしば水辺や河原などに生える。

³⁵² 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』85 頁

³⁵³ 前掲『楚辞植物圖鑑』84～85 頁に麻の花の写がある。

³⁵⁴ アサガラは、大麻草の成熟した茎を乾燥させた藁状のもので、日本では茅葺屋根の下地として用いられた。大麻取締法 1 条は、「大麻草の成熟した茎及びその製品（樹脂を除く。）」を規制対象外としている。それゆえ、茅葺屋根を葺く場合等において、大麻草の樹脂成分を含まない繊維質だけのアサガラをその材料に用いることは、大麻取締法の違法行為に該当しない。念のために付言しておく、アサガラそれ自体は大麻取締法の適用対象外だが、アサガラを得るために大麻草を栽培する行為には大麻取締法の適用があるので、注意しなければならない。

³⁵⁵ ただし、ここでいう「蓬」はヨモギ（艾）のことではなく、麻（麩）すなわちアサガラと同義と解すべきかもしれない。

³⁵⁶ 日本においては、現在でも「破魔弓」を贈る儀礼、矢を射る「弓取の神事」等が行われている地域がある。これらは、『禮記』にある古代中国の「桑弧蓬矢」に起源を有するものではないかと推定することができる。

³⁵⁷ 伊東弥恵治原訳・鈴木正夫補訳『アーユルヴェーダススルタ大医典』（人間と歴史社、2005）575～579 頁。

³⁵⁸ マタタビ科 (*Actinidiaceae*) の植物を考えることもできる。例えば、日本国内に自生のあるものでは、サルナシ (*Actinidia arguta* (Siebold et Zuccarini) Planchon ex Miquel) とマタタビ (*Actinidia polygama* (Siebold & Zuccarini) Planchon ex Miquel) がある。中国には山梨 (*Actinidia rufa* (Siebold & Zuccarini) Planchon ex Miquel) や鬼木天蓼 (*Actinidia chinensis* Planchon) がある。これらの植物は東アジア原産の植物で、ヴェーダの植物とはなり難い。

³⁵⁹ 大麻草 (*Cannabis sativa*) がソーマの正体だとする見解はある。この点については、Chris Bennett, *Cannabis and the Soma Solution*, Trine Day, 2010 が参考になる。芥子 (*Papaver somniferum* L.) が関係していると考えられる見解もあるらしい。

³⁶⁰ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』82 頁

³⁶¹ 楚の遺跡から出土する文物の中にも貝類を原材料とする玉の例はない。強いて言えば、瑪瑙製の玉環（玉鐲）がこれに該当し得る。日本の縄文晩期～古墳時代の遺跡からは貝類を輪切りにして製造した玉鐲類似の装飾品等が出土している。

³⁶² 紫貝がどのような貝に該当するかについては、古来諸説あるけれども、一般的にはタカラガイ (*Cypraeidae*) の類のような海生の貝類の貝殻を意味する。洞庭湖は内陸にある淡水湖なので、海生貝類は除外して考えなければならない。

363 『香要抄本』（『群書類従 31 上・雑部』 8 頁には、「眞紫檀」とある。

364 前掲『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』 467 頁は、『本草綱目』にある「紫檀」について、マメ科 (*Fabaceae*) のインドカリン (*Pterocarpus indicus Willdenow*) が該当するものとし、中国の国内でも広東や雲南に分布があるとしている。現在の中国においては、雲南と台湾に分布があるけれども、これらは植栽によるものかもしれない。本来の原産地は、インド、スリランカ (セイロン) ~ 東南アジアの熱帯雨林なので、その地に生えているものを伐採して中国国内に持ち込み「紫檀」として流通させたものは相当高価だったろうと想像される。

365 朱熹の注釈における考察は、南宋の時代に貴族階級が接することのできた文物を前提とする空想や主観的な思い入れのようなものに属する部分が含まれていることに十分に留意しなければならない。

366 「紫草」は、『万葉集』の時代には既に日本に導入され、栽培・利用されていた可能性が非常に高い。このことは、日本国の歴史を知る上でも極めて重要なことだと考える。

367 石聲漢校註『齊民要術今釋 上冊』（中華書局、2013） 480~481 頁

368 前掲『植物名釋札記』 261 頁

369 ムラサキ (*Lithospermum erythrorhizon*) の現在の分布は、ロシア東部、中国 (遼寧省、河北省、山西省、陝西省、山東省、河南省、湖北省、湖南省、江西省、広西チワン族自治区、貴州省、四川省) となっており、甘肅省が含まれていない。このことから、『齊民要術』が引用する『廣志』に記載されている「紫草」は現在の紫草すなわちムラサキ (*Lithospermum erythrorhizon*) と同一の植物ではないかもしれないという可能性が残ることになる。なお、ロシア東部にも分布があることには注目すべきだろう。日本と韓国にもあるが、これらは、古代に移入・植栽されたものの子孫と推定される。

370 この点については、三浦三郎「紫草の文献学的研究」薬史学雑誌 1 巻 1 号 3~10 頁が参考になる。

371 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』 83~84 頁

372 古代中国における司命神信仰については、稲畑耕一郎「司命神像の展開」中国文学研究 5 巻 1~17 頁、石川三佐男「中国の葬送習俗における司命神について」秋田大学総合基礎教育研究紀要 1 号 14~25 頁が詳しい。なお、古代中国における天文と星座に関しては、前掲『荀子』の蘭(2) 脚注 41 でも述べた。

373 単なる思い付きの一種に過ぎないが、「大司命」と「少司命」は、「大国主」と「少彦名命」との組み合わせと酷似しているように思う。これらの名を実名ではなく敬称の一種だと仮定した場合、その敬称は、中国の天文学に起源を有すると考えることが可能となる。なお、この関係では、李維宝・李海櫻『民俗中的天文学』（雲南大学出版社、2014）が参考になる。

374 『楚辞章句』では「緑葉兮素枝」となっているが、昭明太子『文選』では「緑葉兮素華」となっているので、こちらを妥当とした。「素枝」は、「葉のない枝」または「白い枝」という意味をもつ。「素枝」が「葉のない枝」の場合には「緑葉」と矛盾する。そもそもラン科シンビジウム属 (*Cymbidium*) の植物には枝が一切存在しない (花茎が枝に分かれすることはあり、それが枝のように見えることはある。)。これに対し、キク科フジバカマ属の植物には枝が分岐して出ることがある。しかし、「白い枝」が出ることは決してない。「緑色の枝」が出ることはあるけれども、それでは「緑葉

兮紫莖」の句と矛盾する。キク科フジバカマ属の植物が紫莖の場合にはその枝も紫色となる。「藤袴」説では、この自己矛盾を解決することができない。『文選』を編纂した昭明太子・蕭統（501年～531年）が「素枝」を「素華」と改めた可能性は否定できないが、意味的に自己矛盾のない昭明太子『文選』の「素華」のほうを選択すべきだと判断した。前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』89頁は「一に素華とある」と注釈している。

³⁷⁵ 『楚辞』の「七諫」の「謬諫」に「菑藟雜於麤蒸兮 機蓬矢以射革」とあり、「哀時命」に「菑籜雜於麤蒸兮 機蓬矢以射革」とあることについて、優れた才人と愚物とが混在している状況を示すと解釈すべきことについては既に述べた。ここでは、「秋蘭」を高貴で崇高なるものとし「麤蕪」を粗野で世俗的なものとして対比していると解釈することにした。

³⁷⁶ 「羅生」は、2個の植物が並んで生えている様子を示すものではなく、複数の植物が並んで生えている様子または群生している様子を示す。

³⁷⁷ 「綠葉兮素華」は「秋蘭」の清浄さを表現し、「芳菲菲兮襲予」は「麤蕪」の根が収穫時期を迎え、その根が「芷（菘）」となって食欲や様々な欲望を喚起するという対比になっていると解釈した。現実の屈原は、政争に敗れて下野しているので、食欲を満たすことが難しい状態にあったかもしれない。その一方で、讒言により屈原を追放した政敵達は、「芷（菘）」の香りを楽しみ、存分に食欲を満たしているのに違いない。それゆえ、「襲う」という表現を採ったのだと解する。なお、「芷（菘）」については、前掲『孔子家語』の「蘭」で述べた。

³⁷⁸ 屈原が自分の政治的才能を活かしてもらえない状況を示す隠喩のようなものではないだろうか。なお、前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』89頁は、「美子」を「美しい愛人」と解釈している。

³⁷⁹ セリ科植物には枯れるまで全草が緑色のものもあるが、例えば、マルバトウキ属（*Ligusticum*）植物に見られるように植物体が成長し外気が次第に冷えてくる時期になると葉は緑色のままでも莖が紫色になるものがある。「麤蕪」に該当する植物が条紋藁本（*Ligusticum striatum* (Syn. *Ligusticum wallichii*）や藁本（*Ligusticum sinense* Oliver）のような植物の場合、まさに「綠葉兮紫莖」になる。

³⁸⁰ ラン科シュンラン属の植物の花には様々なタイプのもがあり、とりわけ交配品では変異の幅が大きい。蘭の愛好家は、多種多様な葉や花をもつ蘭の中から自分の好みに合ったものを選抜し、これを愛培する。ここでは、堂の下に多数列なって生えている秋蘭の中から秀逸なるものを見出したということ表現していると考え。これは、俗にまみれて暮らしている屈原に楚王が再び目を向けるようになってほしいという願望の裏返し表現になっているのかもしれない。

³⁸¹ 苗族等の少数民族の祭祀・祭礼が若い男女の出会いの機会ともなっていることなどについては、前掲『巫系文學論』198～276頁、前掲『図説日本人の原郷—揚子江流域の少数民族文化を訪ねて』169頁～214頁、村松一弥編訳『東洋文庫 260 苗族民話集—中国の口承文芸 2』（平凡社、1974）が参考になる。歌垣との関連については、工藤隆『歌垣と神話をさかのぼる—少数民族文化としての日本古代文学—』（新典社、1999）、辰巳正明『万葉集の歴史—日本人が歌によって築いた原初のヒストリー』（笠間書院、2011）、松本雅明著作集編集委員会編『松本雅明著作集 2 琉球弧における国家の形成』（弘生書林、1986）、辰巳正明『歌垣—恋歌の奇祭をたずねて』（新典社、2009）が参考になる。

³⁸² 「荷」または「荷葉」は、一般に、ハス科ハス属 (*Nelumbo*) の植物のことを指すと解されている。

³⁸³ 群れ咲く草の中で1本の美花をみつけたと思ったら、たちまち見失ってしまったような状況、または、芳香を楽しんでいたけれどもすぐに芳香が消え失せてしまったような状況を示すものではなからうか。一般に、植物の香りは、花粉(花粉塊)を運搬する媒介者(ポリネータ)となっている昆虫等の小動物の活動時間帯だけ放たれ、それ以外の時間帯には無香となることが少なくない。例えば、フウラン (*Vanda falcata* (Thunberg) Beer) の仲間は、夜間に飛来する蛾の仲間をポリネータとしているため、夕方から夜間に良い香りを漂わせるが、朝には香らなくなる。

³⁸⁴ 前掲『新釈漢文大系 34 楚辞』89 頁は、「慕わしい立派なあなたを待ち望んでも、まだ来られないので、私はただ風に向かって心もうつろに大声で歌うのみである」と訳している。

³⁸⁵ 鳥類のカワセミ (*Alcedo atthis* L.) を指す。

³⁸⁶ 政争に敗れて下野していても再び楚の国政を執りたいという願望はあるが、それは、天帝が乗るような瞬足の馬車で天空に駆け上り、あっという間に流れ去る彗星をつかまえるようなもので、望んでも決して得られるものではないという屈原の諦念または虚無感を示すものではなからうか。

³⁸⁷ 『續群書類従 31 上・雑』101 頁

³⁸⁸ この解釈には若干の疑義がある。例えば、広義の「セリ」と狭義の「セリ」とは異なる。広義では、セリ科セリ属の植物とその近縁種や類似種を広く含む意味をもつが、狭義では、セリ (*Oenanthe javanica* (Blume) A.P. de Candolle) のみを指すことになる。『史記』の「司馬相如列傳」にある「蕙圃(香草園)」には、同一種の範囲にある植物でも異なる特徴をもつ様々な品種が植えられていたのかもしれない。

³⁸⁹ 『漢書音義』については、遠藤由里子「裴駰『史記集解』に引かれる『漢書音義』(一)」梅光女学院大学論集 27 卷 109~120 頁、同「裴駰『史記集解』に引かれる『漢書音義』(二)」同誌 29 卷 82~92 頁、同「裴駰『史記集解』に引かれる『漢書音義』(三)」同誌 30 卷 1~11 頁、同「裴駰『史記集解』に引かれる『漢書音義』(四)」同誌 32 卷 1~11 頁、大島正二「顔師古漢書音義の研究(上)」北海道大學文學部紀要 17 卷 1 号 45~238 頁、同「顔師古漢書音義の研究(下)」同誌 19 卷 4 号 1~85 頁が参考になる。

³⁹⁰ 川芎 (*Ligusticum wallichii*) は、園芸品種名としては、「*Ligusticum chuanxiong hort.*」としても流通していることがある。「*chuanxiong*」は「芎藭」の中国語発音と同音。

³⁹¹ 前掲『北村四郎選集 II 本草の植物』169~170 頁は、「川芎」等として流通しているマルバトウキ属植物 (*Ligusticum*) について、「所属と学名については検討が必要である」との結論を示している。

³⁹² Christophe Wiart, *Medical Plants of China, Korea, and Japan*, CRC Press, 2012, pp. 367-368 は、*Cnidium monnieri* (L.) Cusson が「蛇床」に該当するものとし、また、その Basionym を「*Selinum monnieri* L.」と記載している。同書には、他のハマゼリ属植物 (*Cnidium*) は収録されていない。

³⁹³ 藁本については、前掲『荀子』の蘭(1) 11 頁、前掲『荀子』の蘭(3・完) 29 頁でも述べた。

³⁹⁴ http://www.efloras.org/florataxon.aspx?flora_id=2&taxon_id=242329472 [2015 年 9 月 4 日確認]

³⁹⁵ http://www.efloras.org/florataxon.aspx?flora_id=2&taxon_id=242444034 [2015年9月4日確認]

³⁹⁶ 前掲 *Medical Plants of China, Korea, and Japan*, pp. 358-359 は、ヨロイグサ (*Angelica dahurica*) を「白芷」としている。

³⁹⁷ 中国では、様々な属に含まれるセリ科植物が混同されたり、別の植物が代用品として用いられたりしたことがあったし、現在もある。その意味では、厳密に考えてみてもあまり意味がないかもしれない。なお、この関連では、寺林進「日本薬局方における生薬の原植物の学名」日本植物園協会誌 49 号 33~35 頁が参考になる。

³⁹⁸ 前掲『東洋蘭譜』6 頁

³⁹⁹ 前掲『保久利—伝統的な有用植物の特定と法的課題』47 頁

⁴⁰⁰ 早稲田大学所蔵の版の『秘伝花鏡』巻五の「歐蘭」には「ハクリ」と読みが記載されており、その記載内容からしてシュンラン (*Cymbidium goeringii*) を指していると理解することができる。

⁴⁰¹ 日本における東洋蘭の園芸史については、辻幸治「そもそも東洋蘭はいつの時代から? 資料から探る近世蘭花小史」自然と野生ラン 2014 年 12 月号 40~45 頁が参考になる。

⁴⁰² 『金漳蘭譜』の日本語訳としては、佐藤武敏編訳『東洋文庫 622 中国の花譜』(平凡社、1997) がある。

⁴⁰³ ここで「魚」とは稚魚のように全体に透き通って見えるものを指すと考えられる。子供の頃に田圃や小川で小魚を捕って遊んだ経験のある者ならすぐに連想できることだと思う。

⁴⁰⁴ ラン科シュンラン属 (*Cymbidium*) に属するランの園芸品種には様々な奇花品がある(前掲『中国蘭花—奇花芸研究及奇花名品鑑賞』参照)。近年作出された品種の中にはフラスコ苗特有の奇形が混在している可能性がある。しかし、野生の奇花については謎の部分が多い。この点に関して、秦泉寺道「シュンランの故郷を知る「鳥取編」—鳥取の地質・地形・歴史・風土について」園芸 Japan 2015 年 10 月号 60~63 頁は、非常に興味深い考察結果を提供している。鳥取砂丘に関しては、大竹義則・林正久「中国地方の地形環境 1—鳥取県・島根県・岡山県—」徳山大学総合研究所紀要第 27・28 号 18~74 頁が参考になる。

⁴⁰⁵ 山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界 下』(思文閣出版、1995) 3~77 頁

⁴⁰⁶ これらの植物が該当するものとして同定するという趣旨ではない。

⁴⁰⁷ 前述の莎葉蘭 (*Cymbidium cyperifolium*) についても検討すべき余地がある。

⁴⁰⁸ 子蘭は、懐王の末子で、懐王のあとを継いだ頃襄王(前 263 年没)の末弟にあたる。頃襄王は、子蘭を楚の令伊(宰相)とした。

⁴⁰⁹ 蘭花のもつこのような生態は、前掲『玉造小町子壮哀書』に出てくるうらぶれた老女の人生そのものと似ているような気がする。

⁴¹⁰ 屈原が真の愛国者だったが故に楚国以外に仕官することなど全く念頭になかったと想像することは可能だろう。

⁴¹¹ 中国の江南では岳飛(1103~1142)の人气が極めて高い。岳飛の生涯は、屈原のそれと相似し重なるような部分が多い。それゆえ、楚の國のあった地域に住む人々にはことさら愛されることになるのだろうと思う。

⁴¹² 本稿は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成 23 年~平成 27 年度)による研究成果の一部である。